

30354 ✓

教科書文庫

| |
|---------|
| 3 |
| 810 |
| 51-1894 |
| 20000 |
| 34400 |

M27.
1894

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

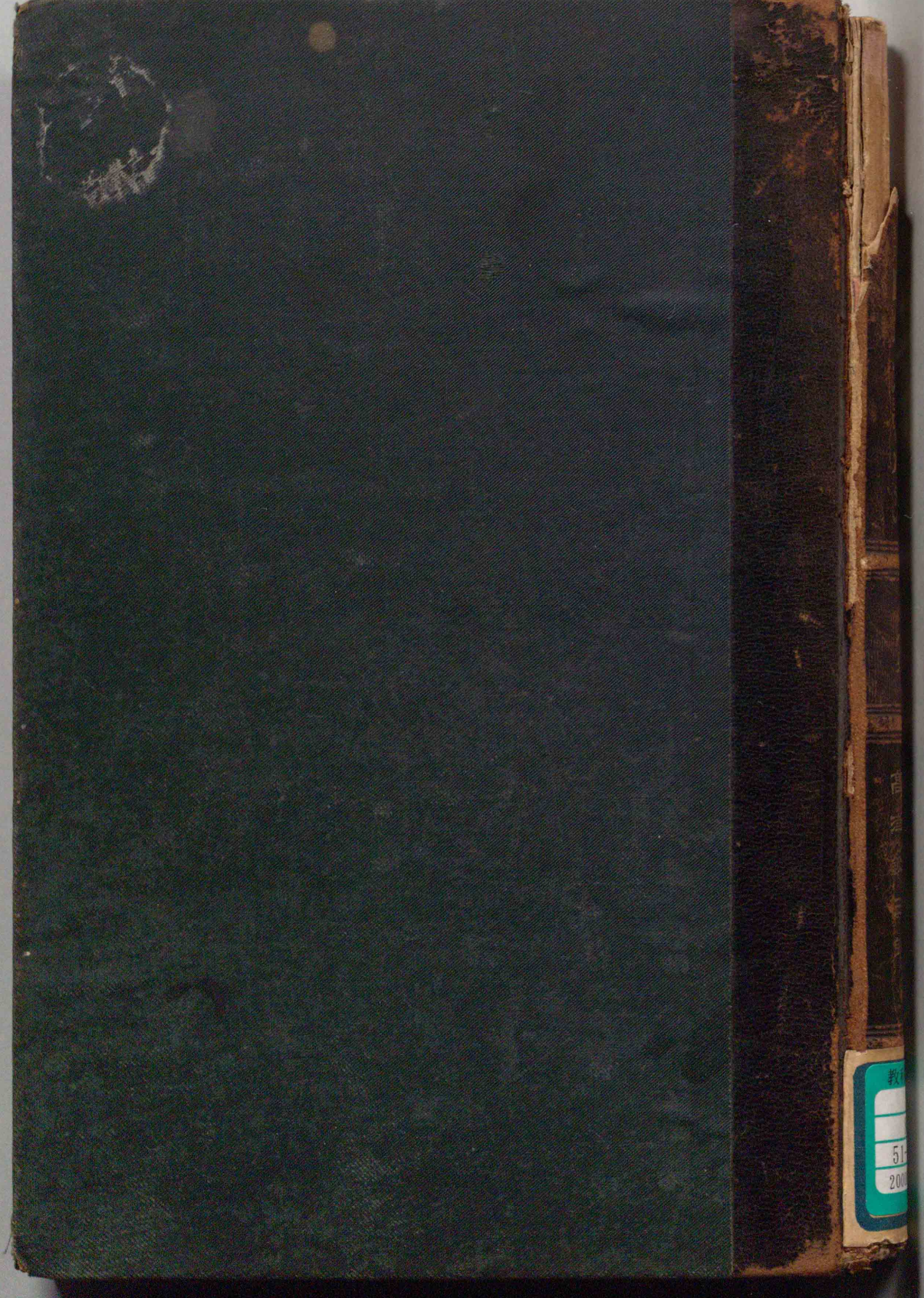
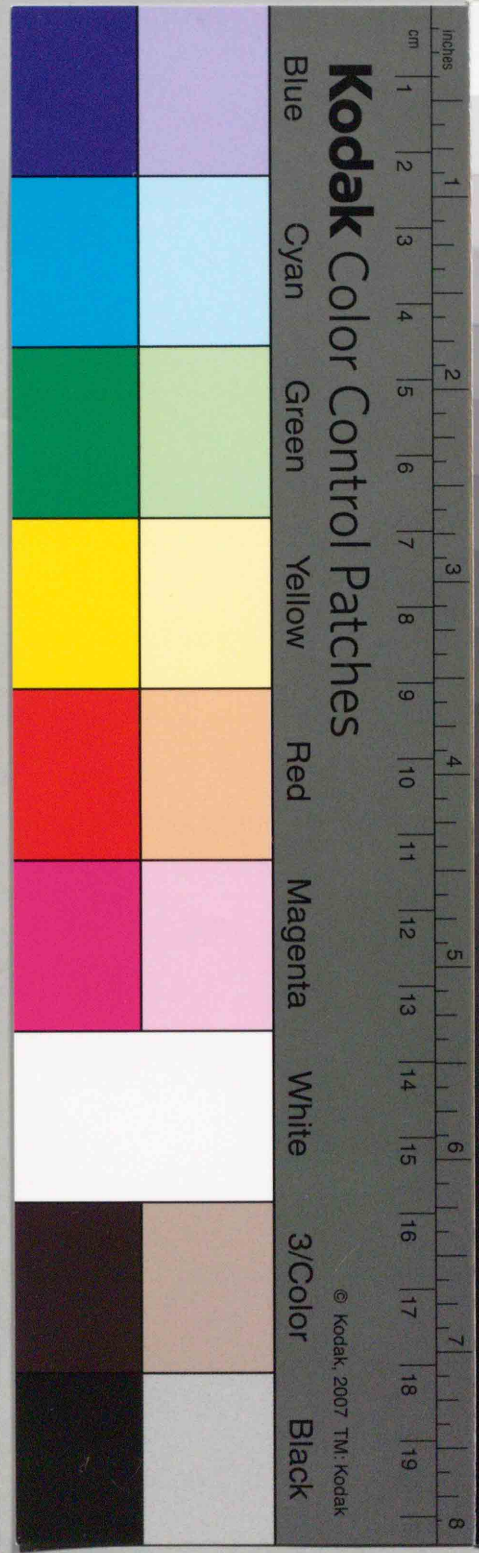


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



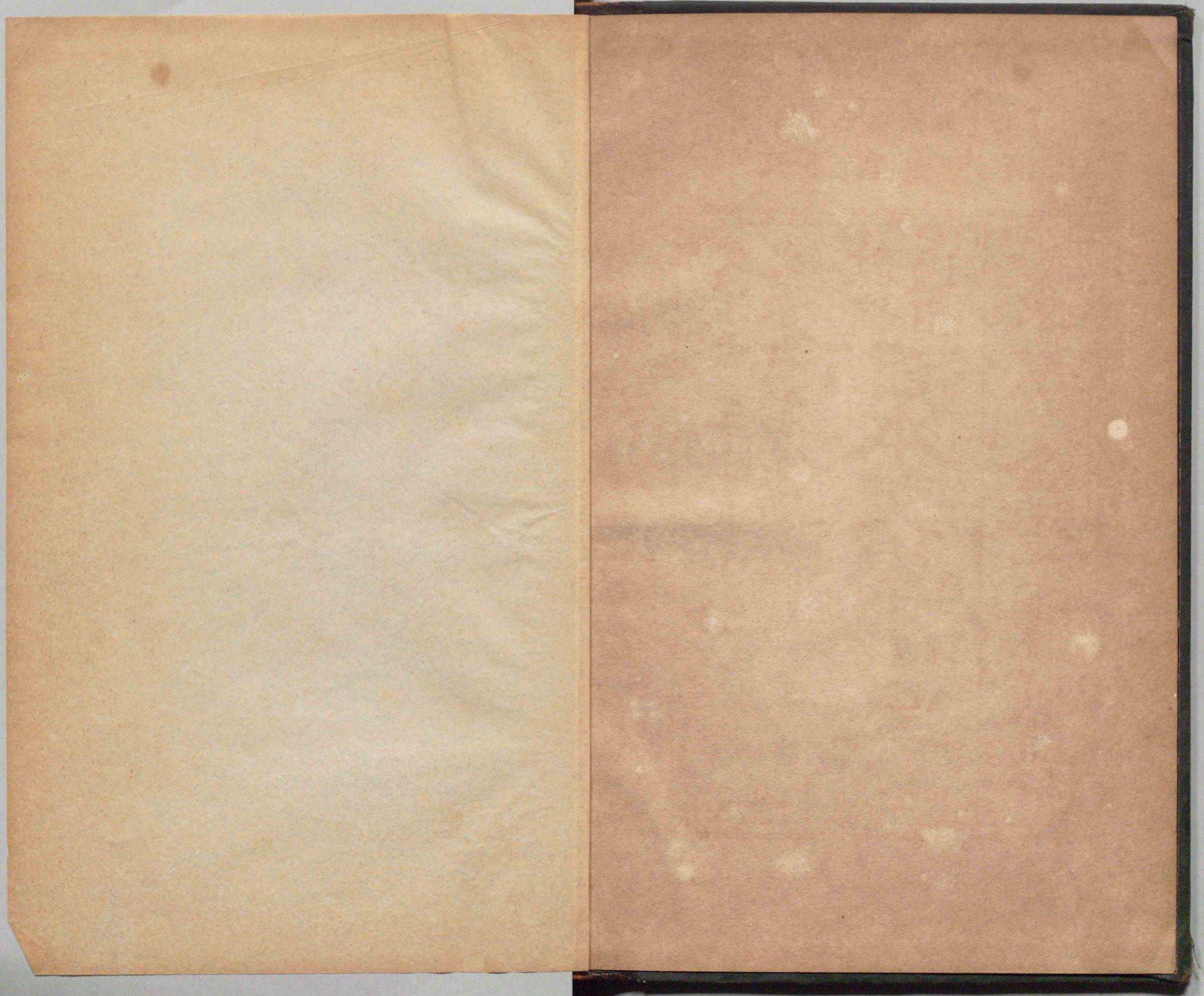
教
51
2000



教科書文庫
3
810
51-1894
2000034400

3759
1894

| | | |
|-------|---|---|
| 記号 | 國 | 1 |
| 番号 | 3 | 6 |
| 一部ノ册數 | | 2 |



明治廿七年八月十七日

文部省檢定濟

文學士 三上參次
文學士 高津歙二郎 著

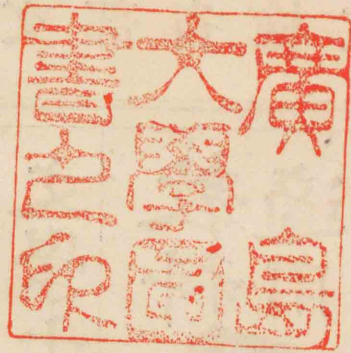
教科 適用
日本文學小史

東京 金港堂書籍會社

広島大学図書

2000034400





緒言

余輩さきより日本文学史を著はして、之を公せしむ、未だ周歲
おらずして、三たびその板を改むるに至りぬ。然るに、地方の師
範學校中學校等より於て、國語を教授せらるる諸氏より、日本文
学史は、巻帙稍浩瀚にして、教場に用ふるに便ならず。之を縮
約して、教科用書に適せしめよと、勸誘せらるることしばしば
あり。加之、昨年七月、文部省の師範學校令を改正して、國語科の
中に、文学史をも課することゝおされつ。中學校もまた、一般
にさることゝならん。是に於て、余輩の勸誘せらるることさら
に切なれども、余輩の、この文学史の緒言にも述べしごとく、一
段詳密なるものをこそ著さんといおもへ。在来のもものを縮

約せんといふ思はざりき。されども、熟ら考ふるに、既し不便を忍びて、かの文學史を教科用書とせる學校さへありとのことなれば、諸氏の勸誘もまた實に理あり。乃ち、冬期の休暇を幸として、之を改竄し、以て教科用に適すべからしめたり。この書を出板する次第かくのごとし。されば、之を教場に用ひらるゝ教員諸氏は、余輩の日本文學史を參看せられなば、多少の利益あるべしと信ず。また文學史を教授する上に於て、注意すべき點のごときは、既にその緒言に於て述べおきたれば、こゝには贅せず。

明治廿六年三月

著者 玄 齋 著

教科適用 日本文學小史上卷目錄

總論

文學史とは如何なるものぞ……文學史の効用、何をか文學といふ……國文學……文學の起源及び發達……文學の種類……散文韻文の別……一丁

第一編 日本文學の起源及び發達

第一章 漢字及び漢籍の傳來……漢音、吳音の別……一丁

第二章 佛教の東漸、大化の改新、人心の變遷……一四丁

第三章 奈良時代以前の文學……上古の歌謡……一八丁

第二編 奈良時代の文學

第一章 總論……奈良時代の政治……大學國學……漢學

の隆盛、國史の編纂……二四丁

第二章 萬葉假名及び片假名の發達……二七丁

| | |
|-----------------------------|-----|
| 第三章 奈良時代の散文……祝詞……其文例…… | 三一丁 |
| 宣命……其文例…… | 三五丁 |
| 古事記……其文例…… | 四一丁 |
| 風土記……其文例…… | 四六丁 |
| 第四章 奈良時代の和歌……萬葉集……其書法、其部分…… | |
| 其歌數……和歌の變遷……和歌に及ぼせる漢學、佛法の | |
| 影響……萬葉集の歌の作者……柿本人麿、山部赤人、山上 | |
| 憶良、大伴家持…… | 四七丁 |
| 柿本人麿の歌…… | 五七丁 |
| 山部赤人の歌…… | 六四丁 |
| 山上憶良の歌…… | 六七丁 |
| 大伴旅人家持の歌…… | 七一丁 |
| 笠金村額田女王、大伴坂上郎女作者未詳の歌…… | 八〇丁 |
| 旋頭歌及び短歌…… | 八五丁 |

第三編 平安時代の文學

| | |
|-----------------------------|------|
| 第一章 總論……平安時代……此時代の政治、風俗……學 | 八八丁 |
| 校及び漢文學…… | 九五丁 |
| 第二章 平假名の制作…… | 九七丁 |
| 第三章 物語……其起源……其種類…… | |
| 竹取物語……伊勢物語……住吉宇津保、其他の物語…… | 一〇〇丁 |
| 竹取物語、伊勢物語の文例…… | 一〇七丁 |
| 紫式部……源氏物語……其作られたる次第……其結構 | 一一五丁 |
| 其註釋書類……其文章…… | 一二六丁 |
| 源氏物語の文例…… | 一三六丁 |
| 第四章 日記及び紀行……紫式部日記、蜻蛉日記、和泉式部 | |
| 日記、讚岐典侍日記、土佐日記、更科日記等……紀貫之…… | 一四一丁 |
| 土佐日記、紫式部日記、更科日記の文例…… | 一四一丁 |

教科
適用

日本文學小史上卷目錄終

第五章 草紙……清少納言……枕草紙……枕草紙と源氏
物語との比較……其文例……一五一丁

第六章 雜史……榮花物語其作者……大鏡其作者、宇治大
納言物語(今昔物語)源隆國……宇治拾遺物語……一六〇丁

榮花物語、大鏡、宇治大納言物語、今昔物語、宇治拾遺物語の
文例……一六四丁

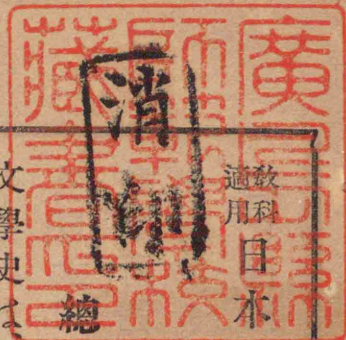
第七章 和歌及び歌序……和歌の盛衰……古今集の勅撰
此集の有名なる歌人……歌躰、歌語の變遷……歌序……一七七丁

古今集の序……古今集の歌……一八三丁

梨壺の五人……後撰集、拾遺集、後拾遺集、金葉集、詞華集、千
載集……歌調の變遷……藤原俊成……歌人の奇行……

神樂、催馬樂等……一九三丁

後撰集以下の歌……二〇二丁



教科
適用
日本文學小史上卷

論

文學士 高津 鋏三郎 著
文學士 三上 參次

文學史は歴史の一種にして、文學の起源發達等を記るまじものなり。歴史の本躰にも、世界史と、各國史との別あるが如く、文學史にも、また、世界文學史と、各國文學史との二種あり。前者は、普く各國を綜合して、人智の發達進歩を、文學の上より觀察したるものなり。後者は、一國內にあらばれたる文學上の現象を、歴史的に叙述したるものなり。

歴史の中にも、文明史は、殊に事實の原因結果を明かにし、以て、智識道德の發達を示すものなれば、文學史は、其一部分なる事、固より

言を要せず。然れども、文章、詩歌は、最も能く、人の思想感情のあらはれたるものなれば、人間の發達を知るには、此上なきものなり。抑も文學は、政治、宗教の爲めに動かされ、人情、風俗の變遷に伴ふものなれども、文學、益發達するに及びては、文學、其物のうちに、一種の元氣を蓄へ、却つて政治、宗教、人情、風俗を左右するの力を有するに至る。余輩、日本、支那、西洋、各國の歴史を通觀するに、實に、文學は國家の盛衰興亡に關する事の至大なるを見る。我國に文學の發生せしより今日に至るまで、歲月決して短きに非ず。然れども、其間かつて日耳曼、以太利、西班牙等の如く、文學の中絶せし事なし。かの室町時代の後半、所謂亂世の時といへども、なほ文學の見るべきもの現はれたりき。さて、この長年月の間に現出せし、本邦各種の文學を總括して、之を西洋諸國の文學に比するに、彼に及はざる處甚だ少からずと

いへども、其特有の長處、また多きを見る。之を要するに我國は實に英吉利、佛蘭西等の如く、完全なる文學史を有し得る國なりといふべし。

それ、文學史は、前にも云ひたるが如く、人の智徳の進歩せし蹤跡を示し、併せて、其時代の人情、風俗、嗜好等の、如何なりしかを知らしむるものなれば、實に人をして見聞を廣くし、智識を増さしむるのみならず、之に因りて其人の思想、感情、想像をも高尚にし、其嗜好をも優美ならしむるの効用あるものなり。

さて、文學とは、如何なるものをいふかと云ふに、古來學者の説一ならず。文法を以て文學なりと云ひし學者あり。或は汎く一般の學問といふ意に、文學といふ文字を用ひたるあり。或は文學とは、人の思想を表明したるものなりといふあり。また支那は、古來學術の開け

たる國なれば、文學といふ語も、早くより用ひられたれど、其意味も
た一定せずして、さまざまに用ひられたるが如し。而して或る一派
の漢文學者は、文學の本は、道義を明かにするに在り。文學の用は政
教を輔くるに在りといふ。斯くの如く文學といふ語の意義は一定
せずして、今日に至りても科學としては取扱はれず、恐くは未來も
また然らん。されど科學上の書中にも、文學上の價值を有するもの
あるを忘るべからず。余輩は試みに之が定義を下さんとす。

文學とは、文字によりて、巧みに人の思想感情想像を表はしたる
者にして、實用と快樂とを兼ね、且つ、大多數の人に、大體の智識を
傳ふるものなり。

此の如く、文學の定義を下す時は、法律の文章にても、或は政治の文
章にても、或は哲學、或は歴史の文章にても、各その専門の目的には

關らず、其文章の面白きより、多數の讀者に喜ばるゝ時は、孰も之を
文學として觀るべきなり。故に、法律としては、價值なきも、文學とし
ては、大なる價值を有するもの、あり得べきなり。今述べたる文學の
定義は、廣く取りすべて云へるものにして、何國の文學にも適用し
て不可なきのみならず、特に、かの所謂世界文學といふものに適合
すべし。然れども、文學は、もと人の作り出したるものなれば、勢、内外
の森羅萬象によりて、種々なる影響を蒙らざるを得ず、而して、其影
響は同一なる邦國內に在りても、人によりて一様ならず。況んや、東
西處を異にし、人情、風俗、言語、宗教、制度等の齊しからざる邦國に於
てをや。各國の文學に、各殊異なる現象を呈するは當然の理なり。か
く邦國によりて、其國民固有の特質を具ふる文學を指して國文學
といふなり。

此の如く、各國の文學をして、其特質を備へしむるには種々なる原因あれども、第一には國民固有の特性なり、近來世に云ふ國粹とは即ち是なり。次に、邦國の位置、土地の形狀、氣候の寒暄、天象の異動、山川の景色、動植物の有様等、すべて人の周邊の事物より、政治宗教等の如き、民情を動かし人心を刺撃するものは、即ち其國文學に影響を與ふるものなり。此等の現象を蹤跡するは、文學史の要務なり。されば、一國の文學といふものは、一國民が其國語によりて、その特有の思想、感情、想像を書きあらはしたる者なりといふべきなり。次に文學の起源及び發達を説かんに、人々の思想、感情、想像を表はすには、形語、繪畫、音樂、彫刻品、建築物等の如き方便、甚だ多しといへども、精細緻密にして、變化極りなき心裡の現象を表はすには、言語より優れたるものなし。然るに、言語は人の口より出づる聲音にし

てもとより無形のものなれば、之を久しきに遺し、遠きに傳ふると能はず。されば、聲音の符牒、言語の記號たるべきもの、自から發明せらるゝに至る。こゝに於てか、文學始めてその嫩芽を發生す。我國にては、片假名平假名の發明こそ、實に國文學の發達を促したるものなりしか。

かくて、文學發達の次第を考ふるに、人智未だ開けざる社會の文學は、感情より湧き、想像より生れたる者多し。詩歌の如き即ち是れなり。此詩歌は實に不文の文學ともいふべきものにして、真正文學の萌芽の、未だ地中に埋伏せるものといふべきものなり。されば、何れの國にても、最初の文學は、概ね詩歌の類ならざるはなし。然るに、文字の發明ありし上は、思想感情等も思ひのまゝに、書き記すとを得べければ、是に於てか散文體の文學あらはる。即ち、論說、歴史、記行、日

記、小説の類もあらはるゝなり。かくの如く、始には韻文あらはれて、後に散文の出づる所以は、右に述べたるが如く、一つには文字との關係にも因るべけれど、また一つには、人智の進歩にも因るなるべし。そは、未開の民は推理の力に乏しけれども、想像の力に富む者なれば、其心内の現象を發表するに當りても、感情想像を旨とせる詩歌によりしこと勿論なり。然るに、散文は主として理論を述べ、事實を記するものなれば、判断推理の力に富むものならでは能はず。而して人智益開くるに隨ひ、遂には文學を以て、一種の樂とし、之を弄びて精神上の快樂となすに至る。こゝに於てか、考案を積み、想像をめぐらして、文章上の美をも企圖するもの出でて、文學次第に進歩の途に就くは、各國皆、其歸を一にせり。

の思想、感情、想像を、率直に文字を以て書きあらはしたるものなり。通常、文章といふもの即ち是なり。散文の中にも、文の体裁によりて、論説記叙等の別をたて、また、文の本質によりて、小説、日記、紀行、史傳、歴史等の別を始めとし、哲學、法律、宗教、政治上の文學となる。推理を主とするあり。事實を主とするあり。想像を主とするあり。或は此三者を交ふるあり。次に韻文(律語)とは、即ち詩歌なり。詩歌には、押韻せるものと、せざるものとあり。特に和歌の如きは、韻文とは稱へがたしといへども、まはらく便宜の爲めに、之を韻文と稱す。而して韻文(律語)も、また散文の如くに、人の思想、感情、想像を、表はしたるものなれども、理論、事實よりは想像を主とするなり。また、その想像を述べらるるにも、散文の如くに率直にして、自由なること能はず。孰れの國にても、詩歌には、嚴格なる規則のあるものなり。其規則は國語の性質

によりて同一ならざるなり。

抑も詩歌は、もと折りに觸れ物に感じて、喜怒哀樂戀愛の情を巧みに言ひあらはしたるものなれば、之を聽く者をして、自から同感を起さしむべき聲調を有するものなり。故に詩歌は、古へより言語の音樂とも云ひ、極めて聲調を重んじたり。然れども、後世の如く、峻嚴なる規則を設けて、之を拘束する事はなかりき。

我邦の文學は、極めて豊富にして、他國の文學にあるほどの種類は、殆んど網羅して缺くる處なし。特に、わが國特有の種類、他邦に誇るに足るべきものもまた少しとせず。そは一々茲に述べず。この文學史中に於て、自から明瞭なるべければなり。

第一編 日本文學の起源及び發達

第一章 漢字及び漢籍の傳來

凡そ國文學の發達を詳かにせんと欲せば、先づ其國の文字の起源を探らざるべからず。而して我國の上古には、文字なし。我が國文學は、全く漢字の傳來によりて開けしなり。漢字傳來の前に、既に本邦人の間には、神代文字を用ひたりと云ふ説あり、其字形さへ種々ありて、就中、日文といふもの特に有名なり。されど、この日文の字形は、朝鮮文字と殆んど同様なれば、思ふに彼國より傳來せしものなるべく、その行はれたりし蹤跡は殆どあることなし。また、たゞひ之を本邦固有の文字なりとするも、この文字によりて、表はされたる文學上の文書は、一もあることなし。されば本邦の文學は、漢字の傳來

を待ちて開けたりといふべきなり。さて漢字の傳來せし年代は、詳かに之を知ること能はざれども、神武天皇の紀元を距ること、五六百年頃即ち崇神天皇の前後には、我國と朝鮮及び支那との交通甚だ盛にして、彼我の人民相往來せしかば、先哲の考證には、この頃漢字を本邦に傳へしならんといへり。或はそれより以前に、早く傳はりたるかも計りがたし。然れども、學問の正しく開けしは、應神天皇の朝に、百濟より漢文學者の、阿直岐、王仁の兩人來りて、論語及び千字文を傳へ、皇子稚耶子に經典を教授せしに始れり。此兩人は終に本邦に歸化せり。其子孫次第に繁衍して、大和、河内の兩國に居り、東西の史部といひて、世々文筆の業に従事せり。漢籍の傳來より殆ど一百年を経て、履中天皇の四年には、諸國に史官を置きて、各地の事を記るさしめ、また雄略天皇の朝には、東西の史部に命じて、出納を

勘録せしめ、秦酒公をして大藏の記簿を掌らしめ、欽明天皇の朝には、王辰爾に命じて、船賦を録せしめたるが如き、記録の必要次第に多くなりしのみならず、繼體天皇の朝には、五經博士及び、醫、易、曆道等の博士も來朝して、學藝漸く開けしほどに、上古の歌謠或は語り傳へたる古事なども、次第に漢字に依りて、書き記るされしなるべし。

さて今日の漢字には、漢音、吳音の別あれど、原來未かりしにはあらず。支那東晉の末葉に、鮮卑の諸族中國を蹂躪して、天下は南北の兩朝と分れしが、漢以來の古音は、南朝に存して、その雜糅なる音は、北朝に屬したり。然るに南朝は、古の吳の地に都せしかば、其音を吳音と稱し、北朝は、古の漢の地に在りしを以て、其音を漢音と稱す。而して、始め我國に入りしは、吳音なりき。古事記の専ら吳音なるを見て

も知るべし。また漢音の我國に傳はりたるは、推古天皇の朝に、隋と交通を開きしに始まる。これ、隋は漢音の國より起りて、南北兩朝を一統したればなり。然れども、發音の同じからざる、我國に入りしことなれば、漢音吳音、いづれも多少其固有の發音を變せし事疑なかるべし。

第二章 佛教の東漸、大化の改新、人心の變遷。

漢籍の渡來は、我國の文運を開き、佛教の東漸は、大に漢學の進歩を促したり。佛教は欽明天皇の十三年に、百濟より傳へたりしが、其經は皆な漢文なりしかば、佛教の流行は間接に漢文を獎勵せり、然るに推古天皇の朝に、留學生を唐に派遣せられしは、直接に漢文學の進歩を促したり。さればこの天皇の朝には、聖德太子は漢文を以て、

十七條の憲法を書き、經文の註釋を作り、また馬子と共に、始めて國史を編纂せられたり。この國史は蘇我氏の亡びし時、共に失せて、いふ見ることを得ざれども、十七憲法は今日に存在せり。是等の文章の外に、此時代の文章にして、現存せるものは、伊豫の道後の温泉の碑文、大和の法隆寺なる佛像の銘等にして、孰れもみな漢文跡ならざるはなし。

さて、漢學は忠孝を説き、仁義を旨とし、かねて鬼神を敬し、祖先を尊べは、斯學の傳來流行も、更に本邦固有の風俗と撞着する處なかりき。然るに佛法の東漸と、唐土との通交とは、何れも著しく我が人情風俗を變化せしめ、隨ひて我が文學の上にも、大なる影響を與へたりき。かの王朝時代の艶麗なる文學を觀察せば、如何に其感化力の大なりしかを知り得べからん。

我國の古代は、祭政一致にして、ただ天子は神祇を祀らせ給ひて、人民は天子を現神として之に奉仕したりき。この風習は漢學の渡來に遭ひても、變ることなかりしが、佛教東漸以後に至りては、甚しき影響を受け、天子の弑逆に遭ひ給ふも、過去の報なりといひ、また親ら萬乘の尊を以て、三寶の奴と稱せらるゝに至りしかば、人民もまた王法は如何にもあはれ、佛法には違ふまじと思ふに至れり。此の如く人心の變遷したるは、獨り無形の佛法の力のみならずして、衣冠宮室の有様より、繪畫、彫刻、舞樂等、すべて有形上の技藝製作の類も、この變遷を促しゝなり。抑も佛法の東漸は、主として皇室の威嚴を損じ、權臣の專横を來したるが如き、その弊害著しかりしも、其弘通は唐風の模倣と相合して、我國文化の發達を助けたりしこと、亦疑を容れざるなり。

佛法の傳來、隋唐との交通に次いで、政治上の大變動こそ起りたれ。これ即ち大化の改革なり。こは神武天皇以來一千三百有餘年間、行はれたる政躰を一變して、中央集權の唐制に倣ひ、政府の組織を一變せられしなり。これもまた大に民心の變動を起さしめたり。又、孝徳天皇の時には、高向玄理、僧旻を博士として、大に漢學を奨勵し、天智天皇の時には、學校を興し、文武天皇の時には、大學に、諸道の博士を置き給ひき。されは漢學の進歩も著しくして、弘文天皇、大津皇子の如きは、巧みに唐詩をさへ作らせ給ひき。其他律令の撰定の如き、壬申の變亂の如き、何れも人心を動さざるはなかりき。かくて是等の事變は、すべて人心を刺撃して、智識を啓發せしかば、其結果は忽ち次期の文學の上に於て現はれたり。

第三章 奈良時代以前の文學

漢學渡來して、我が國の文學始めて其嫩芽を生じ、爾來漢學佛敎の爲めに培養せられて、稍、生長したれども、柿本人麿の出でし頃までは、我國の文學として見るべきものは、古事記、日本紀に載れる歌謠と、延喜式の祝詞、續日本紀の宣命及び、古事記風土記の中なる、文章のみ。茲には先づ歌謠のみを擧げて、其外は便宜によりて、之を奈良時代の處に述べんとす。さて、古事記及び日本書記の中に載せられたる歌謠は、能く當時代百事の簡樸なりし状態を直寫して、別に熟考せざりし跡を見るべきなり。今、素盞之男尊の詠歌をば、二、三の例を擧げて、上古歌謠の躰裁を示さん。

素佐之男尊出雲の國、皷の川上に到り、櫛名田姫と相住ま

んとて、須賀の宮を作り給ひし時、雲の立ち上りたるを見て詠み給へる歌。

八雲たつ出雲八重垣妻ごめに

八重垣つくる其八重垣を

天若彦殺されけるとき、あぢすき高彦根の神、來り吊ひ給ひしに、其容貌の似たるより、死せる天若彦の生き返りたりと誤認せられ、大に怒りて飛び去り給ひし時に、下照姫の詠み給へる歌。

| | | | |
|---------------|--------|-----------|--------|
| 天なるや | 弟たなばたの | うながせる | 玉のみすまる |
| みすまるに | あな玉はや | みたにふたわたらす | |
| あぢすきたかひこねの神ぞや | | | |

神武天皇兄猾を誅し給へる時、詠み給へる歌。

| | | | |
|--------|---------|---------|--------|
| 宇陀の | 高城に | しぎわな張る | 我がまつや |
| 鳴はさやらず | いすくはし | 鯨さやる | こなみが |
| なこはさば | たちそばの實の | なけくを | こきしひえぬ |
| うはなりが | なこはさば | いちさかき實の | 多けくを |
| こきだひえぬ | | | |

神武天皇兄磯城を討ち給へる時、皇軍やゝ疲れしかば、天皇即ちよみ給へる歌。

| | | | |
|--------|--------|-------|---------|
| たゝなめて | いなさの山の | 木の間ゆる | いゆきまもらひ |
| 戦へば | われはや飢ぬ | 島つ鳥 | 鶺鴒が伴 |
| 今すけに來ぬ | | | |

人皇の御代となりては、神武天皇を始として、歴代の天子皇后に、す
 られたる歌をよみ給へる最も多し。特に、應神、仁徳、允恭、雄略、武烈、推
 古の諸帝、媛、蹈鞬、五十鈴、姫、磐之、姫等の諸后は、最も巧妙に渡らせ給
 へり。其外、衣通、姫、影、媛、勾、大、兄、皇子、平、群、鮪、蘇、我、入、鹿、等、皆、秀、歌、あり。然
 れども、これらを歌人とし、文學者として視るべからざるは、勿論な
 り。當時、歌を作るとの容易なりしは、之を對話の場合にまで用ひた
 るを見て知るべきなりかの、大久米命が、神武天皇に、伊須氣余理、姫
 をすゝめ給ひし時の如き、又、日本武尊が、東夷を征伐し、甲斐の國に
 至り、酒折の宮にて食を召し給ひし時に、にひはり筑波をすきで、幾
 夜かねつると、侍者にたづね給ひければ、傍に侍りたる、賤の翁、之に
 答へて、「かゝなべて夜にはこゝの夜、日には十日を」と云ひしが如き、
 以て古へ下賤のものといへども、なほよく和歌を詠せしとを知る

べきなり。當時の歌は、すべて天真爛漫の一語を以て評すべく、後世の如く規矩を設けて、制作したるものにはあらざるなり。而して人の情の中にて、最も初に發達して、最も勢力あるものは、男女相愛の戀情なり。蓋し此情は、古今東西の差なく、貴賤賢愚の別なきものなれば、我國古代の歌謠にも、男女贈答の歌、最も多きは別に怪むに足らざるなり。かの歌垣の歌の如きを見て、も知るべきなり。尤恭天皇の、藤原の宮に幸し、密に衣通姫を見給ひしに、この夕、姫は天皇を戀ひて、獨り思に沈み、天皇の臨御ありしを知らずして、

わかせこが來べきよひなりさゝがにの

くものちこなひこよひまるしも

と、詠み給ひしが如き、三十一文字の歌にして、其調の最もよく整ひたるものなり。尙、歌麿のとは、後にいふべし、稍下りて推古天皇より、

天武天皇に至るまで、八代九十餘年の間は、社會大に開け、漢學進歩の影響によりて、文字を用ふる事も大に自在になりしかば、文學も著るしき進歩をなせり。そは古事記、日本書紀に載れる歌謠と、萬葉集のとを比較せば、優劣自ら知らるべし。

第二編 奈良時代の文學

第一章 總論

茲に奈良時代と稱するは、通常、歴史上にいふよりも、其年數稍長くして、持統天皇の朝より、平安奠都の頃まで、凡、九十餘年間を總稱するなり。これ柿本人麿を始めとして、元明天皇が、都を奈良に奠め給ひし以前に、あらはれたる文學者、甚だ少からざればなり。

此九十餘年間は、大化の改革の後にして、政治上には著しき變動なし。始め四十餘年間は、政令能く行はれて、文武並び進みたりしが、下りて聖武天皇の時には、天皇深く佛法を信じ、盛んに堂塔を建て、寺領を寄附し給ひしかば、國庫は漸く空耗を告げ、また佛法の爲めには、國家の大法をさへ曲け給ひしかば、朝威の衰ふる一因となりぬ。然

れども文學は益、進歩したりき。是より先き、天智天皇、始めて學校を創め給ひしが、後に大寶令の制定せらるゝに及び、京都には、大學、諸國には、國學を置かれぬ。當時大學には、明經、紀傳、明法、算道の四科の専門學を設けられたりき。されども、其目的たる、普く學生を教育するにあらずして、主として官吏の養成にありしかば、其入學の資格も、頗る嚴重なりき。

斯くの如く、朝廷にては漢學を獎勵せられしかば、淡海三船、吉備眞備等の如き、漢學者相踵いで出で、漢文學上の著作、頗る多くあらはれたり。即ち古事記の序文の如きは、推古天皇の時に作られたる漢文に比すれば、其優等なる、實に別天地の思ひあり。而して、懷風藻の如き詩文集さへつくられたりき。特に莊麗なる漢文を以て、日本書紀を撰はれたるは、我學問上の一大事なりとす。此書は、舍人親王、太

安麿、紀清人、三宅藤麻呂等が、元正天皇の養老四年に、勅を奉じて撰びたるものにして、故老の口碑に残りたる、神代よりの傳説等に據り、諸説を網羅して、天地開闢より、持統天皇までの事實を記せしものなり。これ我國にて國史撰修の始なり。此後、次々に撰はれし續日本紀、日本後紀、續日本後紀、文德實錄、三代實錄と并せて、これを本朝の六國史といふ。日本書紀は、全篇みな漢文なれども、神代以降の歌謠などは、其文字こそ漢字なれ、國音を其儘に寫ししものなれば、余輩は之によりて、上代文學の一斑を窺ふことを得るなり。況や、我上古の事を記したるものは、たゞこの書と、古事記とのあるのみなれば、其貴重なること、固より言を待ざるなり。

既に、前編に陳べたるか、如く、推古天皇の頃よりこのかた、隋唐の事物漸次に行はれて、典禮、制度、衣冠等に、至るまで、只管彼れを摸倣せ

しのみならず、佛法冲天の勢力は、よく千有餘年來の事物を打破せしかば、人情風俗の變遷また甚だ著しかりしなり。之を要するに、佛法の流行は、勇進活潑の志氣を挫折し、唐風の摸倣は、優柔艷麗の風を馴致せり。而してその風の最も甚しく顯はれしは、平安時代なり。と雖、其の萌芽は、既に、奈良時代に於ても之を認め得べし。此外、此時代には、孝謙天皇が百萬塔の中に納むべき、經文を板行し給ひしより、印刷の業さへ起りて、大に文學の進歩を助けしが、余輩か、特に此時代に注目すべきは、片假名の發達、祝詞、宣命、古事記、風土記等の文章及び萬葉集の和歌なりとす。

第二章 萬葉假名及び片假名の發達

漢學の行はると、佛法の弘まるとに従ひ、漢字を用ひて、文章を綴

ること漸く盛んになりしかば、自ら漢字の音訓を併せ用ひて、我國語をも寫すに至れり。然れども、漢字はもと象形文字にして、毎字一定の義理を有するものなれば、我國の言語に正しく適應すべき漢字漢語を看出すこと、頗る難きのみならず、我國文は、大に漢文と其法則をも異にするを以て、假令漢字の音訓をあはせ用ふとも、之を以て、國語を其儘に寫すことは、極めて容易ならざりしなり。されば、彼の太安麿の如きは、最も漢文に長じたりし人なりしが、尙且つ、古事記の序文に、『文を敷き句を構ふること、字に於て即ち難し。既に訓に因りて述ぶれば、詞心に速はず。全く音を以て連ぬれば、事の趣更に長し。』と嘆ぜしにても、國語を寫すに、漢字漢語を以てするの不便なりしと知るべし。されば、天武天皇は、境部連石積等に命じて、特に我國に通用すべき新字四十四卷を撰はしめ給ひ、其後にも追々こ

れをつくりし人ありき。この新字といふもの、今盡くは傳らずと雖、榊峠、辻などの字は、其一なりといふ。されども、漢學の漸く進歩するに隨ひ、漢字を用ふること、亦頗る自由になりしことは、日本書紀、古事記中の歌謠などの漢音をかりて、國語を寫したるさまの、甚た巧なるを見ても知るべきなり。

この記紀中の歌謠、又は萬葉集の歌を書きたるが如く、國語を直寫するに用ふる漢字をば、萬葉假名といふ。これは漢字の音訓を主として、其字元來の意義を問はざるものなり。斯く象形文字を利用して、單音文字となしよば、我國文學に長足の進歩を促したる大原因にして、假名文字の如きも、實にこの萬葉假名より出でたるものなり。

さて如何なる順序によりて、萬葉假名より、片假名の出でたりしか

といふに、漢字は點畫複雑にして、一字を書するにも容易ならざるのみならず、其音を假りて、國語を寫すには、實に許多の漢字を連用せざれば、我が一語をだにあらはすこと能はず。且つ佛法の盛んなるに隨ひ、其經文などの傍訓、訓點等に用ひ、また佛法の講談盛になるに隨ひ、之を筆記するに、漢字の點畫煩雜にして、容易く書し難きに苦しみ、自ら簡便の法を求め、漢字に省略を加へて、一の符牒を創めけるが、漸次に弘く行はれたるなり。かく片假名は、特に佛徒の間に早く發達せしが、これを五十音圖に組み立てしは、世の傳説に云へる如く、吉備眞備なるべし。蓋しこの業たる、深く音韻の學に通じたる眞備の如き者ならでは、能しかたければなり。

片假名既に發明せられたれば、其助けによりて、漢籍の讀方も學びやすくなりしなるべく、また僅かに五十の符號をだに熟知せば、如

何に複雑なる思想、感情をも、自由に表はし得るに至りしかば、我が文學の一蹶して、直に豊富の域に入りしは、勿論のことなりとす。さて五十音の、全く整頓せしは、奈良時代の末葉なれば、その爛然たる光輝は、平安時代に於て發現せり。嗚呼我が國文學は、もと外國文字の渡來を待ちて萌芽せしものなれども、茲に假名文字の製作ありて、以て我が特有のものなりと誇ることを得るに至りしは、殊に我文學史上に於て、注意すべきことなりとす。

第三章 奈良時代の散文

我が國文學の始めて光輝を放ちしは、即ち奈良の時代にして、就中最も觀るべき價値を有する者は、萬葉集の和歌なりとす。されども散文も亦頗る發達して、即ち祝詞、宣命、古事記、風土記等の文章の如

き、皆一種の特色を具へたり。今順次に之を略述せん。

第一 祝詞 祝詞は、其文字こそ漢字なれ、純粹なる國語を寫したるものなり。神明に告白する詞にして、其要旨は概ね神怒を宥め、神心を悦ばしめて、幸福を求むるにあり。されは殊に優美にして、嚴肅なる語を擇び、また聲調の佳ならん事を欲するより、對句を設け、句節を正して、神明も賞し給ふはかりに綴りたるなり。是を以て、歌調と相距る事遠からざるなり。而して其文牀は、語りつき言ひ傳ふるに便なるのみならず、敬神の風篤くして、祭祀の制の嚴なりし我上代の事を知らんには、必ずこれを見ざるべからず。祝詞の中には、御代々々に新たに作られたるもあるべく、また古のを改削したるもあるべしといへども、古き祝詞の傳はりたるもまた少なからざるべし。今其詳細の事は知り難しといへども、加茂眞淵の説に、出雲の

國造の神壽詞は舒明天皇の朝につくられ、大祓の詞は天智天武の頃に作られしといふを、本居宣長は之を駁して、大祓、大殿祭、御門祭等の詞は、既に神武の朝にありと云へり。祝詞の中最も見るべきは、伊勢大神宮に白す祈年祭の詞、及び大祓の詞、出雲國造の神壽詞等なるべし。昔、天照大神の天の窟戸に籠りましし時、天兒屋根命の奏し給ひし諄辭は、今日に傳はらずといへども、天祖これを聞とし召して、「未だ此言の若き美麗なるはあらず」と宣ひしを見れば、是れまた祝詞の一なりしこと、疑ふべくもあらず。

祈年祭

延喜式

御年の皇神たちの前にまをさくすめかみたちの依さしまつらんあきつ御年をと、たな肱にみなわかき垂り、むかものひぢかき寄せて、取り作らんあきつ御年をと、八束穂のいかし穂に皇神たちの依さしまつらば、初穂をば千かひ、八百かひにたてまつ

りおきて、みかのへ高しり、みかの腹滿てならべて、汗にもかひにも稱へこと竟へまつらん。大野の原に生ふる物は甘菜、辛菜、青海原に住む物は、はたの廣ろ物は、はたの狭物、與つものは、へつものはに至るまでに、御そは明る妙、照るたへ、和妙、荒妙に、たへへこと竟へまつらん。御年の皇神たちの前に、白き馬、白き猪、白きかけ、くさくさの物どもを、備へまつりて、すめみまの命のうづのみてくらを、たへへこと竟へまつらくと宣る。

ことわきて伊勢にます、天照大御神の大前にまをさく、皇大御神の見はるかします。四方の國は、天の壁立つ極み、國のそき立つきはみ、青雲のたなびく極み、白雲のありむむかぶすかぎり、青海原は棹かち干さず、舟のへの至りとままる極み、大海原に舟みちつつけ、陸よりゆく道は、荷の緒結ひ堅めて、岩ね木根履みさくみて、馬の爪の至り留るかぎり、長道ひまなく立ちつつけ、さき國はひろく、さかし國は平けく、遠き國は、八十綱うちかけて、引きよすることの如く、皇大御神の寄さしまつらば、のどきは皇大御神の大前に、横山の如く打ち積みおきて、残りをば平けくきこしめさん。又、すめみまの命の御世を、たながの御世と、かきはに、ときはに、いはひまつり、いかし

みよに幸へまつるが故に、すめらあがむつかむろきかむろみのみことと、鵜じもの頸根つきぬきて、皇御孫の命の宇豆のみてぐらを、たへへこと竟へまつらくと宣る。

第二 宣命

宣命とは、國語を以て綴れる國風の詔勅にして、

續日本紀中に載するものなり。續日本紀は、もと朝廷の記録ともいふべきものなれば、乾燥無味にして、更に文章の變化、活動の妙なけれども、其中に、宣命の文の散見するは、頗る奇觀なりとす。かゝる躰例は、漢土の歴史にも、其類甚少し。然るに、朝廷切りに漢學を獎勵し給ひしより、遂に、詔勅にも全く漢文を用ふるに至れり。これより漢文にて書けるを、詔書、または、勅書と稱し。國語を以てせるを、宣命といひならはせり。宣命といふ名稱は、續日本紀の、第十の卷に始めて見え、王命を傳宣すといふ義に出づ。之を傳宣する時は、聲音の高朗なるもの之を讀み、抑揚頓挫の妙を極めたりといふ。而して其毎

段落の終りに、諸聞こし召さへど宣ると、讀めは、太子親王先づ唯と答へ、次に諸人も同聲に唯と答へしといふ。
 思ふに上代の詔勅は、すべてこの宣命といふものゝ風なりしならんに、古事記にも、日本書紀にも、記載せざれば、持統天皇より以前のは傳はらず。書記に多く載せたる華麗なる漢文の詔勅は、みな修史家が、随意に翻譯したるものなれば、意義、文詞共に、まことの上代とは異なるは明なり。實際、漢文の詔勅を用ひ給ひしは、蓋し推古天皇以降の事なるべし。さてまた宣命の文は、もと國語なりしかども、漢學佛法の盛んに行はれたる御代のもの、は漢語及び梵語の挿入せらるゝ事多く、其姿の國風ならざるのみか、其意義さへ甚だ國牀を損せしものあり。これ蓋し、時世の影響に外ならざるなり。
 上代詔勅の起草を掌りし者は、詳かならざれども、續紀中に載れる

ものは、中務省大内記の作りしものなる事は、大寶令に明かなり。後、文章博士の置かるゝに及びては、宣命を作ること、また其任とはなりぬ。もと宣命は、天下萬民に宣り聞かすべきものなれば、通常解し易きを主としたれども、また種々の文飾を施して、音調の佳ならんことをつとめ、以て聽者を感動せんとせり。されは漢學隆盛の時代にてさへ、流石にこれのみは、國語にて國風を存し、以て輓近に至れり。而して其文牀は、如何といふに、祝詞の少しく變じたるものにして、頗る通常の散文と相似ざるものなり。其用字は、漢字の正訓を用ひ、助辭の假字は、所謂宣命書きとて、多^久、故^爾の如く、割註にして之を挿み、其讀み易からん事を謀れり。

文武天皇御即位の詔

續日本紀

あきつ御神と、大八島國知ろしめす、すめらが、大御言らまど宣り給ふ、大御言をうこ

なはれるみこたちおほきみたちおみたちもこのつかさの人たち天の下のおほみ
 たからもろくきこしめさへど宣る高天原にことはじめて遠すゆるぎの御代御
 代中今にいたるまでにすめらが御子の生れまさむいやつぎに大八島國しら
 さむつきでと天つ神の御子ながらも天にます神の依さし奉りしまにまきこしめ
 しくるこのあまつ日嗣高御座のわざとあきつ御神と大八島國走ろしめすやまと
 ぬこすめらみことの授けたまひおほせたまふたふときたかきひろきあつきおほ
 みことをうけたまはりかしこみましてこの食す國天の下を整へたまひ平げたま
 ひ天の下のおほみたからを恵みたまひ撫でたまはむとなもかむなからあもほし
 めさくどのりたまふすめらが天御言をもろくきこしめさへどこのるこをもて
 百のつかさの人も四方のをす國を治めまつれとまけたまへるくにのみこ
 どもちどもにいたるまでにすめらがみかどのまきたまひおこなひたまへる國の
 法をあやまち犯すことなく明き清き直き誠の心をもちていやすすみすみてた
 ゆみおこたることなくつとめしまりてつかへまつれどのりたまふ大御言をもろ
 くきこしめさへどこのるかれかくのさまをきこしめし悟りていそしくつかへま

つらむ人はその仕へまつらむさまのまにままなほめたまひあげたまひをさ
 めたまはむものぞどのりたまふすめらがあほみことをもろくきこしめさへど
 宣る。

光仁天皇藤原永手を吊ひ給へる詔全 前

藤原の左の大臣に宣り給ふ大御言を宣るおほみことにませ宣り給はく大臣の明
 日は参あで來仕へむとまたひたまふ間にやすまりてまゐでますことばなくして
 すめらが御言をおきてまかりいまずときこしめしてあもほさくあよづれかもた
 はことをかもしふまことにしあらば仕へまつりしおほきまつりごどのつかさの
 政をば誰によさしかもまかりいまずたれにさづけかもまかりいまず怨めしかも
 悲しかもあが大臣誰にかもあがたらひさけむ誰にかもあがどひさけむどくや
 しみあたらしみいたみなしおほ御音泣かしますと宣りたまふ大御言をのる
 くやしかもあたらしかも今日よりは大臣の申し政はきこしめさずやならむ明
 日よりは大臣の仕へまつりしすがたはみそなはさずやならむ月日重りゆくまに

く、かなしきことのみし、いよゝまこるへきかも、年月積りゆくまに、さぶしき
ことのみし、いよゝまざるへきかも、あが大臣、春秋のうるはしきいろをば、誰と
にかも、みそなはし弄びたまはむ。山川の清きところをば、たれと共にかも、みそなは
し、あからへたまはむと、なげきたまひ、うれひたまひ、おほましますと、のり給ふ大御
言をのる。みまし大臣の萬の政ふさねもちて、おこたりたゆむことなく、まげかたぶ
くることなく、おほきみたち、おみたちをも、かれこれわく心なく、あまねく、平けくま
をさひ、おほみたからの上をも、ひろく、あつく、めぐみてまをさひしこと、これのみに
あらず、すめらが御門を、しまらくのまもまかりいで、やすもふことなく、をす國の
政のよくあるべきさま、天の下のおほみたからの、やすまるべきことを、あさよひ、よ
るひるといはず、思ひは、かり、まをさひつかへまつれば、いそしみ、あきらけみ、おだひ
しみ、たのもしみ、おもほしつゝ、おほましますあひだに、たちまちに、あが御門をさか
りて、まかりましぬれば、いはむすべもなく、せんすべもしらに、悔しみたまひわびた
まひ、おほましますと、のりたまふ、大御言を宣る。また、こと別けてのりたまはく、つか
へまつりしこと、ひろみ、あつみ、みまし大臣の家の内の子共をも、はふりたまはず、う

しなひたまはず、めぐみたまはむ、おこしたまはむ、たつねたまはむ、かへりみたまは
む、みまし大臣のまかり路も、うしろかろく、心もおだひにあもひて、たひらけく、さき
くまかりとほらすべしと、宣りたまふ、大御言を宣る。

第三、古事記

古事記は、元明天皇の和銅五年に、太安麿が、勅

命を受け、開闢より推古天皇まで、歴世の事蹟を記したるものなり。
我が上古の傳説を記したるは、此書最も古くして、日本書紀之に次
く。古代の書籍にして、今日に傳はるものは、上宮記(今亡びて釋日本紀に引用する文あるのみ)
聖徳法王帝説、高橋氏文等ありて、其書牀は如何にも古しといへど
も、果して何の世に作られしかば、詳かに知りかたし。されば、歴代の
事を惣叙したる書は、古事記を以て最も古しとして、不可なかるべ
し。初め天武天皇は古來の傳説の、漸く眞に遠きかるを憂へ給ひ、稗
田阿禮が博聞強記にして、且つ上世の事に委しきを聞き召して、古

傳を誦み習はしめ給ひしが、幾何もなくして天皇崩せしかば、修史の事も一旦中絶せしに、元明天皇に至り、太安麿に詔して、阿禮か口誦せし處を筆記せしめ給ひしが、即ち古事記なり。されば、其躰裁日本書紀とは甚だ異なれり。書紀は華麗なる漢文を以て綴り、且つ潤飾を施したれば、斧鉞牛酒など、我邦の上古にはなきものまでも記したるか如く、文の爲めに意を害したる處少しとせず。されど古事記は、眞に古傳を其まゝに記ししものなれば、我か上古の風を觀、古語を知るには、此書を以て第一とすべきなり。其文躰は、實に一種特別なり。漢字を以て記したるものなれども、書紀の如くに純粹なる漢文にもあらず。さりとして祝詞または、宣命の如く、漢字を假りて國語を寫したるのみにあらず。概して云へば、拙劣なる漢文の如くなれども、其間に諸神の言語、歌謠等は、大抵漢字の音を假りて、國

語を寫したるなり。太安麿が自序にも、訓にのみよれば、意を失ひ易く、音にのみよれば、煩冗を免れず。是を以て、今或は一句の中に音訓を交へ用ひ、或は一事の内全く訓を以て録す、辭の見難きものは、即ち註を以て意を明かにすと云へり。其苦心想ふべし。是れ漢文に巧みなる安麿が、漢文を用ひざりし所以なり。此書三卷の中、最もみるべきは上卷なるべし。蓋し上卷は、神代の紀事にして、諸神の言語を直寫したる文に妙處多ければなり。

須佐之男命天に上ります段 古事記

是に須佐之男命の申し玉はく、然らば天照大御神にまをして罷りなんと申し玉ひて乃ち天に参り上ります時、山川ことごとくに動み、國土みな震りき。こゝに天照大御神聞き驚かして、おがなせの命の上り來ますゆゑは、必ずうるはしき心ならじ、おが國を奪んとおもはずにこそ、即ち御變を解き、みづらにまかして、左り右りのみ

づらにも、御鬘にも、左り右りの御手にも、みな八尺の勾玉の、五百つみすまるの珠を
まきて、そびらには、千のりの鞆を、負ひて、五百のりの鞆を、附け、また一つの高鞆を、ど
りあばして、弓腹振り立て、堅庭は、向股に、踏みなづみ、沫雪なすくゑはらゝかして、
一つの男建、ひ踏みたけびて、待ち問ひ玉は、くなど上り來ませると、問ひ玉ひき、こゝ
に須佐之男命、申し玉は、く、吾は、きたなき心なし、唯だ、大御神の命もちて、あが泣きい
さちることを、問ひ玉ひしゆゑに、白しつらく、あは、母の國に、まからんと、思ひて、哭く
と、申し玉へば、みましは、此國には、な住みそとて、神やらひやらひ玉ふ、故に、まかりな
んとするさまを、申さんとおもひてこそ、參り上りつれ、けしき心なしと、申し玉へば、
天照大御神、然らば、なが心の、あかきことは、いかにして、しらましとのり玉ひき、こゝ
に速須佐之男命、あのもゝうけひて、み子うまなど、まをし玉ふ。

大國主神國讓りの段

全

前

〔天船鳥神、建御雷神更にまた還り來て、その大國主神に問ひ玉は、く、汝が子ども、事代
主神、建御名方神、ふたりは、天つ神の御子の命のまにゝ、違はじと、申しぬ、かれ、な

が心いかに、そと問ひ玉ひき、こゝに答へて、申しつらく、あが子ども、ふたりの申せる
まにゝ、あれも、たかはじ、此葦原の中つ國は、命のまにゝ、悉に、たてまつらん、たゝ
あか住みかをば、天神の御子の、天つ日繼しろしめさむ、と、だる天の御鼻なして、宮柱
ふとしり、高天原に、氷木たかしりて、治め玉は、あは、百足らず、八十くまで、に、かくり
て、さむらひなむ、あが子ども、百八十神は、即ち、八重事代主神、神の御尾前となりて、仕
へまつらば、違ふ神は、あらじ、かく申して、即ち、隠りましき、かれ、白し玉ひしまにゝ、
出雲のたぎし、の小濱に、天のみあらかを、造りて、水戸神の、こ、櫛八玉の神、かしは、で
として、天のみあへ、たてまつる時に、ぬきまをして、櫛八玉神鵜になりて、わたの、そこ
に入りて、底のは、に、を、昨ひいで、天の、八十びらかを、作りて、め、の、から、を、刈りて、ひき
り、白に、作りて、こもの、柄を、ひきり、杵に、作りて、火を、きりいで、申しけらく、是の、あが
きれる、火は、高天原には、神産巢日御祖命の、と、たる、天の、に、ひすの、すゝの、やつ、か、たる
まで、たき、あげ、つちの、下は、そこつ、岩根に、たき、こらして、栲繩、打ち、は、へ、釣ら、せる、海人
か、大口の、尾は、た、鱸、さわゝゝに、ひき、よ、せ、あけて、さき、た、けの、と、を、を、を、を、に、天の、ま
なく、ひ、と、ま、をしき、かれ、建御雷神、返り、參り、上り、葦原の中つ國、こと、む、け、ぬ、る、さま

をまをし玉ひき。

第四 風土記 風土記は、元明天皇の和銅六年に、五畿七道に命じて、奉らしめられたるものにして、不完全なる地誌の類なり。郡郷の名をばじめとし、凡て國內の物産、土地の肥瘠、山野の名號、古來の傳説等を録したり。されども、今は散佚して、僅かに残れるは、常陸、出雲、播磨、肥前、豊後等の風土記なり。風土記は、地理、歴史の上にては、貴ぶべきものなれども、其文章は乾燥なる漢文にして、國語を寫したる處少く、殆んど、國文學としての價值なきか如し。されども、出雲風土記中の、國引の文は、實に一種の特色ありて、見るべきものなり、思ふに、こは、古傳の儘を筆記せしものなるべし。

出雲風土記國引の文

國引させせる八束水臣津野命の宣り玉は、く、八雲立つ出雲の國は、さぬののわか國なるかも、初つ國ちひさくつくらせり。かれつくりぬはんと宣ひて、たくぶすま新羅のみ崎を、國のあまりありやと見れば、國の餘りありと宣り給ひて、童女のむなすきとらして、大いちひさをのきた衝き別けて、はたすき穂ふり別けて、みつよりの綱打ちかけて、霜つしらへなへなに河船かふねのもそろもろに國こ國來と引き來縫へる國は、こづの打ちたえよりして八穂にきづきのみ崎なり。かくて、かためたてしかしは、石見の國と出雲の國との境なる名は佐比賣山これなり、またもち引ける綱は、齒の長濱是なり。また北門さきの國を國の餘り餘りありやと見れば、國の餘りありと宣り給ひて、童女のむなすきとらして、大魚のきたつき別けて、はたすき穂ふり別けて、みつよりのみの綱うちかけて、霜つしらへなへなに河船かふねのもそろもろに國こ、くにこと引き來縫へる國は、たくの打ちたえよりして、狭田の國これなり。

第四章 奈良時代の和歌 萬葉集

奈良の時代は、和歌の時代なり。また實に我が國文學の曉あり。その

歌は即ち載せて萬葉集に在り。

萬葉集は、仁徳天皇の朝より、淳仁天皇の時に至るまで、凡、四百年間の歌の集にして、我が邦の詩經なり。然れども、仁徳より舒明に至る二百三十四十年間には、たゞ仁徳天皇の皇后の短歌四首と、雄略天皇の長歌一首とあるのみなれば、之を舒明の朝より、淳仁の朝まで、凡そ百三十餘年間の歌集といふも殆ど不可なきが如し。其名は、萬の言の葉といふ義より出でしともいひ、或はよろづ代といふ意より名けたりともいへり。其編者に就きて、また一定の説あらざれど、孝謙天皇の朝に、左大臣橘諸兄が撰びしを、後に中納言大伴家持これを増訂せるものなりといふは、眞に近きが如し。其舛裁よりみるも、更に世に傳ふるが如く、勅撰のものとは思はれず。また一人にて全編を撰定せしものとも見えざるなり。

新訓
一 借訓

此集の歌は、みな漢字の音訓を假りて、國語を寫したるものなり。世に之を萬葉假名と稱す。其漢字の用法齊一ならずして、或は其訓を用ひ、或は其音に頼り、或は之を混用す。而して訓の中にも、正訓あり、略訓あり、約訓あり、借訓あり、また戲訓ともいふべきものあり。假令は弓をユミ、珠をタマ、鹽をシホと訓むは正訓なり。金野をアキノ、高山をカグヤマといふは義訓なり。朝明をアサケとよみ、飽浦をアクラと云ひ、朽網をクタミとよむは約訓なり。盤余をイハレ、荒磯をアリソといふ如きは略訓にして、荒城をアラキ、相市をアフチ、阿跡念をアトモフといふは借訓。また青頭雞をカモ、向南をキタとよみ、蜂音をフ、十六をシシ(猪)と讀まするがごときは戲訓と稱するものなり。それかくの如く、萬葉假名の用法は、甚だ自由自在なるものなり。而してまた字音にも正音と略音との別ありて、阿伊字衣をアイ

依て
五
之
上

ウエ、加奇久氣をカキクケと讀むは正音に屬すれども、アイウエを安印雲延、カキクケを汗吉君計とする如きは略音なり。それ、古事記、日本書紀にある歌謡は、主として字音を用ひたるか故に、信偏難解の文字多きのみならず、また漢音、吳音とも用ひたれば、甚だ讀みかたきに苦めども、萬葉集のは、右に云へる如き、漢字の用法に従ひ、自由に記號的の文字を聯結せるが故に、記紀中の歌よりは、大に其讀み易きを覺ゆるなり。

此集部類を分つこと、後世の歌集とは稍其趣きを異にして、雜歌、相聞、挽歌、譬喩、四季の五種とせり、相聞とは、後の所謂戀歌なれども、また君臣、父子、兄弟、朋友間の相思の情を陳べたるもあり、挽歌は、後の所謂哀傷、譬喩は、物に寄せて、感情を述べたるものなり。また、全集、四千五百十五首の歌を、其形狀によりて區別する時は、短歌四千百八

十六首、長歌二百六十六首、及び旋頭歌六十三首となす。就中その長歌は、萬葉集の特色にして、此集より外に之に及ぶものなし。その歌語は、當時普通の言語の都雅なるをは、用ひしならん。されども、其東歌といふものなどに至りては、用語の卑俗なるも多く見ゆ。すべて萬葉の歌は、俊嚴なる規則の拘束なき時代のものなれば、風姿自然に出でて、千狀萬態變化百出、恰かも山野に生長する樹木の如し。されは天真爛漫、氣力旺盛なる名歌も多きと共に、まゝまた解し難きもあり、また甚だ妙ならざるもあるなり。今、余輩は、萬葉の歌を論ずるに當り、序でを以て和歌の變遷を述べんとす。抑も雄略天皇より以前は更なり、佛法東漸の後といへども、舒明天皇の頃までは、未だ大に漢學佛教の影響を受けたる歌を見ず。みな上古のまゝにして、少しく時と共に推し移りしのみ。持統天

皇の頃に至り、夫の柿本人麿、山部赤人等の出づるに遭ひて、一躍して、直に極盛の域に進みたり。さて舒明天皇以前の歌は、概ね事にふれ、折に臨みて、見るもの聞くものにつけて、其感情を洩したるものなれば、いはゞ自然になりしものにて、特に思ひを運らし、心を勞して詠みたるにあらざれば、文詞率直にして華やかならず。舒明天皇以後に至れば、即ち折にふれ、時に臨みて至情を洩ししのみならず、經驗せざる事物に就きて、歌をよみたり。即ち譬喩と稱する一部の歌これなり。柿本人麿の歌などには、詠天、詠山、詠花の類、また、寄衣、寄玉、寄海等の類多し。是れ皆、想像の進歩したる結果なるべし。詠歌の一進化を來たししものともいふべきなり。此の如く奈良時代にいたりては、漸く慰みのためにも歌を詠むこと始まりて、詞華を弄ぶこととなれり。されども、遙かに後の世の如く、題詠のみを主として、

強ひて歌を作るが如きことは未だなかりき。さてこの奈良時代の和歌が、上代のと最も顯著なる差別をあらはせるは、大に佛法漢學の影響を蒙りたるに基く。そは前に論ぜし如く、歴世務めて之を奨勵せられしかば、人情風俗自から此に傾きて、和歌の如きも直にその影響をうけしなり。今その一例をあげんに、

世の中はむなしきものどあらむとぞ

作者未詳

このてる月はみちかけしける

家持

うつせみの世は常なしと知るものを

秋風さむみまねびつるかも

といふ、無常寂滅の佛説に基ける歌あり。又漢學の風氣を帯びたるものには、大伴旅人が酒をめてし歌に、

古への七のかしこき人ども

欲りするものは酒にしあるらし

よるひかる玉といふとも酒のみて

こゝろをやるにあにまかめやも

萬葉集に載れる歌の作者は、上は至尊より下は樵士海人に至るまで、極めて多きうちに、就中優れたるは、柿本人麿、山部赤人、山上憶良、大伴家持、全旅人、笠金村等なるべく、女流には額田女王、大伴阪上郎女等傑出せり。此外作者の知れざる歌にも、すべれたるもの多し。柿本人麿、山部赤人は共に、歌聖と稱せらるゝ人なれど、其履歴の知られざるは遺憾なりといふべし。唯、人麿が持統文武の兩朝に仕へしことより、赤人が聖武の朝に仕へし事とのみは知らる。人麿が新田部、高市の諸皇子に従ひ、又聖駕に陪して紀伊、伊勢、大和、筑紫の諸國

を歴遊し、其晩年に至り、石見に居り、其國に於て歿せし事、及び赤人も、また鳳駕に隨ひて、近畿の名勝を探り、或は遠く伊豫の靈泉に浴し、富岳千秋の雪を眺めし事は、隨所その名歌を遺し、よりにて知らるるなり。

人麿と赤人とは、實に我歌學界の曉星といふべく、其詠歌を以て察するに、其感情の深厚なる、其思想の高潔なる、其想像の富贍なる、人と自然とを寫して、能く其美を發揮し、風姿文辭共に雄渾にして韻致に富み、氣力の盛んなる事は、上下二千餘年に亘れる文學史中、傑出せる歌人なり。さて、この人麿と、赤人との優劣は、かの古今集の序にも、人麿は、赤人の上に立たん事かたぐ、赤人は人麿か下に立たん事かたしといへり。蓋し適評なるべし。されど人麿は特に長歌に長じて、赤人は特に短歌に長ぜり。二人、各一長一短あるは、其歌を見て

知るべし。

山上憶良は、天武天皇の時に遣唐少録となり、後、聖武天皇の時に筑前守となりしが、其他の履歴は傳はらず。憶良は漢文に長ぜる人にして、其詠歌は主として人生を以て題目とせり。思想及び想像は豊富にして、文詞やゝ粗笨の嫌ありといへども、姿勢甚だ適強なり。大伴旅人は、元明、元正、聖武の三朝に仕へて、大に眷遇せられ、左將軍、中務卿、大宰帥より大納言まで進みたる人なり。家持は即ち其子にして、特に悲愴悽慘の詠に巧みなりとす。

萬葉集は、啻に文學上の至寶なるのみならず、又大に史學上の參考を資くるものなり。奈良時代以前の風俗人情を知らんとすれば、先づこれを繙かざるべからず。而して之によりて歴史の欠けたるを補ひ、誤れるを正すことを得べし。

過近江荒都時作歌

柿本人麿

| | | | |
|---------|---------|-------|---------|
| たまたすき | うねびのやまの | かしはらの | ひじりのみよゆ |
| あれましゝ | かみのことく | つがのきの | いやつきく |
| あめのした | 志ろしめしゝを | そらにみつ | やまどをおきて |
| あをによし | ならやまをこえ | いかさまに | おもほしめせか |
| あまさがる | ひなにはあれど | いはししの | あふみのくにの |
| さいなみの | おほつのみやに | あめのした | 志ろしめしけむ |
| すめろぎの | かみのみことの | おほみやは | こゝときけども |
| おほどのほ | こゝといへども | はるくさの | しけくおひたる |
| かすみたつ | はるびのきれる | もゝしきの | おほみやどころ |
| みればかなしも | | | |

反歌二首

さゝなみの志がのからさきさきくあれど
おほみやびとのふねまぢかねつ
さゝなみの志がのおほわだよどむとも
むかしのひとにまたもあはれやも

幸于吉野宮之時作歌

全

人

| | | | |
|-------|---------|---------|---------|
| やすみしゝ | わがおほきみの | きこしをす | あめのしたに |
| くにはしる | さはにあれども | やまかはの | きよきかふちと |
| みこゝろを | よしのゝくにの | はなぢらふ | あきつこのべに |
| みやばしら | ふとしきませば | もゝしきの | おほみやびとは |
| ふねなめて | あさかはわたり | ふなごほひ | ゆふかはわたる |
| このかはの | たゆることなく | このやまの | いやたかゝらし |
| いはゝしる | たきのみやこは | みれどあかねか | |

反歌

みれどあかねよしのゝかはのどこなめの
たゆることなくまたかへりみむ

高市皇子尊城上殯宮之時作歌

全

人

| | | | |
|-------|---------|-------|---------|
| かけまくも | ゆゝしきかも | いはまくも | あやにかしこき |
| あすかの | まがみのはらに | ひさかたの | あまつみかどを |
| かしこくも | さだめたまひて | かむさぶと | いはがくります |
| やすみしゝ | わかおほきみの | きこしめす | そどものかにの |
| まきたつ | ふはやまこえて | こまつるき | わざみかはらの |
| かりみやに | あもりいまして | あめのした | をさめたまひ |
| をすくにを | さだめたまふと | どりがなく | あづまのかにの |
| みいくさを | めしたまひて | ちはやふる | ひとをやはせと |
| まつろはぬ | くにをさめと | みこながら | まけたまへは |
| おほみゝに | たちどりおぼし | おほみてに | ゆみどりもたし |

| | | | |
|-------|----------|-------|----------|
| みいくさを | あともひたまひぬ | とゝのふる | つゝみのおとは |
| いかづちの | こそときくまで | ふきなせる | くたのおとは |
| あたみたる | とらかほゆると | もろびとの | おびゆるまで |
| さゝけたる | はたのなびきは | ふゆごもり | はるさりくれば |
| ぬことぬ | つきてあるひの | かせのむた | なびけるごとく |
| とりもてる | ゆはずのさわぎ | みゆきふる | ふゆのはやしに |
| あらしかも | いまきわたると | おもふまで | きゝのかしこく |
| ひきはなつ | やのしげしく | おほゆきの | みだれてきたれ |
| まつろはず | たちむかひしも | つゆじもの | けなばけぬべく |
| ゆくどりの | あらしふはしに | わたらひの | いつきのみやゆ |
| かんかぜに | いふきまどはし | あまぐもを | ひのめもみせず |
| どこやみに | おほひたまひて | さだめてし | みづほのくにを |
| かんながら | ふとしきまして | やすみしゝ | わがおほきみの |
| あめのした | まをしたまへば | よろづよに | まかしもあらむと |

| | | | |
|---------|---------|--------|----------|
| ゆふばなの | さかゆるときぬ | わかあほきみ | みこのみかどを |
| かんみやに | よそひまつりて | つかはしし | みかどのひとも |
| しろたへの | あさごろもきて | はにやすの | みかどのはらに |
| あかねさす | ひのくるゝまで | 志ゝむもの | いはひふしつゝ |
| ぬばたまの | ゆふべになれば | おほどのを | ふりさけみつゝ |
| うつらなす | いはひもどほり | さもらへど | さもらひかねて |
| はるとりの | さまよひぬれば | なけきも | いまだすぎぬに |
| おもひも | いまだつきねば | ことさへぐ | くたらのはらゆ |
| かんはふり | はふりいまして | あさもまし | きのべのみやを |
| どこみやと | さだめまつりて | かむながら | まづまりましぬ |
| まかれども | わがおほきみの | よろづよと | あもほしめして |
| つくらしゝ | かぐやまのみや | よろづよに | すぎむとちも一や |
| あめのごと | ふりさけみつゝ | たまたすき | かけてまぬばむ |
| かしこかれども | | | |

反歌二首

ひさかたのあめしらしぬるきみゆゑに

つきひも志らにこひわたるかも

はにやすのいけのつゝみのこもりぬの

ゆくへを志らにどねりほまどふ

讃岐狭岑島視石中死人作歌

全

人

| | | | |
|-------|---------|-------|---------|
| たまもよし | さぬきのくには | くにがらか | みれどもあかぬ |
| かむがらか | こゝだたふとき | あめつち | ひつきどもに |
| たりゆかむ | かみのみおもと | つぎてくる | なかのみかどゆ |
| ふねうけて | わがこきくれば | ときつかぜ | くもぬにふくに |
| あきみれば | 志きなみたち | へたみれば | 志らなみさわぐ |
| いさなとり | うみをかしくみ | ゆくふねの | かぢひきをりて |

| | | | |
|---------|---------|-------|---------|
| をちこちの | 志まはあほけど | なぐはし | さみねのしまの |
| ありそわに | いほりてみれば | なみのどの | 志げきはまべを |
| 志きたへの | まくらになして | あらどこに | ころぶすきみが |
| いへ志らば | ゆきてもつげむ | つましらば | きもどはましを |
| たまぼこの | みちだに志らず | あほしく | まぢかこふらむ |
| はしきつまらば | | | |

反歌二首

つまもあらばとりてたげましさみねやま

ぬのへのうはぎすぎにけらさや

あきつなみきよるありそを志きたへの

まくらどまきてなせるきみかも

望不盡山歌

山部 赤人

| | | | |
|-------|---------|--------|---------|
| あめつちの | わかれしときゆ | かんさびて | たかくたふとき |
| 駿河なる | 富士の高根は | 天のはら | ふりさけ見れば |
| わたる日の | かげもかくろひ | てる月の | ひかりもみえず |
| 白雲も | い行きはばかり | 時じくぞ | 雪はふりける |
| 語りつき | 言ひつきゆかん | 富士の高根は | |

反歌

田子の溜ゆ打ちいで、見ればまじろにぞ
ふじのたかねに雪はふりける

幸子芳野離宮之時作歌

| | | | |
|-------|---------|-------|--------|
| やすみ志し | わかおほきみの | めしたもふ | よしのみやは |
|-------|---------|-------|--------|

全 人

| | | | |
|-------|---------|----------|---------|
| 山たかみ | 雲そたなびく | 河はやみ | せのとそ清き |
| かんさびて | みればたふとく | よろしなへ | みればさやけし |
| 此山の | 盡きばのみこそ | 此河の | たえばのみこそ |
| もしきの | 大宮所 | やむときもあらめ | |

反歌

神代より吉野の宮にありがよひ
たかしらせるはやまかほをよみ

全 人

| | | | |
|-------|---------|-------|---------|
| やす見志し | わかおほきみの | たかまらす | 芳野の宮は |
| たくなつく | 青牆こもり | 河なみの | 清きかふちぞ |
| 春部は | 花さきをり | 秋されば | 霧立ち渡る |
| 其山の | いやますく | 此河の | 絶ゆることなく |

百しきの 大宮人は どのにかよはん

反歌二首

三吉野の象山のまのこぬれには

こゝだもさわくどりのこゑかも

ねば玉の夜の更けゆけばひさ木あふる

きよき河原に千鳥志ばなく

登神岳作歌

全

人

| | | | |
|-------|---------|-------|---------|
| みもろの | かみなびやまに | いほえさし | 志いにおひたる |
| つがの木の | いやつきく | たまかづら | たゆることなく |
| ありつゝも | やまがよはん | あすかの | ふるきみやこは |
| やまたかみ | 河とほ白し | 春日には | 山し見かほし |
| 秋の夜は | 河しさやけし | 朝雲に | たづはみたれ |

ゆふぎりに かはづはさわく みることに ぬのみしなかゆ
 いにしへおもへば

反歌

あすか川かはよどさらざたつきりの

おもひすくきこひにあらなくに

令反感情歌

山上憶良

| | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| ちしはしを | みればたふとし | めこみれば | めぐしうつくし |
| よのなかは | かくぞことわり | もちどりの | かゝらはしもよ |
| ゆくへまらねば | うけぐつを | ぬきつるごとく | ふみぬぎて |
| ゆくちふひとは | いはきより | なりでしひとか | ながな告らさぬ |
| あめゆかば | ながまに | つちならば | おほきみいます |

このてらす　　ひつきのしたは　　あまぐもの　　むかぶすきはみ
 たにぐくの　　さわたるきはみ　　きこしをす　　くこのまほらそ
 加にかくに　　ほしきまに　　まかにはあらじか

反歌

ひさかたのあまぢはどほしなほくくに
 いへにかへりてなりをしまさ

思子等歌一首

全

人

うりはめば　　こどもあもほゆ　　くりはめば　　ましてしぬばゆ
 いつくより　　きたりしものぞ　　まなかひに　　もとなかゝりて
 やすいしなさぬ

反歌

まろかねもこかねもたまもなにせむに

貧窮問答歌一首并短歌

全

人

まされるたから子に志かめやも

| | | | |
|---------|---------|--------|----------|
| かせまじり | あめふるよの | あめまじり | ゆきふるよは |
| すべもなく | さむくしあれば | かたしほを | とりつゝしろひ |
| かすゆさけ | うちすゝろひて | 志はぶかひ | はなびしびしに |
| 志かどあらぬ | ひげかきなで | あれをおきて | ひとはあらじと |
| ほころへど | さむくしあれば | あさぶすま | ひきかゝぶり |
| ぬのかたぎぬ | ありのことく | きそへども | さむきよすらを |
| われよりも | まづしきひとの | ちゝはゝは | うゑさむからん |
| めこどもは | こひてなくらん | この時は | いかにしつゝか |
| ながよはわたる | | | |
| あめつちは | ひろしといへど | あがためは | せばくやなりぬる |
| 日月は | あかしといへど | あがためは | てりやたまはぬ |

艾取らば
たむかひ
てあはれ
やへり

ひとみなか われのみやまかる わくらはに ひどしはあるを
ひとなみに あれもなれるを わたもなき ぬのかたぎぬの
みるのこど わけさがれる かいふのみ なたにうちかけ
ふせいほの まけいほのうちに ひだつちに わらとまきて
ちしはしは 枕のかたに めこどもは あとのへに
かくみめて うれへさまよひ かまどには けふりふきたてず
こしきには くものすかきて いひかしく こともわすれて
ぬえどりの のどよひをるに いどのきて みじかきものを
はしきると いへるがごとく 志もとる さとをさがこゑは
ぬやどまで きたちよばひぬ かくばかり すべてなきものか
よのなかのみち

よのなかをうしとやさしとおもへども
とびたちかねつどりにしあらねば

暮春之月幸芳野離宮時奉勅作歌 大伴旅人
み吉野の 吉野の宮は 山からし たふとかるらし
川からし さやけかるらし 天地と ながくひさしく
萬代に 變らずあらん いでましの宮

反歌

むかしみしきさの小河を今見れば
さよしさをけくなりけるかも

歸京後答沙彌滿誓贈歌

こゝにありてつくしやいづく白雲の
たなびく山のかたにしあるらし

全 人

賀陸奥國出金 詔書歌

大伴家持

| | | | |
|--------|-----------|-------|----------|
| あしはらの | みづほのくにを | あまくだり | 志らしめしける |
| すめろきの | かみのみことの | みよかさね | あまつひつぎと |
| 志らしくる | きみのみよ | まきませる | よものくにに |
| やまかはを | ひろみあつみと | たてまつる | みつきだからは |
| かそへえず | つくしもかねつ | 志かれども | わかあほきみの |
| もろひとを | いざなひたまひ | よきことを | はじめたまひて |
| くがねかも | たぬしけくあらんと | おもほして | 志たなやますに |
| とりがなく | あづまのくにの | みちのくの | をだなるやまに |
| くかねありと | まをしたまへれ | みこころを | あきらめたまひ |
| あめつちの | かみあひうづなひ | すめろぎの | みたまたすけて |
| とほきよに | なかりしことを | わかみよに | あらはしてあれば |
| みをすぐに | さかえむものと | かむなから | おもほしめして |

| | | | |
|--------|-----------|-------|----------|
| ものゝふの | やそどものを | まつろへの | むけのまに |
| あひひとも | めのわらはこも | まかねがふ | こころだらひに |
| なてたまひ | をさめたまへば | こゝをしも | あやにたふとみ |
| うれしけく | いよゝおもひて | あほどもの | とほつかんあやの |
| そのなをば | あほくたぬしと | あひもちて | つかへしつかさ |
| うみゆかば | みづくかはね | やまゆかば | くさむすかばね |
| あほきみの | へにこそまなめ | かへりみは | せじとことだて |
| ますらをの | きよきそのなを | いにしへよ | いまのをついに |
| ながさへる | あやのこともぞ | あほどもと | さへぎのうちば |
| ひどのあやの | たつることだて | ひどのこは | あやのなたゝず |
| あほきみに | まつろふものと | いひつげる | ことのかさぞ |
| あづさゆみ | てにどりもちて | つるぎたち | こしにどりはき |
| あさのまもり | ゆふのまもり | あほきみの | みかどのまもり |
| われをおきて | またひどはあらじと | いや たて | あもひしまさる |

あほきみの

みことのおきを

きけばたふとみ

反歌三首

ますらをのこゝろおもほゆあほきみの

みことのおきをきけばたふとみ

あほどものどほつかむあやのおくつきは

志るく志めたてひとの志るべく

すめろきのみよさかえんとあづまなる

みちのくやまにくかねはなさく

悲世間無常歌

全

人

あめつちの

どほきはしめよ

よのなかは

つねなきものと

かたりつき

ながらへきたれ

あまのはら

ふりさけみれば

てるつきも

みちかけしけり

あしびきの

やまのこねれも

はるされば

はなさきにほひ

あきづけば

つゆしもおひて

かぜまじり

もみぢちりけり

うつせみも

かくのみならし

くれなゐの

いろもうつろひ

ねばたまの

くろかみかはり

あさのえみ

ゆふべかはらひ

ふくかせの

みえぬがごとく

ゆくみつの

とまらぬごとく

つねもなく

うつろふみれば

にはたづみ

ながるゝなみだ

とゝめかねつも

反歌二首

ことゝはぬきすらはるさきあきづけば

もみぢちらくはつねをなみこそ

うつせみのつねなきみればよのなかに

こゝろつけずておもふひそあほき

慕振勇士之名歌

全

人

ちゝのみの

ちゝのみこと

はゝそばの

はゝのみこと

おほろかに
 ますらをや
 なぐやもち
 あしびきの
 のちのよの

こゝろつくして
 むなしくあるべき
 ちひろいわたし
 やつをふみこえ
 かたりつぐべく

おもふらん
 わづさゆみ
 つるきたち
 さしまくる
 なをたつべし

そのこなれやも
 すゑふりおとし
 こしにどりはき
 こゝろさやらす

反歌

ますらをばなをしたつへしのちのよに

追痛防人悲別之心作歌

おほきみの
 あたまもる
 ひどさはに

どほのみかど
 あさへのきぞと
 みちてはわれど

まらぬひ
 きこしをす
 どりがなく

つくしのくには
 よものくには
 あづまをのこは

全 人

いでむかひ
 ねぎたまひ
 わかくさの
 あしがちる
 あさなぎに
 あともひて
 まさきくも
 ますらをの
 つゝまはず
 まろたへの
 なかきけを

かへりみせず
 まけのまに
 つまをもまかず
 なにはのみつに
 かことゝのへ
 こきゆくきみは
 はやくいたりて
 こゝろをもちて
 かへりきませど
 そでをりかへし
 まちかもこひむ

いさみたる
 たらちねの
 あらたまの
 おほぶねに
 ゆふしほに
 なみのまを
 おほきみの
 ありめぐり
 いはひべを
 ねばたまの
 はしきつまらば

たけきいくさと
 はしがめかれて
 つきひよみつゝ
 まかぢしゝぬき
 かぢひきをり
 いゆきさぐみ
 みことまにま
 ことしをはらば
 どこべにすゑて
 くらかみしきて

反歌

ますらをのゆぎどりおびていでいけは

わかれをしみなけけんつま
どりがなくあづまをどこのつまわかれ
かなしくありけんとしのをながみ

喩族歌

| | | | |
|-------|---------|-------|---------|
| ひさかたの | あまのどひらき | たかちほの | たけにあもりし |
| すめろきの | かみのみよゝり | はじゆみを | たにきりもたし |
| まかごやを | たばさみそへて | あほくめの | ますらたけを |
| さきにたて | ゆぎどりおほせ | やまかはを | いはねさくみて |
| ふみとほり | くにまぎしつゝ | ちはやふる | かみをことむけ |
| まつろはぬ | ひとをもやはし | はきいよめ | つかへまつりて |
| あきつしま | やまどのくにの | かしはらの | うねびのみやに |
| みやばしら | ふとしりたてゝ | あめの志た | 志らしめしける |
| すめろぎの | あまつひつぎと | つぎてくる | きみのみよゝく |

全

人

| | | | |
|-------|----------|---------|---------|
| かくさはぬ | あかきこゝろを | すめらべに | きはめつくして |
| つかへくる | あやのつかさと | ことだてゝ | さづけたまへる |
| うみのこの | いやつぎくゝに | みるひとの | かたりつきてゝ |
| きくひとの | かゝみにせむを | あたらしき | きよきそのなそ |
| おほるかに | こゝろおもひて | むなごとも | あやのなたつな |
| おほども | うちとなにあへる | ますらをのとも | |

反歌

志きしまのやまどのくにゝあきらげき
 なにあふともものをこゝろつとめよ
 つるぎたちいよゝとぐべしいにしゝゆ
 さやけくあひてきにしそのなそ

幸子芳野離宮時作歌

笠 金 村

| | | | |
|-------|---------|---------|---------|
| 足引の | 御山もさやに | あちたぎつ | 芳野の河の |
| 河の瀬の | 淨きを見れば | 上み邊には | 千鳥まばなく |
| 下邊には | かはづ妻よぶ | 百しきの | 大宮人も |
| をちここに | 志いにしあれば | 見る毎に | あやに乏しみ |
| 玉かづら | 絶ゆることなく | 萬代に | かくしもがもと |
| 天地の | 神をそ斬る | かしこかれども | |

反歌

萬代に見ともわかめやみ吉野の
 たきつかふちの大宮どころ
 人曾の命も吾もみ吉野の
 たぎちとこはのつねならぬかも

天皇詔内大臣藤原朝臣競憐春山萬花之艶秋山千葉之彩
 時以歌判之歌 額田女王

| | | | |
|---------|---------|-------|---------|
| 冬ごもり | 春さり來れば | 鳴かざりし | 鳥も來鳴きぬ |
| さかざりし | 花もさけれど | 山をしみ | 入りてもとらず |
| 草ふかみ | 手折りてもみず | 秋山の | 木の葉を見ては |
| もみづをば | とりてぞしぬぶ | 青きをば | あきてそなげく |
| そこしうらめし | 秋山われは | | |

祭神歌

大伴坂上郎女

| | | | |
|-------|---------|-------|---------|
| 久方の | 天の原より | 生れきたる | 神のみこと |
| 奥山の | 神が枝に | 志らがつく | ゆふどりつけて |
| いはひべを | いはひほりすゑ | 竹玉を | 志いにぬき垂れ |

まじじもの ひざ折りふせ たわやめの おすひどりかけ
かくだにも われはこひなん 君にあはじかも

反歌

ゆふたゝみ手にどりもちてかくだにも

われはこひなんきみにあはじかも

羈旅歌

作者未詳

わたつみは あやしきものか 淡路島 中なかにたておきて
白波を 伊豫にめぐらし ゐまち月 明石のとゆは
夕されば 鹽を満たしめ 明けくれば 鹽を干しむ
志ほさゐの 波をかしこみ 淡路島 磯がくりゐて
何時しかも 此夜の明けんど まつからに いのねがてねば

瀧のへの 朝野のきいし 明けぬとし 立ちどよむらし
いざこども あへてこぎでむ にはもまづけし

反歌

島つたひみぬめの崎をこぎだめば

やまとこひしくたづさはになく

詠水江浦島子歌

作者未詳

春の日の 霞める時に 住吉の 岸にいて居て
釣船の とほらふ見れば いにしへの ことぞおもほゆる
みづのえの 浦島の子が 堅魚釣り 鯛つりほこり
七日まで 家にも来ずて うなさかを すぎてこぎ行くに
わたづみの 神の童女に たまさかに いこぎ向ひて
相かたらひ ことなりしかば かきむすび どこよに至り

| | | | |
|---|--|--|--|
| わたづみの 携はり どこしへに わざもこに 父母に 言ひければ 今のこと そこらくに 家見れど 怪しと 垣もなく 元のごと 白雲の 立ち走り | 神の宮の 二人入りみて 在りけるものを のりて語らく 言をものらひ 妹がいへらく 逢はんとならば 堅めしことを 家も見かねて そこに思はく 家失せめやと 家はあらんと 箱よりいで 叫び袖ふり | 内のへの 老いもせず 世の中の 志まらくは 明日のごと どこよべに この櫛笥 墨の江に 里みれど 家ゆ出て 此筥を たまくしげ 常世べに こひ轉び | 妙なる殿に 志にもせずして 志れたる人の 家に歸りて 我は來なんと また歸り來て 開らくなゆめど 歸り來りて 里も見かねて 三年の程に 開きて見てば 少しひらくに 棚引きねれば 足ずりしつゝ |
|---|--|--|--|

| | | | |
|-----------------------------|-----------------------------|----------------------|---------------------------|
| 忽ち 黒かりし 後遂に 家どころみゆ | こゝろけうせぬ 髪も白けぬ いのち死にける | 若かりし ゆりくは 水の江の | 盾もしわみぬ 息さへたえて 蒲島の子が |
|-----------------------------|-----------------------------|----------------------|---------------------------|

反歌

どこよべに住むべきものをつるぎだち

志がこゝろからあぞやこのきみ

旋頭歌

自嘆歌

白珠は人に知らえず知らずともよし

志らずともわれし知れらば志らずともよし

元興寺僧

○ 春日なる三笠の山に月の船出づ、

みやびをの飲む酒杯に影のみえつゝ

作者不詳

○

この岡に草かるわらはしかななりそね、

ありつゝも君が來まさんみまくさにせん

全

○

あられふり遠つあふみの吾跡川柳

菊れゝどもまたもおふちふあと川柳

全

詠天

あめの海に雲の波たち月の船

星の林にこぎ隠くる見ゆ

人麿歌集

あられふり
あふみの
吾跡川柳

詠月

ますらをの弓ぞる振り起しかり高の

野邊さへ清く照る月夜かも

作者未詳

寄物發思

こもりくのはつせの山にてる月は

みちかけしてを人のつねなき

古歌集

就所發思

卷向の山邊とよみて往く水の

みなわのことし世の人われは

人麿歌集

寄玉

をちこちの磯の中なる白玉を

人に知らえずみんよしもがも

全

第三編 平安時代の文學

第一章 總論

桓武天皇の延暦十三年、山城國葛野郡宇多村に宮城を經營して、奈良の都を遷し給ひしより、今上天皇の明治二年に今の都に遷り給ひしまて、千有餘年間、帝都は此處に奠まりぬ。されど、文治二年に、賴朝が覇府を鎌倉に開きて、政治の實權を握りしより、天子はただ垂拱して、成るを仰き給ふのみなりしかは、此書に於ても、普通の稱呼に従ひて、幕府以前を平安の時代といふ。されは、平安時代の文學とは、平安奠都の頃より鎌倉幕府の時代まで、凡そ四百年間の文學をいふ。さて、この時代には、國史の修撰といひ、漢文漢詩の流行といひ、その外、國文學に於ては、物語、草紙、日記、紀行等の如き、各種の散文現

はれ、和歌は長歌の躰、殆ど其跡を絶ちしかど、短歌は益發達して、此時代に特種の光彩を放つに至れり。

佛教の東漸、及び隋唐との交通が、如何なる影響を我文學の上に與へしかは、既に之を述べしが、其後漸く唐風に行はるゝに従ひ、質樸なりし風俗は、一變して華美となりしのみならず、夫の聖武天皇の御代より、佛法の益弘まりしと共に、勇壯活潑の氣風は失せて、優柔懦弱となれり。この風は、既に奈良時代に於ても、稍之を見るべかりしが、平安の時代となりては、一層其程度を高めたりき。而して此風俗は、藤原氏の盛時に至りて極まりぬ。藤氏の盛なるや、朝廷顯要の位置は、同族にてみな之を占めたるのみならず、豐饒なる土地は多く、其所領となりしかは、宏大なる邸宅を構へて、日々に豪華を闘はし、更に政治を省みざりき。其間に、地方の豪族は發達して、遂に武門

政治の基をなせり。さばいへど、藤原氏も始より然ありしにはあらず。その中葉以後には、鎌足の如き英傑の士もなく、良房の如き智謀の人もいわずして、唯己れ一身の名利を謀り、目前の快樂を貪る輩のみ多かりしかば、都には管絃歌舞の樂、洋々として溢るゝが如くなりしかど、少しく都門を出づれば、地方の豪族互に割據して、盜賊山海に出没せり。されば、天慶の亂の如きも、漸く武士の力によりて、これを定めたりき。此時に當り、藤原氏の如き滿廷の公卿は、みな花月に眠り、佛説に惑溺して、物の怪、生靈などの祟りを畏れ、加持祈禱など、極めて盛なりしかば、僧徒修驗者のみ優待せられて、遂には折合の悪しかりし、神道と佛法とさへ互に相親和して、神佛一躰、本地垂跡の説さへ行はるゝに至れり。これ一は最澄空海等の如き名僧多くして、其説法の巧みなりしと、二つには當時の公卿百官より、學

者に至るまで、概ね氣力に乏しくして、其懦弱なること婦人の如くなりしとによらずはあらず。此風俗いよゝ盛なるに隨ひ、朝廷の律令ますます行はれずなりて、佛法獨り國家の護法となり、水旱疾疫兵寇に至るまで、一に經文を誦して、佛陀の勢力を請ふに至れり。政躰風俗の此の如くなりし間にも、前には宇多天皇の菅原道眞を登用して、藤原氏を抑へんと志給ひしことあり。後には、後三條天皇の大に政綱を張らせ給ひしことありしかど、みな其志を遂げさせ給はず。又延喜天曆の如き泰平の治なきにあらざりしかども、これたゞ外部太平を装ふに過ぎずして、其内部を窺へば、不潔卑猥の樂朝廷に盛なりしかば、天下の人心遂に武家に傾きぬ。此風俗の亂れ、政治の衰へたりし結果は、遂に保元平治の亂となりぬ。此亂や古人も評せし如く、敗徳亂倫の大變亂なりき。此間に藤原氏敗れて、源平

の争となり、源氏一旦敗れて平氏榮えしが、これもまた藤原氏の驕奢を學びし程に、幾何もなく源氏の爲めに亡はされて、大權全く源家の握る處となりぬ。

平安時代上下四百年間の形勢は、略上に述べたるが如し。此間にあらはれたる文學は、果して如何ならん。文學は人心の射映なりといへば、此時代の文學の艶麗にして優美なること、柔弱にして且つ氣力に乏しきことは、何人といへども推知し得べし。この文學また當時の人心を動かし、彼此相頼りて、四百年間の人心を左右したりき。此時代は、國文學の始めて其形骸を成したる時にして、其散文韻文共に見るべきもの多し。今之を左の六章に類別して、國文學の發達を叙述せんとす。

第一 平假名の制作

第二 物語

第三 日記及び紀行

第四 草紙

第五 雜史

第六 和歌及び歌序

今之を述ぶるには、先づ少しく當時の漢學の状態を示さざるべからず。蓋し平安時代は國文學盛んなりしも、漢學は決して衰へたりしにはあらず。朝廷の公文はいふまでもなく、歴史法令より、重なる著書は皆漢文なりき。漢文は此時代の事情の外部を示し、國文は裏面の情態を述べたり。これよりさき、孝謙天皇は公廩田三十町を大學寮に賜ひ、また桓武天皇の時に、學生の數も増加して、大學の費用足らざりしかば、新に多くの學田を増加し給ひき。之を勸學田とい

ふ。この他、歴代の天皇、多く意を漢學に用ひ給ひしを以て、漢學の勢を得しこと、前代に比なし。その他、檀林皇后は、學館院を建て、橘氏の子弟を教導し、藤原冬嗣は、勸學院を設けて、藤原氏の子弟を薰陶せしのみならず、在原行平の獎學院、恒貞親王の淳和院、菅原大江兩氏の文章院、空海の綜藝種智院等、孰れも漢學を教授せり。されは、漢學の著書も少からず。國史には、桓武天皇より醍醐天皇の時まで、續日本紀、日本後紀、續日本後紀、文德實錄、三代實錄の修撰ありて、六國史全く成りしが、宇多天皇の朝には、菅原道眞の上りし類聚國史も、た有名なるものなり。法制其外の雜書にては、古語拾遺、大同本紀、弘仁格式、新撰姓氏錄、令義解、貞觀格式、延喜格式等の著あり。詩文集には、文華秀麗集、經國集、本朝文粹、都氏文集、菅家文章、性靈集等あり。さて、當時の歴史は主として編年躰を用ひ、専ら朝廷の年中行事及び

百官の叙任等より、天變地異の類をば、年代の順序を以て録せしのみ。毫も事實の連絡關係、或は其原因結果を知るによしなし。されど、六國史以下の諸書が史學上に貴重なることは、今更言ふを待たざるなり。漢文詩賦の最も流行せしは、嵯峨天皇の前後なりき。當時は専ら六朝の四六駢儷躰の文を書くことを勉めたりしが、其文章生氣に乏しくして、恰も作り花の香氣なきが如し。さてその後、宇多天皇の朝に遣唐使を止め給ひしより、漢學漸く衰運に向へり。

第二章 平假名の制作

我が國語を寫すに當り、漢字を以てするの不便より、遂に必要に迫まられて、片假名の發明ありし事は、既に前章に述べたり。さて、その片假名の出來し後といへども、漢學益行はれて、漢文を書くこと最

も盛なりしが、漢字は點畫複雑にして煩はしければ、重に草跡の字を用ひたりき。此草跡變じて遂に平假名となりぬ。而して字跡の一定せしは、嵯峨天皇の頃、僧の空海がいろは歌を作りたる後ならん。空海は高野山を開き、密教の眞言を弘めたる名僧にして、學は漢學を兼ね、また梵語にも通じたりしかば、従來行はれし諸種の平假名を精撰し、其四十七文字を以て、佛説を寓したる今様歌を作りたるなり。殊に空海は、當時の草聖と稱せられし程の能書なりしかば、その書きたりし四十七文字のいろは歌は、平假名文字の模範ともなりしならん。其効は片假名の五十音圖を作りたる吉備眞備と異ならざるなり。

平假名の出來しよりは、僅かに四十七文字をだに知れば、自國の言語を自由に寫す事を得たり。されば、是より漸く文字により、思想を

述べ、感情を現はすこと盛になりぬ。かくて、物語、日記、紀行、隨筆、歌序等の如き國文は現はれたるなり。これよりさき、我國の散文には、祝詞、宣命等の如く、漢字によりて國語を寫したるものありしのみなるが、片假名及び平假名の製作ありてより、純粹なる國文を、始めて我文學史上に見る事を得たり。

第三章 物語

平假名の發明ありし以來、これを以て書きたる國文の行はれしことは疑ふべくもあらず。されど、一種の文跡を備へて、平安時代の文學を形づくりたる、一大要素となりしは、物語の文なり。抑も物語といふは、もと話説の義にして、ふるく日本書紀には、談の一字をものがたりと訓せり。即ち夢野の鹿、浦島子などの話これなり。是等は上

代の物なれども、降りて平安時代に及びては、文化大に開けて、假名文字の用法も自在なりしかば、之を利用して、或は世の盛衰を叙述し、或は人情の微細を寫し、以て佳人才子の消閑の具となしたるもの、即ちこの物語なりき。さて物語の文牀及び其結構は、孰れも大同小異なれども、凡そ三種の別あるを認む。即ち些少の事實を根據として、之を敷衍したるもの、或は全く作者の想像に依りて趣向を構へたるもの、或は艶麗なる文字を用ひ、主として事實を寫したるものなり。假令は伊勢物語、大和物語等は第一類に屬し、竹取物語、源氏物語等は第二類に屬せり。第三類に至りては、名は物語といへども、其實は歴史の一種なり、故に之を名けて雜史といふ。榮花物語の類即ち是なり。おほ此類別の外に、支那の事を和文に記したる唐物語あり。さて此物語の作者及び年代など、共に能く知れずといへども、其

文牀歌調を觀るに、平安時代に成りしものたる事、蓋し疑ふべくもあらず。而して、この第一類と、第二類とに屬する物語は、社會の面白きこと、悲しきことをもを綜合して、世態人情を寫したるものなれども、其作者は、概ね翠帳紅圍の貴婦人なりしかば、その寫す處の區域も甚だ狹隘なりき。蓋し一、二類のものは小説的の文にして、第三類は歴史的の文ともいふべきなり。

されば、此物語といふものは、殊に歴史の參考となる事多し。我國古來の歴史は、孰れも朝廷の外部を寫す事詳かなれども、その内部に疎なるの嫌あり。假令は、正史は途を行きて、路傍の家を、外よりのぞき見たらんが如し。内部の事情は、少しも知られざるなり。然るに此物語文は、その内部を表はしたるものにして、之を讀む時は、千年以上の人情風俗より、人人の胸中をも、鏡にかけて見るが如き思あり。

物語の中にて、最も古きは、伊勢物語と竹取物語となるべし。而して、此二書は孰れも、其先後詳ならず。伊勢物語の著者は、在原業平ともいひ、或は伊勢の御の作なりともいひて、其説一定せざれども思ふに、始め業平の書きたる日記、詠みたる歌をば、後人のとりまとめて、己が筆をも加へたるものならん。また文中に、延暦遷都の後、遠く隔たらざる時のさまなど書きたるを見れば、其古きこと推して知るべきなり。

抑も物語の小説的体裁を備へたるは、竹取物語を以て最も古しとす。其脚色をいはんに、むかし竹取の翁といふ者あり。野山に入りて竹をとりて、萬のことにつかひたりしが、或時、竹の中より、光り輝く少女を見出だしたり。之をとりて養ふ程に、世に類なき美人となりぬ。赫哉姫と呼べり。かくと聞くより、皇子公達ども思ひをかけ、如何

にもして其婿とならんとて、種々苦心せしかど、姫は遂に靡かざりし程に、時の帝この事を聞召して、萬乗の尊と、四海の富とを以て之を召し給ひしに、八月十五夜に、其故郷なる月の都より、來迎せし使に伴はれて昇天せり。其時帝に不死の薬を遣し置きたるを、帝は之だに思ひの種なりとて、高山に登り、かの薬を焚き給ひけり。これより其山をふじの山といひ、且つ其煙絶えず登るなりとて、その局を結べり。其趣向は妄誕不稽なりといへども、一婦人の爲めに貴人の心をつくし、さまを書きしは、或は諷刺の意に出でたりけんと思はるれど、當時小説を以て人情風俗を裨益する等のことは未だ思付かざりしならん。されば、こもまた一種の滑稽小説に過ぎざるなり。然れども、其材料を婦人にとりしは、既に平安時代の文學たるに背かざるなり。而して、この結構は、佛説寶樓閣經の中に見えたる事

實をとりたるなり。

其文章は適強にして、最も簡潔なり。然れども、其思慕怨恨を寫したる處は、委曲緻密の筆を用ひて、其妙を極む。思ふに、其作者は世に傳ふる如く、源順ならずとするも、尙學識ある男子の手に成りしこと疑なかるべし。

伊勢物語と、竹取物語とは、其時代を去ること遠からず。其文章も頗る相似たる點あり。殊に簡潔を主として適強なる處、及び「てにをば」を省きたる處の類、極めて古風なり。要するに、奈良時代の散文は、句節層々相重りて、文理流暢ならざる傾あれども、平安時代に至りては、動詞の語尾を活用して、接續詞に代用せるを以て、大に此弊を除きたり。要するに、奈良時代には、短句多くして、平安時代には、少數の長句を連ねて、名詞などを節約すること多し。全躰を評すれば、伊勢

物語は、和歌を主として、散文は其附屬なるが如し。散文の部分は、殆ど歌の序たるに過ぎず。而して、その散文は和歌の秀逸なるに及ばざるが如し。

伊勢物語は、かくの如く、小説よりは、寧ろ序文の長き歌の集、或は日記紀行の文とも見るべきものなれば、其書きたる事柄は連續せず。其事を叙するや、憤怒怨恨交々至るを見る。世人其作者業平を以て、或は放縱自恣の徒と罵り、或は其志操忠誠なりしも、時を得ずして自ら韜晦せしものと賛すれども、余輩は平安時代の文學は、多く其文章をとれども、其紀事をとらず、また文章紀事をとれども、その人を取らざること多しあり。されば、此書に於ても、またまかりとす。此種類の物語にして後に出來たるは、即ち大和物語なり。其躰裁は、大に伊勢物語を學びたる痕跡あれど、やゝ簡淨を欠き、且つ適強なら

百四
ず。されど、此種の物語に於ては、此を措きて他に見るべきものなし。されば、八雲御抄にも、之を賞して、必ず歌人のみるべきものどあるなり。さて此作者は、世に業平の子滋春なりともいひ、また花山天皇なりともいへど、いかにやあらん。

次にあらはれしは、住吉物語、宇津保物語なるべし。而して、宇津保物語は、蠹魚の害を蒙りしと甚しく、誤脱及び順序の間違あれど、其文章の古めきたる處と、仕組の樸實なるとによりて考ふれば、その古きを推して知るべし。住吉物語の名は古るけれど、今ま世に行はるゝものは、昔の名を借りて後人の作りたるものならんといふ。

以上の諸書、何れもその作者、及び其世に公になりし年代等を知る能はざるは、遺憾の至りなりといふべし。次にあらはれしは、濱松中納言物語、落窪物語、とりかへはやの類あれど、その作者は詳かなら

ざるなり。而して、源順、志はく作者として世に傳へらる。順は、村上、冷泉、圓融の三朝に歴仕せし人にして、詩文及び和歌に巧みなりき。即ち梨壺五人の一人なり。また後世文學者の至寶とする、和名類聚抄廿卷を著はしたりし程の人なれば、竹取、落窪等の著者たりしや、否や疑はしけれども、平安時代の一大文學者たりしことは、疑ふべからざるなり。濱松中納言物語には、中納言なりける人の、唐土に渡りて、其國の皇后と通じ、子を設けて、我國に歸りしことを陳べ、落窪物語には、中納言なりける人の女、繼母に憎まれて、落くはなる處に住まはされ、落窪の君と呼ばれて、暮らしわびしを、侍女の媒介にて、藏人の少將と契りたる事どもを書きし類は、皆當時の人情風俗をうつしたるなり。とりかへはやは、或る公卿、男女二人の子をもちしが、男子は優柔、女子の如く、女子は活潑、男子の如く、相反せしをば、いかに

もして、此二人の性質を、とりかへはやど、願ひし事をかきたるものなり。かの住吉物語に、中納言兼左衛門督なる人の娘、繼母が虐待を受けて、遂に住吉の浦に流され、後に至りて、大に富榮となりて、繼母は不幸に陥りしことを書きしは、後世の勸懲主義に出でたる作に似たる處あり。之を見ても、以て他書に比して、その新らしきを知るに足れり。

物語と名けられたる書は、尙、此外に、朝倉物語、交野少將物語、ねさめ物語、井手中將物語、梅壺少將物語、自から悔ゆる物語、あし火焚く屋の物語、ふせこの少將物語等、源氏、狹衣、枕草紙等に名をのみ擧げられたれど、今日に傳はるもの少し。然れども、余輩は、唯かの絶世の傑作と稱へらるゝ源氏物語をして、その種類の散文を代表せしめ、委しく之を論ぜんとす。

大伴大納言

竹取物語

大伴のみゆきの大納言は、我家にありとある人を、めしあつめてのたまはく、たつづくびに五色に光ある玉あり。それをとりて奉りたらむ人には、ねかはむ事を、かなへむとのたまふ。そのことも、仰ことをうけたまはりて、まうさく、おほせの事は、いともたふとし、たゝし此玉は、やすく得とらむを、いはむや、龍の首の玉は、いかゞとらむとまうしあへり。大納言の給ふ、君のつかひといはんものは、命をすてゝも、おの君の仰事をば、かなへむとこそ思ふべけれ。此國になき、天竺もろこしの物にもあらず。この國の海山より、たつはありのぼるものなり。いかにおもひてか、なむぢらかたき物と申べきを、のことも申やう。さらば、いかゞはせむ。かたき物なりとも、仰事にし、たかひて、求めにまからむと申す。大納言見笑ひて、汝等君のつかひと名をなかしつ。君の仰事をば、いかゞはせむと申す。龍の首の玉とて出たて給ふ。此人々の道のかてくひ物に、殿のうちの絹、わた、錢などある限り、とらひて、そへてつかはす。此人々ども歸るまで、いもみをして、我はをらむ。此玉とりえでは、家にか

へりくなどのたまはせけり。おのゝ仰うけ給はりて、まかりいでぬ。龍の首の玉ど
りえずはかへりくなどのたまへば、いつちもゝあしのむきたらむかたへいな
んとす。かゝるすき事を志給ふことゝそしりあへり。たまはせたる物は、おのゝわ
つゝどり、或はおのが家にもりあひあるひは、おのかゆかまほしき所へいぬ。あや、き
みと申ども、かくつきなき事を仰せ給ふ事と、ことゆかぬ物ゆゑ、大納言をそしりあ
ひたり。かくや姫すゑむには、例のやうにては見にくしとの給ひて、うるはしき屋を
作り給ひて、うるしをぬり、蒔繪をし、いろへ志給ひて、屋の上には糸をそめて、色々
ふかせて、うちゝの志つらひには、いふべくもあらぬ綾あり物に繪をかきて、間を
どにはりたり、もとの妻どもは、皆あひはらひて、かくや姫をかならず、あはむまうけ
して、獨あかしくらし給ふ。つかはしゝ人は、よるひる待ち給ふに、年こゆるまで音も
せず、心もどながりて、いと志のびて、たいどぬりふたりめしつきとして、やつれ給ひ
て、難波の邊におはしまして、どひ給ふことは、大伴の大納言の人や舟にのりてたつ
ころして、そが首の玉とれるとやきくと、とはするに、船人こたへていはく、あやしき
事かなど、わらひて、さるわざする舟もなしとこたふるに、をぢなきことする船人に

も有かな。えまらでかくいふとおぼして、我弓のちからは、龍あらば、ふといころして、
首の玉は取てむ。あそく来るやつはらをまたじとの給ひて、舟にのりて、海ごどにあ
りき給ふに、いと遠くて、筑紫のかたの海にこき出給ひぬ。いかゝしけむ。はやき風吹
きて、世界くらがりて、舟をふきもてありく。いつれのかたどもまらず、船を海中にま
かり入れぬべく吹まはして、涙は舟にうちかけつゝまきいれ、神はおちかゝるやう
にひらめきかゝるに、大納言はまどひて、まだかゝるわびしきめは見ず、いかならむ
とするそとの給ふ。かぢ取こたへてまうす。こゝら舟にのりてまかりありくに、まだ
かくわびしき目を見ず、御舟の底にいらずば、かみあちかゝりぬべし。もし幸に神
のたすけあらば、南海にふかれおはしぬべし。うたてあるぬしの御供につかへまつ
りて、すゝろなる死をすべかんめるかなどて、楫取泣く。大納言是をきいてのたまは
く、船にのりては、楫取のまうす事をこそ、高き山ともたのめなど、かくたのもし氣な
き事を申すそと、あをへどをつきての給ふ。かぢどりこたへてまうす。神ならぬば、何
わざをかつかうまつらむ。風ふき浪はけしけれども、かみさへいたゞきに落ちかゝ
るやうなるは、龍をころさむと、もどめ給ひさふらべはかくあなり、はやても、龍のふ

かするなり。はや神にいのり給へといふ。よき事なりとて、楫取の御神きこしめせを
ぢなく、心をさなく、龍をころさむと思ひけり。今より後は、毛の末一筋をだにうこか
し奉らじと、よことをはなちて、立あなく、よばひ給ふ事、ちたびばかりまうし給
ふけにやあらむやう、かみなりやみぬずこしあかりて、風は猶はやくふく。楫取
のいはく、これは龍のまわざにこそ有けれ。此ふく風は、よきかたの風なり。あしき方
の風にはあらず。よきかたにあもむきて、ふくなりといへども、大納言は是をききい
れ給はず。三四日ありて、ふきかへしよせたり。濱を見れば、はりまの明石の濱なりけ
り。大納言、南海のはまに、吹よせられたるにやあらむとおもひて、いきつきふし給へ
り。舟にあるをのことも、國につけたれば、國のつかさまでどふらふにも、えおきあ
がり給はで、ふなぞこにふし給へり。松原にみむしろ敷きてあるし奉る。其時にぞ、南
海にあらざりけりと思ひて、からうじておきあかり給へるを見れば、風いとおもき
人にて、腹いとおくれ、こなたかなたの目には、すもふたつ、つけたるやうなり。是を
見奉りてぞ、國の司もほゝえみたる。國におほせ給ひて、たごしつくらせ給ひて、によ
ふくになはれて、家にいり給ひぬるを、いかでかきけむ。つかはし、をのことも、

まありて申やう、龍の首の玉をえとらざりしかばなむ、殿へもえまゐらざりし。玉の
どりかたかりしことをしり給へればなむ、かむだうあらじとて、参りつるとまうす。
大納言おきいでてのたまはく、なむぢらよくもてこずなりぬ。りうはなるかみの類
にてこそありけれ。それが玉をとらむとて、そこらの人々のがいせられなむとしけ
り。ましてりうをとらへたらましかば、また、こともなく、われはがいせられなまし。よ
くどらへずなりにけり。かくやひめてふおほぬす人のやつが、人をころさむとする
なりけり。家のあたりだに今はとほらじをのことも、なありきそとて、家にすこし
のこりたりけるものどもは、龍の玉とらぬものどもにたびつ。是をきいてはなれ給
ひしものうへは、はらをきりてわらひ給ふ。糸をふかせてつくりし屋は、どびから
すの巢にみなくひもていにけり。世界の人のいひけるは、大伴の大納言は龍の首の
玉やとりておはしたる。いな、さもあらず。御まなこふたつに、すもゝのやうなる玉を、
そへていましたるといひければ、あなたへがたといひけるよりぞ、世にあはぬ事を
も、あなたへがたとはいひはじめける。

惟喬のみこ

伊勢物語

むかし、惟喬のみこと申す、御子おはしましけり。山崎のあなただに、水無瀬といふ所に宮有けり。年ごとの櫻の花盛には、其宮へなんおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人を、常にみておはしましけり。時世へてひさしくなりければ、其人の名わすれにけり。狩はねんころにもせで、酒をのみつゝ、やまと歌にかゝれりけり。今かりする交野の渚の院の櫻、ことにおもしろし。その木のもとにありて、枝を折りてかざしにさして、かみなかしも皆歌よみけり。馬のかみなりける人のよめる、

世の中にたえて櫻のさかざらは

春の心はのどけからまし

となんよみたりける。又、人のうた

ちればこそいとくらはめでたけれ

うき世になにかひさしかるべき

とて、その木のもとにはたちてかへるに、日ぐれになりぬ。御ともなる人、酒をもたせて

野より出きたり。この酒をのみてんとて、よき所をもとめゆくに、天の川といふ所にいたりぬ。みこに馬の頭、おほみきまゐる。みこの乃たまひける。交野を狩りて、天の川のほとりにいたるを題にて、歌よみてさかつきさせとの給ひければ、よみて奉りける。

かりくらしたなはたつめにやどからむ

天のかはらにわれは來にけり

ときこえければ、此歌をみこかへす。ずし給ひて、返しえ志給はず。紀の有常御ともにつかうまつれり。それがかへし

ひととせにひとたびきます君までば

やどかす人もあらじとぞおもふ

かへりて、宮にいらせ給ひぬ。夜ふくるまで酒のみ物語して、あるじのみこをひて入給ひなんとす。十一日の月もかくれなんとすれば、かのうまのかみのよめる、

あかなくにまたきも月のかくるゝか

山の端にけて入れずもあらなん

みこにかはり奉りて、紙の有常
おしなべて嶺もたひらになりななん

山の端なくば月も入らじを

伊勢物語

むかし、みなせにかよひ給ひし惟高のみこ、れいの狩しにおはします。とも馬の頭
なる翁つかうまつれり。日ころへて宮にかへり給ひけり。御おくりして、どくいなん
と思ふに、犬みきたまひ、ろく給はんとて、つかはさざりけり。此うまのかみ、心もとな
がりて

枕とて草引結ぶこともせじ

秋の夜とだにたのまれなくに

とよみける。時はやよひのつこもりなりけり。みこおほどのごもらで、あかし給ひて
けり。かくしつゝ、まうでつかうまつりけるを、おもひのほか、御ぐしおろさせたま
ひて、小野といふ所にすみ給ひけり。むつきにをかみ奉らんとて、まうでたるに、比え

の山のふもとなれば、雪いとたかし。まひてみむろにまうでしを、がみたてまつるに、
つれくといと物がなしくて、おはしましければ、やゝ久しくさふらひて、いにしへ
の事など思ひ出できこえけり。さてもさふらひてしが、なと思へど、おほやけ事ども
ありければ、えさふらはで、夕暮にかへるとて

わすれては夢かと思ふ思ひきや

雪ふみ分けて君をみんとは

とてなんなくくきにける。

一條天皇の時には、有名ある國文學者相續いて出でたり。即ち藤原
齊信、藤原公任、源俊賢、藤原行成は四納言と稱せられ、才學を以て名
ありき。また、閨秀には、赤染衛門、和泉式部、伊勢大輔の流ありしが、就
中殊に優れたるは、源氏物語の作者紫式部と、枕草紙の筆者清少納
言となり。

紫式部は、藤原爲時の女にして、堤中納言兼輔の曾孫なり。はじめ右

衛門權佐、藤原宣孝の妻となりしが、不幸にして早く其夫に後れたりき。後には一條天皇の中宮彰子（藤原道長の女、上東門院と號す）に奉仕して、御覺え殊にめでたかりしといふ。式部の父爲時は、菅三品の門に遊びて、文章生より起り、越前守となりし學者なりき。式部、性聰敏にして、幼き時、その兄惟規が讀書するを聽き、常に之を暗記せしといふ。父爲時いたく之を愛し、常に口惜しう、男子にもたぬこそ、幸なかりけれといひけりとぞ。されは式部長ずるに従ひ、和漢の書史を涉獵し、兼ねて朝廷の典禮故實にも通曉し、また佛説をも修め、最も歌文に巧みなりき。而して、式部は、順良謹慎にして、我が所長に於らず、貞淑にして節操の譽れ高き賢女なり。夫れ當時の風たる、淫奔浮薄、言ふに忍びざる間に立ち、毅然として獨り其婦徳を全くせしは、實に婦女の龜鑑として稱すべきなり。豈に單に文學の大家とし

て尊崇すべきのみならんや。紫式部といふは、其本名にあらずして通稱なりしといふ。本名は傳はらざれば知り難し。而して、此通稱に就きて、古來諸説あり。源氏物語に、紫の上の事を、殊に妙寫せしを以て、始め藤式部と云ひしを、紫式部と稱せしといひ、或は藤式部の名は、玄妙ならざるに因り、其花の色をとりて、紫の字に換へしなりともいひ、或は式部は、一條天皇乳母の子なれば、其上東門院に仕へし時、天皇、これは我がゆかりのものなり、あはれとおほしめせと、宣ひし勅詔に基きたりともいへり。ゆかりのものとは、紫の一本ゆゑに武藏野の草は皆がらあはれとぞ見るといふ。古歌に本づけりされども、其孰れか是なるを知らず。

源氏物語は、如何にして作られしかといふに、或る説に、村上天皇の皇女、選子内親王より、中宮に徒然慰むべきめづらしき草子やばべ

ると尋ね給ひし時、中宮は更に式部に命じて、これを綴らしめ給ひければ、式部仰をかしくみ、石山寺に閉居して、之を作りたりと云ひ傳ふれど、此説につきては古來疑義多し。學者多くは宮仕への前、寡居せし間の作ならんといへり。此書成りし時、一條天皇叡覽ありて、是れ能く日本紀を讀みたるものゝ筆なりと賞し給ひしかば、式部はこれより、日本紀の局の名を得しといふ。さて、この物語は、源氏の君といふ、容貌極めて都雅にして、情に富み、諸藝に通じたる皇子を以て、主人公とし、配するに紫の上といへる、絶世の佳人を以てして、其履歴を骨子とし、數多の人物、複雑なる事件を之に纏ひたる物語なり。叙事の時代は、醍醐、朱雀、村上の三朝に亘り、且つ物語中の主要なる人物は、多少准據する所ありと云はる。一部五十四帖より成れり。其名稱は、桐壺、帚木、空蟬、夕顔、若紫、末摘花、紅葉賀、花宴、葵、賢木、花

散里、須磨、明石、みをつくし、蓬生、關屋、繪合、松風、薄雲、朝貌、乙女、玉菖、初子、蝴蝶、螢、常夏、かゞり火、野分、御幸、藤はかま、まきの柱、梅が枝、ふちの裏葉、若菜、栢木、横笛、鈴虫、夕霧、御法、まほろし、雲かくれ、匂ふ兵部卿、紅梅、竹河、橋姫、椎か本、總角、さわらび、宿木、東屋、浮舟、かけろふ、手習、夢の浮橋等あれども、雲隠れの卷のみは、名ありて文なし。蓋し、此卷には源氏の君の、薨去を寫ししものともいふ。されはにや、是れより以下は、多くは其子、薰太將の事に係り、特に、橋姫より、夢の浮橋までを、宇治十帖とよなへ、以て、本文と分つ。

此物語は、古來盛んに弄はれ、我國文學上の至寶として賞はれしより、之が註解を下し、及び評論を試みたる書いと多し。即ち、素寂法師の紫明抄、一條兼良の花鳥餘情等を始として、枚擧すべからずと雖も、就中、解釋簡單にして、其要を得、初學の徒に便なるは、北村季吟の

湖月抄六十卷なり。また、本居宣長の玉の小櫛は、此物語の評論、文句の解釋に於て、卓見多く、萩原廣道の源氏評釋は、未完の書なれども、其評論解釋の周密なること、此書の右に出づるものなし。また、安藤爲章の紫女七論は、式部が才徳兼備の閨秀たりしことを辨せり。苟くも源語を繙かん者は、少くとも此四書を参考せざるべからず。さてこの源氏物語も、また平安時代のものなれば、前にも述べたりしが如く、漢學及び佛教の影響を受けしこと、また少なからざるなり。されば、漢學者は此書を見て、莊子史記に基きて、仁義五常を論ずものなりと説き、佛者は此を以て、天台六十卷に擬して、六十帖に作り、併せて生老病死有爲轉變を説きしものなりといふ。此等の説たる、何れも極端に走りて、其中正を得ずといへども、また以て漢學佛法の影響を受けしこと、大なるを知るに足れり。

源語の文章の妙は、其思想結構の巧みなると相合し、著作の上乗たること、今更に言ふを待たず。されば漢學に溺れ、洋學に泥める人々といへども、一度此書を繙く時は、必ずその妙所を見出し、其傑作たることを自然にさとらん。抑も、式部が筆の自由自在なる、その意の到る處に従はざるはなく、情の赴く處に伴はずといふことなし。これ畢竟、假名文字の利器を有すると、其學識の深邃なるとに、由るとはいへど、讀む度毎に、如何にも其高妙なるに驚かずんはあらず。其艷麗緻密の筆は、身外の萬象を抽寫して、殘す處なく、複雑なる人情を畫きて餘す處なく、また高遠微妙の思想を寫して明快ならずといふことなし。殊に、雨夜の品定め的一段の如きは、議論躰の雅文の摸範として、人口に膾炙せり。其縱横錯綜せる事柄も、皆悉く遺す處なく、丁寧之を分疏し批判して、知らずくゝ讀者をして、身其坐に

在りて、其議論をきくが如き、無限の趣味を覚えしむ。然れども、其文は猶、温厚謹慎にして、貞淑なる紫式部其人の如く、到る處其銳利なる筆鋒を包むを見る。概していへば、紫式部の文は、艶麗緻密にして、其特異の點は、温厚沈着なるに在り。逸氣奔放の一點に至りては、或は枕草紙に一步を譲らざるを得ざるべし。而して、文章の抑揚起伏、照應等の用意を、周密にせるものは、我國の國文中、一としてこの書の右に出るものなし。然れども、平調に流れ易きと、氣力の薄弱なるとは、此種の文牀一般の弱點なるが上に、特に婦人の手になりしものなれば、到底此餘弊を免るゝこと能はざるなり。

余輩は、此物語の文例を擇ぶに當り、殊に困難を感じたり。そは此書、全篇至る處妙ならざるなきを以て、強ひて其一部分を拔萃すれば、恰も白玉を碎きてその一片を示すが如く、到底その文牀着想の妙

を窺はしむる能はざればなり。然れども、古人の特に秀でたりといひし處と、余輩の絶妙と覺ゆる處とを掲ぐべし。世に傳ふ、藤原定家は明石の巻の

三昧堂近くて、かねの聲、松の風にひいきあひて、もの悲しう岩に生ひたる松の根ざしも、心ばへあるさまなり。前裁どもに、虫の聲をつくしたり。こゝかしこの有りさまなど、御覽ず。娘住ませたる方は、心殊に磨きて、月入れたる櫃の戸口、けしきばかり推しあけたり……

の一節を、一部中第一の語なりといはれたり。されば余輩が掲けたる數頁は、或は源語の文の一斑を示すに足らん。

式部はまた和歌に巧みなり。されば、其名歌の勅撰集に入れられたる多くして、梨壺五歌仙の中、恐くば、式部の右に出づるものなからん。そは源語一部中に、載せたるを見ても知らるゝなり。

源語を小説として視る時の價值は如何なるか、余輩はいまこゝに之を詳論せざるべし。但し、其富贍なる想像により、充分、意匠を凝らして、一篇の脚色を設け、人物、景色、情況、事件の配置、權衡、前後相照應して、また著しき欠點なきは、余輩の信ずる所なり。其悲哀の情を寫せるは、桐壺、夕顔に於て見るべく、滑稽を寫せる所は、紅葉賀等に於て見るを得べし。特に其人物をして、各特質を有せしめ、源氏の君の始終閑雅なると、紫の上の婉柔にして、飽くまで上臈めきたる等は、皆劃然として分別し得べし。更に後世の小説作者の如く、同一の人物をして、種々異様の假面を蒙らしむる如きことなし。然れども、式部は寫實より入りて理想の境に進みたるものなる事を知らざるべからず。されば、其人物も事實も、概ね理想的に構造せられて、かの源氏の君といひ、紫の上といひ、孰れも皆理想的の才子佳人ならざ

るはなし。抑も古來源語を論ずる者、之を罵る人は、其事柄を以て其文辭をさへ取らず。また之を賞する輩は、其文辭に眩惑して、其事柄をさへ曲庇するの傾向ありき。然るに本居宣長は、玉の小櫛にて、此書に關係する從來の諸書を是非し、着實妥當なる見解を下し、かの安藤爲章の紫女七論だに、尙免れざりし、源語は勸懲の書なりといふ見解を排斥して、此書は、單に社會の真相を寫し出せるまでのものなりと、いはれしは卓見といふべし。

然れども、惜むらくは、この書文學上の至寶にてありながら、動もすれば、誨淫の書なりと、譏られ、敗徳亂倫の文なりと、斥けらるゝは、遺憾の極といふべし。惟ふに、紫式部の時代には、上下擧りて淫逸の俗盛なりしかば、遂にこの謹慎貞淑なる紫式部をして、その筆をかゝる事實に、汚さしめたりしならん。

源氏物語は、名にしおふ大篇のことなれば、記事、叙事、議論の文等、大抵その中に備はらざるはなし。まかのみならず、對話問答の條最も多きにより、平安朝の通用語の如何なりしかを知るに足れり。抑も源語の文章は、純粹なる言文一致にはあらざるべきも、其對話問答の條は、蓋し其實際を去ること甚だ遠からざるべし。また、一篇の中、處々に往復文の散見するありて、當時の消息文牋を知るべく、また、初め男子の往復文は、専ら漢文なりしが、婦人の間に行はれたりし假名文の、遂に男子の間にも、行はるゝに至りしことを、知るに足れり。

桐壺の一節

源氏物語

夜いたう、ふけぬれば、こよひすゞさず、御かへり奏せむと、いそぎまゐる。月は入がた

の空清くすみわたれるに、風いとすゞしく吹て、草村の虫のこゑも、もよほしがほなるも、いとたちはなれにくき草のものと成り。

すゝむしの聲のかぎりをつくしても

ななき夜あかずふるなみだかな

えものりやらす

いとゞしくむしのね志げきあさぢふに

つゆあきそふる雲のうへびと

かごども、聞えつべくなむと、いはせたまふを、かしき御あくりものなど、あるべきをりにもあらねば、たゞかの御形見とて、かゝるようもやと、のこしたまへりける。御さうぞくひとくたり、御くしあげの、うとめく物そへ給ふ。わかき人々、かなしきことはさらにもいはず。内わたりを、朝夕にならひて、いとさうゞしく、うへの御ありさまなど、おもひいで聞ゆれば、とくまゐり給はむ事を、そのかし聞ゆれど、かくいまゞしき身のそひ奉らむも、いと人ぎうかるべし。また見奉らで、まばしもあらむは、いとうしろめたう、おもひ聞え給へて、すがゞども、えまゐらせ奉りたまはぬな

りけり。命婦は、まだおほどのごもらせたまはざりけるを、あはれに見奉る。おまへのつぼせんざいの、いとおもしろきさかりなるを、御らんずるやうにて、忍びやかに、心にくきかざりの女房、四五人さふらはせ給ひて、御ものがたり、せさせ給ふなりけり。この頃、あけくれ、御らんずる長恨歌の御意、亭子院のかゝせ給ひて、伊勢、貫之によませ給へる、やまとことのはをも、もろこしのうたをも、たゞそのすぢをぞ、まくらごどにせさせ給ふ。いとこまやかに、ありさまをどはせ給ふ。あはれなりつること、忍びやかに奏す。御返り御らんずれば、いともかしこきは、あきどころも侍らず。かゝるあはせごどにつけても、かきくらすみだり心ちになむ。

あらしき風防ざしかげのかれしより

小菰がうへぞまづこゝろなき

などやうに、みだりがはしきを、心をさめざりけるほど、御らんじゆるすへし。いとかうしも見えじと、おぼしまづむれど、さらになえ志のびあへさせ給はず。御らんじはじめし年月の事さへ、かきあつめ、よろづにおぼしつゝけられて、時のもも、おぼつかなかりしを、かくても、月日はへにけりど、あさましうおぼしめさる。故大納言のゆゑ

ごんあやまたず、宮づかへのほい、ふかくものしたりしよろこびは、かひあるさまにどこそ、おもひわたりつれいふかひなしやと、うちのためはせて、いとあはれにおぼしやる。かくても、おのづから、わか宮などおひいで給は、さるべきついでもありなむ。命ながくどこそ、おもひねんせめなどの給はす。かのおくりもの、御らんせさす。なき人のすみか、たづねいでたりけむ、志るしのかんざしならましかばと、おもほすもいとかひなし。

尋ねゆくまぼろしもがなつでにても

魂のありかをそこ志るべく

えにかける楊貴妃のかたちは、いみじきえしといへども、筆かざりあもればいどにほひなし。大液の芙蓉、未央の柳も、げに似かよひたりしかたちを、唐めいたるよそひは、うるはしうこそありけめ。なつかしう、らうたげなりしを、おぼしいづるに、花鳥の色にも音にも、よそふべきかたそなき。あさゆふのことぐさに、はねをならべ、えだをかはさむと、ちぎらせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ、つきせず、うらめしき風のおとむしのねにつけて、ものゝみかなしうおぼさるゝに、弘徽殿には、ひさしう、

うへの御つぼねにも、まうのぼり給はず、月のおもしろきに、夜ふくるまで、あそびを
ぞまたまふなる。いとすさまじう、ものしどきこしめす。此頃の御けしきを見奉るう
へ人、女房などは、かたはらいたしどき、けり。いと、おしたち、かどくしき所、ものし
給ふ御かたにて、ことにもあらず、おぼしけちて、もてなし給ふなるべし。月もいりぬ。

雲のうへも涙にくもる秋の月

いかですむらんあさちふの宿

おぼしやりつゝ、どもし火をかゝげつくして、おきおはします。

帚木の巻の一節

源氏物語

今は、たいしなにもよらむ。かたちをば、さらにもいはじ。いとくちをし、ぬちけがま
しきおぼえだになくば、たゞひとへに、ものまめやかに、しづかなる心のおもふきな
らんよるべをぞ、つひのたのみ所には、思ひおくべかりける。あまりのゆゑよし、心ば
へうちそへたらんをば、よろこびにおもひす。こしおくれたるかたあらんをも、あな

がちにもどめくはへじ。うしろやすく、のどけき所だに、つよくは、うはべのなさは、
おのづから、もてつけつべきわざをや。中畧よろづのことによそへておぼせ木のみ
ちのたくみの、よろづのものを、心にまかせて、つくりいたすも、りんじのもてあそび
もの、その物と、跡もさだまらぬは、そばつき、ざれば、みたるも、げにかうもしつべか
りけりと、時につけつゝ、さまをかへて、今めかしきに、めうつりて、をかしきもあり。大
事として、まことにうるはしき人の、でうど、のかざりとする、さだまれるやうあるも
のを、なんなくしいづることなん、なほまことのもの、上手は、さまことに、みえわか
れ侍る。又、ゑ所に上手おほかれど、すみがきにえらばれて、つぎく、に、さらに、おどり
まさるけちめ、ふとしもみえわかれず。かゝれど、ひとの見及ばぬほうらいの山、あら
海のかれるいをのすがた、から國のはげしきけだもの、かたち、めに見えぬおに
のかほなど、おどろくしくつくりたるものは、心にまかせて、ひとときは、人のめを
おどろかして、じちには、似ざらめど、さてありぬべし。よのつねの山のたゞ、ずまゐ、水
のながれ、めにもちかき人の家、居ありさま、げにとみえ、なつかしくやはらひたるかた
などを、しづかにかきませて、すぐよかならぬ山の氣色、木ぶかく、よばなれて、たゞみ

なし、けちかきまかきの中をば、そのこゝろしらひおきてなどなん、上手はいどいき
ほひことば、わろものはおよばぬ所おほかんめる、てをかきたるにも、ふかきことは
なくて、こゝかしこの、てんながにはしりかき、そこはかどなく氣色ばめるは、うちみ
るに、かどくしく、けしきだちたれど、なほまことのすぢを、こまやかにかきえたる
は、うはべのふで、きえてみゆれど、今ひとたび、とりならべてみれば、猶じちになんよ
りける、ばかなき事、だにかくこそ侍れ、まして、人の心の、時にあたりてけしきばめら
ん、みるめのなさけをば、えたのむまじく思、う玉へ侍り。

須磨の秋

源氏物語

すまには、いと心づくしの秋風に、海はすこしとほけれど、行平の中納言の、せきふ
きこゆると、いひけむうらなみ、よるくは、げにいとちかくきこえて、又なくあはれ
なるものは、かゝる所の秋なりけり、御前にいと人ずくなにて、うちやすみわたれる
に、ひとりめをさまして、枕をそばだて、よものあらしをき、たまふに、なみたこ

ゝもとに、たちくるこゝちして、なみだおつともおぼえぬに、まくらうくばかりにな
りにけり、琴をすこしかきならし給へるが、我ながら、いとすごうきこゆれば、ひきさ
し給ひて

戀わひてなくぬにまがふ浦波は

思ふかたより風やふくらん

とうたひ給へるに、人々おどろきて、めでたうおほゆるに、志のばれて、あいなうおき
あつゝ、はなを忍ひやかにかみわたす、げにいか思ふらむ、我身ひとつにより、おや
はらから、かた時立はなれがたく、程につけつゝ、おもふらむ家をわかれて、かくまど
ひあへるとおぼすに、いみじくて、いとかくおもひまづむさまを、心ぼそしとおもふ
らむとおぼせば、ひるはなにくれど、たはむれごと、うちのたまひまきらはし、つれづ
れなるまゝに、いろくのかみをつぎつゝ、手ならひを志給ふ、めづらしきさまなる、
からのあやなどに、さまぐのゑどもを、かきすさび給へる、屏風のおもてどもなど、
いとめでたく見どころあり、人々の語りきこえし、海山のありさまを、はるかにおぼ
しやりしを、御めにちかくては、げにおよばぬいそのたいずまひ、になくかきつめ給

へり。この頃の上手にすめる、千枝、つねのりなどめして、つくりえをつかうまつらせ
ばやど、心もどながりあへり。なつかしうめでたき御ありさまに、よの物おもひわす
られて、ちかうなれつかうまつるを、うれしき事にて、四五人ばかりぞ、つとさふらひ
ける。前裁の花、いろくさきみだれ、おもしろき夕ぐれに、海みやらるゝ廊に出給ひ
て、たゞみ給ふ、御さまのゆゑしう、きよなること、どころがらは、ましてこの世の
ものどもみえ玉はず、志ろきあやの、なよゝかなる志を、ん色など奉りて、こまやかな
る御なをし、おび志どけなく、うちみだれたまへる御さまにて、志やかむにぶつでし
ど名のりて、ゆるらかによみ給へる、また世に志らずきこゆ、おきより、舟どものうた
ひのゝまりて、こぎ行くなともきこゆ、ほのかに、たゞちひさき鳥のうかべると見や
らるゝも、心ぼそげなるに、かりのつらねてなく、聲、かぢのおとにまがへるを、うちな
がめ給ひて、御涙のこぼるゝを、かきはらひ給へる御手つき、くろぎの御すゝにはえ
給へるは、故郷の女こひしき人々の心みな慰みにけり。

初かりはこひしき人のつらなれや

たびの空とぶこゑのかなしき

どのたまへば、よしきよ

かきつらぬ昔のことぞおもほゆる

かりはその夜の友ならねども

民部大輔

心からどこよをすてゝなくかりを

雲のよそにもおもひけるかな

さきの右近のせう、

どこよいでゝたびの空なるかりがねも

つらにおくれぬほどぞなぐさむ

友まどはしては、いかに侍らましといふ、親のひたちになりて、くだりしにもさそは
れで、まゐりしなりけり。またには思ひくたくべかめれど、ほこりかにもてなして、つ
れなきさまにしありく。月の、いとはなやかに、さし出たるに、こよひは、十五夜なりけ
りとおぼし出て、殿上の御あそびこひしく、所々ながめ給ふらむかしと、おもひやり
たまふにつけても、月のかほのみまもられ給ふ、二千里外故人心と、ずし給へる、例の

涙もとめられず。入道の宮の霧や隔るとの玉はせし程いはむかたなくこひしく、
をりくゝのことおもひ出給ふに、よゝとなかれ給ふ。夜ふけ侍ぬときこゆれど、猶い
り給はず。

見るほどぞまばしなぐさむめぐりあはむ

月の都ははるかなれども

その夜、うへのいとなつかしう、昔物語などま給ひし御さまの院よにたてまつり給
へりしも、戀しく思ひいできこえ給ひて、恩賜の御衣は今こゝにありと、すしつゝ入
り給ひぬ。御ぞは、まことに身はなたず、かたはらにおき給へり。

うしとのみひとへに物はおもほえて

ひだりみぎにもぬるゝ袖かな

第四章 日記及び紀行

平安時代の散文にて、物語の次に見るべきは、日記及び紀行の文な

り。日記は、著者が日々に起りし事を録せるものにして、紀行は旅行
中に見聞せし事どもを記したるものなり。日記は、紫式部日記最も
有名なり。之に次ぎて、蜻蛉日記、和泉式部日記、讃岐典侍日記等、亦、觀
るに足る。紀行には、土佐日記、其首位を占め、更科、いはぬし等の日記
之れに次ぐ。然れども、土佐日記の如きは其名は日記なれども、全く
紀行の体裁を帶ぶ。畢竟、日記、紀行、隨筆の三者は互に相類似して、其
間に畫然たる區別を立つること能はざるなり。而して、日記、紀行は
もと共に實用に供するよりは、寧ろ娛樂の爲めに作りしものなれ
ど、今より當時の事情を知らんと欲するものは、必ず一讀すべき價
値あり。其文章の巧みなるは、ことさらに言ふを要せず。紫式部日記
は、式部がその夫宣孝に後れて、寡居せし時の記録なり。其上東門院
に奉仕せし有様、門院の父、關白道長に懸想せられしを拒みし事、式

部が日本紀ノの局の稱を得しことなど、詳かに之を記るせり。されば、余輩はこれによりて、大に式部の人となりを知り得るなり。もと、さまで經營せずして、事實をかきつけし日記のことなれば、其文章は、源氏物語の緻密莊麗なるに及はずといへども、思ひのまゝに筆を下して、毫も苦心斧削の痕を見ず、輕快にして簡淨なる、また頗る觀るべき處あり。蜻蛉日記は、右大將道綱の母、即ち攝政兼家が夫人の記録なり。兼家未だ微なりし時、此女に通ひはじめてより、道綱を生みし前後、二十餘年間の日記なれば、之を繙きて、村上、冷泉、圓融三朝の頃の風俗の一斑を知る事を得べし。其文跡は日記の中にて稍異なれるものなり。たゞ年月の下に其出來事を繋ぐるのみならず、やゝ隨筆に似たる處あるが如し。

此書の「かけろふ」の日記といはるゝは、其卷中に「かく、年月はつもれ

ど、おもふやうにもあらぬ身をしなげくは、とし改まるもよろこばしからず、尙、ものはかなきを思へば、有るかなきかの心地する、かけろふの日記といふべし。」といへるに基きたれば、蜻蛉の文字を用ふるは、蓋し唯其訓の同じきによれるなるべし。和泉式部日記もまた、冷泉天皇の皇子敦道親王が、式部へ通ひ給ひし事柄を記したるものなり。讚岐典侍日記には、堀河天皇の御惱より、次で崩御ありしこと、及び其明年に後鳥羽天皇の御即位の事より、大嘗會を行はせられし事等を録せるものなれば、歴史、法制を學ばむものゝ参考となる事少なからず。文章もまた巧みなり。更科日記は、菅原孝標の女の日記にして、後冷泉天皇の頃になれりといふ。文章また觀るに足る。紀行の第一位を占めたる土佐日記は、紀貫之が土佐の國守となり、任所に在ること五年、後ち承平四年に任滿ちて、京に還りし時の紀

行なり。當時、紀行日録等の如き男子の文は、みな漢文にして、假名文は、女の専ら用ふるのみなりしかは、貫之の此紀行は、ことさらに婦人の筆したるものゝ如くし、開卷第一に「男のすなる日記といふものを、女もして見んとてするなり」と書きたり。貫之は歌仙といはるゝ人なれば、其歌の巧妙なるは、更にもいはず。文章も亦巧みにして、土佐日記の外にも、古今和歌集序、大井川行幸和歌序等の作あり。土佐日記は、これらの歌序の文の如く、浮華なる嫌ひなく、輕妙にして、更に痛心經營の痕跡を留めず。その土佐の國府より、京都まで、僅かに百里の旅路に、五十日の永きを費し、或は海賊を恐れ、或は亡兒を悼みけるさまなど、當時の状態目の前に見るが如き妙味あり。文章の趣を添ふるが爲めには、反對の語句を用ひて形容したる處多く、且つ、祝詞等に多く見る處の古文脈も、此日記に於ては、やゝ其痕跡

を認むることを得べし。また文中、屢滑稽をまじへ、諧謔の文句を挿めるは、此記の特色の一つなれども、やゝ野卑にして、また煩はしきに陥るの嫌ひあり。

正月十七日の條

土佐日記

(録註)十七日、曇れる雲なくなりて、曉月夜いとおもしろければ、舟を出してとぎゆく。この間は、雲の上も、海の底も、同じ如くになんありける。うべも昔のをのこは、棹は穿つ波の上の月を、船は襲ふ海の中の天を、とはいひけん。きゝさしにきけるなり。またある人のよめる。

みなそこの月のうへより漕ぐ舟の

棹にさはるはかつらなるらん

これを聞きて、ある人のまたよめる

かけ見れば波のそこなる久方の

空こそわたるわれぞわびしき
かくいふ間に、夜やうやく明けゆくに、櫂取等くろき雲にはかにいできぬ。風もふきぬべし。みふねかへしてん。といひてかへる。この間に雨ふりぬ、いとわびし。

二月四日の條

全

(三) 四日、櫂取、今日風雲のけしき甚だあしといひて、舟出さずなりぬ。然れども、終日に波風たえず。この櫂取は、日も得計らはぬかたみなりけり。この泊の濱には、種々のうるはしき貝石など多かり。かゝれば、唯昔の人をのみ戀ひつゝ、舟なる人のよめる。

よする浪うちも寄せなんわが戀ふる

人わすれ貝ありてひろはん

といへれば、或人堪へずして、舟の心やりによめる

忘れ貝拾ひしもせむ白玉を

戀ふるをだにもかたみと思はん

となんいへる。女兒の爲めには、親をさなくなりぬべし。玉ならずもありけんをど人

いはんや、されども、死にし子、顔よかりきといふやうもあり。尙、同じ所に日をふる事を歎きて、或る女のよめる歌。

手をひて、寒さもしらぬ泉にぞ

汲むとはなしに日頃へにける

五日、今日からくして、和泉の灘より小津のとまりをとおふ。松原めもはるくとなり。かれこれ苦しければよめる歌。

ゆけどなほ行きやられぬは妹がうむ

をつの浦なるきしのまつばら

かくいひつゝ、來る程に、舟とくこげ日のよきにもよほせば、櫂取舟子どもにいはく、御舟よりおほせたぶなり。あさぎたの出で來ぬさきに細手はやひけといふ。この詞の歌のやうなるは、楫取のおのづからの詞なり。楫取はうつたへに、われ歌のやうなる事いふにもあらず。聞く人の、あやしく歌ゆきてもいへるかなどて、書きいだせば、げに三十文字あまりなりけり。今日浪なたちそと、人々終日に祈るしるしありて、風浪たえず。今し鷗むれゐてあそぶ所あり。京の近づくよろこびの餘りに、或る童

のよめる歌。

いひてゆく間に、石津といふ所の松原あもしろくて、濱邊遠し。又住吉のわたりを
漕ぎ行く。ある人のよめる。

今見てぞ身をばしりぬる住の江の

松よりさきにわれは經にけり

こゝに昔の人の母、ひと日かた時も忘れねばよめる。

住の江に舟さしよせよわすれ草

となん。うつたへに忘れなんどにはあらで、戀しき心地まばしやすめて、又も戀ふる
力にせんとなるべし。かくいひてながめつゝ來る間に、ゆくりなく風吹きて、たげど
もく、走りへ退きにしぞきて、ほどくしくうちはめつべし。楳取のいはく、この住
吉の明神は、例の神ぞかし。ほしきものぞちはすらんとは、今めくものか。さて、幣をた

てまつり給へといふに隨ひて、幣たてまつる。かく奉れども、もはら風やまで、いや吹
きに、いや立ちに、風浪のあやふければ、楳取又いはく、幣には御心のゆかねば御舟も
ゆかねなり。尙うれしと思ひ給ふべきもの奉り給へといふ。又いふに隨ひて、いか
はせん。とて、眼もこそ二つあれ。たゞ一つある鏡をたてまつるとて、海にうちはめつ
れば口をし。されば、うちつけに、海は鏡のごとくになりぬれば、或る人のよめる歌。
ちはやふる神の心のある、海に

鏡をいれてかつ見つるかな。

いたく、住の江の忘草、きしの姫松などいふ神にはあらずかし。目もうつらく。鏡に
神の心をこそは見つれ。楳取の心は神の御心なりけり。

紫式部日記

○
まだ夜深きほどの月さしくもり、木の下をぐらきに、御かうしまりなばや、女官は
いまださふらはじ、藏人まわれなど、いひしろふほどに、後夜の鐘うちあどろかし、五

壇の御修法、時はじめつ。我もくくと打ちあげたる伴僧の聲々、遠く近く聞きわたされたる程、ちどろくしく尊し。観音院の僧正、ひんがしの對より、廿人の伴僧をひきゐて、御加持まり給ふ。足音、渡殿のはしの、とどろくと踏ならさるゝさへぞ、ことくのけはひには似ぬ。法住寺の座主は馬場殿、遍昭寺の僧都は文殿などに、うちつれたる淨衣すがたまで、ゆえくしき、唐橋どもをわたりつゝ、木の間をわけて歸り入るほども、遙に見やらるゝ心地して哀なり。さいさ阿闍梨も、大威徳を敬ひて腰を屈めたり。人々まゐりつれば、夜も明けぬ。渡殿の戸口の見いだせば、ほのうちきりたる朝の露も、まだ落ちぬに、殿ありかせ給ひて、御隨身召して、やり水拂はせ給ふ。橋の南なる女郎花の、いみじう盛りなるを、一枝をらせ給ひて、几丁のかみよりさしのぞかせ給へり。御さまのいとはづかしげなるに、我朝顔の思ひしらるれば、これ遅くてはわるからんとの給はするに、ことつけて、硯のもとによりぬ。

をみなへしさかりの色を見るからに

あな疾とほゝゑみて、硯めしいづ。

走ら露はわきてもおかじをみなへし

志めやかなる夕暮に、宰相の君と二人物語して居たるに、三位の君(頼通)簾のつま引きあけて居給ふ。年のほどよりはいとあとなく、心にくきさまして、人はなほ心ばへこそかたきものなめれなど、世の物語志めくとしておはするけはひ、稚しど人のあなづり聞ゆるこそ悪しけれど、はづかしげに見ゆ。うちとけぬほどにて、おほかる野べに、うち誦じて、たちたまひしさまこそ、物語にほめたる男の心地しはべりしか。かばかりのことの、うち思ひ出でらるゝもあり。その折はをかしきこと、過ぎぬれば忘るゝもあるは、いかなるぞ。

○

全

行幸近くなりぬとて、殿の内をいよく造りみがせ給ふ。世におもしろき菊のねを尋ねつゝ、掘りてまゐる。いろくうつろひたるも、きなるが見どころあるも、さましく植ゑたてたるを、朝霧の絶間に見渡したるは、實に老もしぞきぬべき心地す

るに、なぞや、まして思ふことの少しも斜なる身ならましかば、すきくしくももてなし、わかやぎて常なき世をもすぐしてましめ、たき事あもしろき事を見聞くにつけても、唯思ひかけたりし心のひくかたのみ強くて、物憂く思はずに歎しきことの増るぞいと苦しきいかで、今は猶物忘れしなん、思ひかひもなし、罪も深くなど、あけたては打ちながめて、水鳥どもの思ふことなげに遊びあへるを見る。

水鳥をみづのうへとやよそに見ん

我もうきたる世をすぐしつゝ

かれもさこそ心をやりて遊ぶと見ゆれど、身はいと苦しかなりと思ひよそへらる。

更科日記

四月つごもりがた、さるべき故ありて、東山なる所へ移ろふ道のほど、田の苗代水まかせたるも、植ゑたるも、何となく青みあかしく見え渡りたる山のかげくらう、まへ

近く見えて、心ぼそくぞあはれなる、夕くれ水鶏いみじく鳴く。

たゞくとも誰れか水鶏のくれぬるに

山路をふかくたづねてはこん

靈山近き所なれば、もうでてあがみ奉るに、いとくるしければ、山寺なる石井によりて、手に結びつゝのみて、此水のあかずあぼゆるなどいふ人のあるに、

奥山の石間の水を結びあげて

あかねものとは今のみやしる

といひたれば、水のむ人、

山の井の平に濁る水よりも

こはなほあかねこちこそすれ

歸りて、夕日けざやかにさしたるに、都の方も残りなくみやらるゝに、此項に濁る人は、京に歸るとて、心ぐるしげに思ひて、またつとめて、

山の端に入日の影はいりはてゝ

心ぼそくぞながめやらまし

念佛する僧の、曉にぬかづく者の尊く聞こゆれば、戸を押し開けたれば、ほのくくと
明けゆく山ぎは、こ暗き梢ども霧渡りて、花紅葉の盛りよりも、何となく茂り渡れば、
空の氣色くもらはしくあかしきに、郭公さへいと近き梢にあまたゝびないたり。

離れにみせ誰れにきかせん山里の

このあかつきもをちかへる音も

此つごもりの日、谷のかたなる木の上に、郭公かしがましくないたり。

都には待つらんものをほどとぎす

けふひねもすになきくらすかな

などのみながめつゝ、もろどもにある人、只今京にも聞きたらん人あらんや、かくて

ながむらんと思ひおこする人あらんやなどいひて、

山ふかくたれかおもひはおこすべき

月みる人はおほからめども

といへば

深き夜に月見のをりはしらねども

まづ山里ぞおもひやらるゝ

曉になりやしぬらんと思ふほどに、山の方より人あまたくる音す。驚きてみやりた
れば、鹿の椽のもとまで来てうちないたる、近うてはなつかしからぬものゝ聲なり。

秋の夜の妻こひかぬる鹿の音は

とほ山にこそきくべかりけれ

第五章 草紙

平安時代にあらはれて、雅文の雙璧とも稱せられ、源氏物語と肩を
ならぶるは枕草紙なり。其著者を清少納言といふ。清原元輔とて歌
を以て名ありし人の子なり。榮花物語には、三條天皇の女御、淑景舎
の官女なりとあれど、後の學者は、概ね清少納言を以て、一條天皇の
皇后定子に仕へて、大に寵遇をうけし人なりとせり。此人機敏にし

て才情溢るゝが如く、且つ活潑にして、頗る氣慨あり。當時、その盛名紫式部に下らず。雪の朝に、皇后左右を顧みて、香爐峰の雪は如何にと宣ひしに、清少納言直に起ちて御簾を捲きしといふが如きは、最も人口に膾炙する處なり。然れども、其晩年の事情は詳かならず。甚だ零落して、その終る處をだに知らずと傳へらる。

枕草紙は、草子文の最も古く、且つ最も妙なるものなり。草紙とは、草案草稿の義なりといひ、或は冊子の轉音なりともいふ。後世の隨筆といひ、又は漫筆といふもの即ち是なり。此種の文學に屬する著書、江戸時代に至りては、見るべきもの多くあらはれたりといへども、其以前には枕草紙の外には、唯、徒然草、方丈記等の二三あるのみ。枕草紙とは、後人の命ぜし名にして、古くは清少納言記と稱せしといふ。

こゝに、源氏物語と、枕草紙とを比ぶるに、彼れは物語にして、これは隨筆なれば、其舛裁の異なるは論なし。今は唯だ其文筆の上にあらはれたる差異を云はん。紫清の二女は共に當時無双の閨秀にして、博學多才なること、氣韻の高尙なることなどは、互に軒輊し難し。されども、其人物に至りては、一は溫厚貞淑にして婦人の龜鑑として仰がるゝ人なれば、其文章に見はれたる處も、自から溫厚着實の風を帯び。また一は意氣豪爽にして、且つ我が才學に誇るが故に、其文中にも、時々故事古語を引きて盛んに論議し、男子をして是はく、後に瞠若たらしめたるとあり。されば、源語よりは其性質の相似たる、紫式部日記を以て、枕草紙と比較するにも、一方は溫厚實着にして、飄然たる妙味に乏しく、一方は逸氣奔放堤を決して漲るの趣あり、この人物の相異なる處、即ち其文章の異なる原因なり。此

草紙は、殿上の儀式、四季の風景をばじめとし、其他種々の人物事件に就き、興あるものを寫しとり、之を批評したるものなり。かの華美なる平安時代の上達部殿上人の舉動より、此等の人々が諸姫嬪と戯むるゝ状態に至るまで、清少納言が鋭利なる筆に寫されたるは、千歳の下、讀者をして、眼前に之を見るが如き思あらしむ。源語の文は、縝密莊重なる點に於て長ずれども、枕草紙のは、輕快豪放なる點に於て長ぜり。されば、清少納言の文には、所謂寸鐵人を殺すの力ある處多く、一氣呵成の筆鋒の鋭きこと、雅文の中これに及ぶものなかるべし。突然思想の途次をかへ、幾十言を費すべき處に、僅に兩三語を以て之を充たす等の奇拔なる省筆法は、實に見るべきものなり。されども、もと隨筆の事なれば、大抵外より應じたる文にして、筆に縁りて趣をなすが多ければ、自然に莊重を失ひ、浮巧に流るゝ弊

あるは己むを得ざる勢なるべし。

大進生昌を論詰せし事

枕草紙

大進生昌が家に宮の出でさせ給ふに、東の門は四足になして、それより御輿は入らせ給ふ。北の門より女房の車ども、陣屋の居ねば入りなんやと思ひて、髪つきわろき人も、いたくつくるはず。よせてあるべきものと思ひあなづりたるに、根柳毛の車などは、門ちいさければ、さはりて得入らねば、例の筵道しきてあるに、いとにくく腹だたしけれど、いかにはせん。殿上人、地下なるも、陣に立ちそひ見るもねたし。御前に参りて、ありつるやう啓すれば、こゝにも人は見るまじくやは、なかは、さしもうち解つる。と笑はせ給ふ。されどそれは、皆めなれて侍れば、よくしたてゝ侍らん。しこそ、驚く人も侍らめ。さてもかばかりなる家に、車入らぬ門やはあらん。見えば笑はんなどいふ程にしも、これまゐらせんとて、御硯などさしいる。いで、わろくこそおはしけれ。などてかその門狭く造りて、住み給ひけるぞといへば、笑ひて家のほど身のほ

どに合せて侍るなりと答ふ。されど門の限を高く造りける人も聞ゆるはといへば、あなちそろしと驚きて、それは于定國がことにこそ侍るなれ。ふるき進士などに侍らずば、承り知るべくも侍らざりけり。たま／＼この道にまかり入りければ、かくだに辨へられ侍るといふ。その御道もかしこからさんゆり。筵道志きたれば、皆あち入りて騒ぎつるはといへば、雨の降り侍れば、實にさも侍らんよし／＼。また仰せかくべき事もぞ侍る。罷り立ち侍りなんとていぬ。何事ぞ、生昌がいみじうおぢつるは、と問はせ給ふ。あらず、車の入らざりつることいひ侍る、と申してありぬ。

○ すさまじきもの

全

晝ほゆる犬。春の網代。三四月の紅梅のきぬ。嬰兒のなくなりたる産屋。火おこさぬ火桶、すびつ。牛死にたる牛飼博士のうちつゝきに女子うませたる。方違にゆきたるに、響應せぬ所。まして節分はすさまじ。人の國よりおこせたる文の物なき。京のをもさこそは思ふらめども、されどそれは、ゆかしき事をも書き集め、世にある事を聞けばよし。人の許に、わざと清げに書きたて、やりつる文の返事見ん。今は來ぬらんかし。

ど、あやしく遅きを待つほどに。ありつる文の結びたるも、たて文も、いときたなげにもちなしふくだめて、うへにひきたりつる墨さへ、消えたるを遣せたりけり。おはしまさしりけりども、もしは物忌とて、取り入れずなどいひてもて歸りたる。いとわびしくすさまじ。

○ にくきもの

全

……又酒飲みて、赤き口を探り、髻あるものはそれを撫でて、盃人に取らす程のけしき、いみじくにくしと見ゆ。又飲めなどいふなるべし。身ぶるひをし頭ふり、口わきをさへひきたれて、わらはべのこうどのに参りてなど、謠ふやうにする。それはしも、誠によき人のさし給ひしより、心づきなしと思ふなり。物うらやみし、身の上なげき、人のうへいひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりて、いひ知らぬをば、怨むじそしり、又はづかに聞きわたる事をば、我もとより知りたる事のやうに、他人にも語りしらすいふも、いとにくし。

○ 管竹の名をこのきみといひし事 全

五月ばかりに、月もなくいとくらき夜、女房やさふらひ給ふと、こゑくしていへば、
 出でて見よ。例ならずいふは誰ぞと仰せらるれば、出でてこは誰ぞ。あどろくしう
 きはやかなるはといふに、物もいはで、御籠をもたげて、そよろとさし入るゝは管竹
 の枝なりけり。おい、このきみにこそといひたるを聞きて、いざや、これ殿上に行きて
 語らんとて、中將、新中將、六位どもなどありけるはいぬ。頭辨はとまり給ひて、怪しく
 いぬるものどもかな。御前の竹をとりて、歌よまんとしつるを、職にまゐりて、同じく
 は、女房など呼び出でてを、と言ひてきつるを、管竹の名をいと疾くいはれていぬる
 こそをかしけれ。誰が教をしりて、人のなべて知るべくあらぬ事をばいふぞ、などの
 たまへば、竹の名とも知らぬものをなまねたしとや思しつらんといへば、實にぞえ知
 らじなどの給ふ。まめごとなど言ひ合せて居給へるに、この君と稱すといふ詩を誦
 して、又集り來れば、殿上にていひ期しつる本意もなくては、などかへり給ひぬるぞ。
 いと怪しくこそありつれとの給へば、さる事には何の答をかせん。いとなか／＼な

大坂
 女房
 中將
 新中將
 六位
 御前
 頭辨
 女房
 中將
 新中將
 六位

らん。殿上にても言ひのゝしりつれば、うへも聞しめして、興せさせ給ひつるとかた
 る。辨もろどもに、かへす／＼同じ事を誦して、いとをかしがれば、人々出でて見る。ど
 り／＼に物ども言ひかはして歸るとて、猶同じ事を諸聲に誦して、左衛門の陣に入
 るまで聞ゆ。翌朝、いと疾く少納言の命婦といふが、御文まゐらせたるに、この事を啓
 したれば、恙もなるを召して、さる事やありしと問はせ給へば、知らず、何とも思はで
 いひ出で侍りしを、行成の朝臣のとりなしたるにや侍らんと申せば、どりなすどて
 もと打ちゑませ給へり。誰か事をも殿上人譽めけりと聞かせ給ふをば、さ言はるゝ
 人を、よろこばせ給ふもをかし。

うつくしきもの

全

瓜に書きたるちこの顔。雀の子のねずなきするにをどりくる。又べになどつけて居
 ゑたれば、親雀の蟲など持て來てくゝむるも、いとらうたし。三つばかりなる見の、急
 ぎて這ひくる道に、いとちひさき座などのありけるを、目敏に見つけて、いとをかし
 げなる小指にとらへて、おとななどに見せたる、いとうつくし。おまにそきたる見の

目に、髪のおほひたるを搔きは遣らで、うち傾きて物など見る、いとうつくし。たすきがけにゆひたる腰のかみの、白うをかしげなるも見るにうつくし、おほきにはあらぬ殿上わらはの、さうぞきたてられてありくもうつくし、をかしげなる見の、あからさまに抱きてうつくしむ程に、かいつきて寝入りたるもらうたし。離の調度、蓮のうき葉のいとちひさきを池よりとりあげて見る。葵のちいさきもいとうつくし。何もくちひさき物はいとうつくし、いみじう肥えたる見の二つばかりなるが、白ううつくしきが、二藍のうすものなど、衣ながくてたすきあげたるが、這ひ出でくるもいとうつくし……

第六章 雑史

前編に述べたるが如く、わが國史は、その始めみを漢文にて書かれしかば、國文學として見ると能はず。されば、平安時代の歴史文學は、獨り雜史あるのみ。雜史とは、榮花物語、大鏡の類をいふ。榮花物語は、

その物語の名あるのみならず、其跡例も物語文の如く、目的もまたたゞ娛樂にあるが如し。されど、猶、當時の事實を記録したるものなる事は、見る者誰か之を疑ん。

榮花物語四十卷は、其の記事宇多天皇の御代より堀河天皇の御代まで凡そ二百年の間に亘れども、其主とする處は御堂關白道長が、榮華のさまを寫したるものなり。此書は、事實を記録するとを主としたるが故に、文章の脩飾をば、さまで力めざりしが如しといへども、文牀周密にして、最も記事に適し、また文章としても、優美にして觀るべき處あるなり。

此書の作者は確ならず。赤染衛門ともいひ、或は藤原爲業ともいふ。安藤爲章、加茂眞淵等の説によれば、赤染衛門の書きし日記等を本として、後人の書きつらねたるものならんといふ。それ或は然らん、

赤染衛門は大江匡衡の妻にして、有名なる歌人なり。

大鏡は、文徳天皇より後一條天皇に至るまで、十四代の君臣の事蹟を記録したるものにして、また世繼物語ともいふ。そは此書の趣向たる、雲林院の菩提講にて、世繼の翁と、夏山繁樹といふ二人の對談に擬して、書きたるものなればなり。その文章は、榮花物語に比すれば、遙かに優りたる處あり。嚴正なる筆の間に、處々滑稽の文句を挿みたるが如きは、殊に妙なり。書中事實の性質に應じて、その筆を變化せしは、和文も歴史を書くに適當なる事を示せり。抑、勅選の歴史は修飾多くして、辯護する傾向なきにあらねど、この物語は更に忌諱なく述べたれば、史學上より觀察するも、充分の價值を有する書といふべし。その作者は藤原の爲業なるべし。爲業は崇徳天皇の朝に仕へ、皇太后宮の大進となり、後剃髮して寂然と號し、大原山に遁

れし人なり。

是より先き、後三條天皇の頃に、宇治大納言源隆國ありて、宇治大納言物語の著あり。此書は大鏡の前に成りしものなれども、其文跡既に平安時代の雅文より、後世の和漢混和文の跡に一轉すべき傾向をあらはせり。即ち和文にしてまゝ漢語を交へたるものなり。且つ和文とはいへども源氏物語、枕草紙の如く、修飾を盡くしたるものにはあらずして、殆んど當時の口語に近きものなれば、用語平易にして、文理暢達し、然かも雅趣に乏しからず。此書は、著者隆國、暑さを恐るゝ事甚しかりしかば、夏日、平等院一切經藏の南にあたる、南泉房といふ處にありて、往來の人に茶をすゝめ、なにくれと其聞見せし事を語らしめ、己は障子の内にありて、その物語を筆記せしものかりとぞ。されば、書中の事實も、或は荒誕無稽なるものと、信すべき

ものと殆んど相半せり。さはいへど、其真なるものは、取りて以て修史家の参考となすべく、其無稽なる事も、また、當時の人の迷信と妄想との程度を知るに足れり。且つまた中等社會以下の人情風俗を知らんと欲するものは、必ず此書を讀まざるべからず。世に今昔物語といふは、即ち此書の事なり。そのち此書の漏れたるを拾ひ、足らざるを補ひて宇治拾遺物語といふ。この宇治拾遺物語は、今昔物語と其体裁を同くして、當時の人情風俗を寫せしものなれば、其文章の趣味あるのみならず、實に國史の参考書として充分なる價値を有するものなり。

○

榮花物語

はかなく年もかへりて、長和三年になりぬ。正月一日よりはじめて、あたらしくめぐ

らしき御有様なり。新たまの年かへりぬれば、雲の上もはれど、しう見えて、そらをあふがれ、夜のほどにたちかはりたる春の霞も、紫にうすく濃くたなびき、日のけしきうらゝかに、光りさややく見え、百千鳥も囀りまさり、よろづ皆こゝろあるさまに見え、枝になかりつる花も、いつしかとひもをとき、垣ねの草も青みわたり、あしたの原も萩のやけ原かきはらひ、かすが野のとぶ火の野もりも、萬代の春のはじめのわか菜をつみ、氷とく風もゆるく吹きて、枝をならさず、谷の鶯も、行末はるかなる聲に聞えて耳とまり、舟岡の子の日の松も、いつしかと君にひかれて、萬代を經んと思ひて、常盤かきはの緑の色ふかく見え、またいのほとりのちくえうも、すゑのよはるかに見え、階のものとさうびもなつを待ちかほになどして、さまゝめ、でたきに、朝拜よりはじめて、よろづにをかしきに、宮(子)の御方の女房のなりども、常だにあるにまいて物あざやかに、薫りふかきもことわりと見えたり。殿上に志んどりといひて、こちたく酔ひのゝしりて、うたてくらうがはしき事どもさしまじるべし。さるべき公けの御政をもおぼしまぎれず、う(三)中宮(子)の御方に渡らせ給へり。えもいはずめでたき御直衣になべてならずかゝやくばかりなるおほんぞどもを重ねさせ給へ

手白根定
玉川
長
日
百
任
長
長

り。御かたち有さまをかしう、らうくしう、はづかしげにおはします。宮の御まへは、
 蒨黄の御几帳に、はたかくれておはします。紅梅の御ぞぞ、やへにもすぎで、いくつ
 ともなく奉りたるうへに、うきもんの色こまやかなるを奉りたるに、同じ色の御扇
 のかたそばのかたに、大きな山かきたるを、わざとならず、さしかくさせ給へる御
 有様なべてならず、はづかしげにけだかうおはします。御ぐしのあさましう長く、所
 せげにおはします程、いかでかくと見奉らせ給ふ。織物にかみ、だるといふ事は、か
 みのかるびれすくなき時の事なりけり。やがてうるはしくすかりて、ひまもなくめ
 でたくおはします。うへいづらはわか宮（子）はどのたまはすれば、命婦のめのだい
 き奉りて参る。御はかし辨のめのもて参る。御ぐしをそかせ給へれば、おしかへし、
 今こそちひなりけれとて、それにつけても、あな美しと見奉らせ給ひて、抱き取奉ら
 せ給ひて、もちひかみ見せ奉らせ給ふとて、聞にくきまで祈り祝ひつゞけさせ給
 ふ事どもを、御前に候ふ人々には念せず、おのづからうちさゝめき、卵杖、ほがひなど
 いふ心ちこそすれとて、忍びやかに笑ふを、いかにくくと仰せらるゝほど、すゝる
 にめでたくおぼえさせ給ふ。御めのとたち、われもくくと花を折りてつかうまつる

ほどもあらまほしげなり。宮と御物語せさせ給ひて、うち笑はせ給ふなども聞ゆ。若
 き人々おしこりたる御几帳のきはなど繪にかまほし。大納言殿（通）参らせ給へれ
 ば、しばし御物語などありて、やがて御どもにつかうまつらせ給ひぬ。四宮（明）の御ぐ
 しながうて、御直衣すがた、をんなをつくり立てたらんやうに見えさせ給ふ。事ども
 やうくはてて、心のどかになりもていきで、うへより松に雪のこほりたるを、
 春くれと過きにしかたのこほりこそ

まつに久しくとこほりけれ

とあれば宮の御かへし。

千代ふべき松のこほりは春くれと

うちどけがたき物にぞ有ける

太政大臣基經

大鏡

この大臣（基）は、長良中納言の三郎におはす。このおとこの御むすめ、醍醐の御時の后、朱

さぶらはせて、渡らせ給ふをりもおはしましけり。

○ ○

全

(時平はかくあさましき悪事を申し行ひ給へりし罪により、この大臣の御末はおはせぬなり。さるはやまどだましひなどは、いみじくおはしましたるものを、延喜の世間の作法したゝめさせ給ひしかど、過差をばえまづめさせ給はざりしに、この殿制を破りたる御装束の、ことの外にめでたきをして、うちに参り給ひて、殿上にさぶらひ給ふを、みかど小部より御覽じて、御氣色いとあしくならせ給ひて、職事を召して、世間の過差の制厳しきところに、左の大臣の一人といひながら、美麗ことの外に、てまゐれる便なきことなり、速にまかり出づべきよしおほせよとおほせられければ、うけたまはる職事は、いかなる事にかとおそれおぼえけれど、参りて、わななくわなしく、まかしの事と申しければ、いみじくおどろきて、かしこまりうけたまはりて、御隨身のみさきまゐるも、制し給ひて、急ぎまかり出で給へば、御前ども、あやし

と思ひてなむ。さて本院の御門一月は、さゝせて、御簾の外にも出で給はず。人などの参るにも、勘當の重ければとて、逢はせ給はざりけり。ざりしにこそ世の中の過差はたひらぎたりしか。うちうけたまはりしかば、さてばかりぞしづまらむとて、みかどと御心合せさせ給へりけるとぞ。

○ 今昔物語

今はむかし、世に袴垂といふいみじき盗人の大將軍有けり。心太く力強く、足早手開き、思量賢く、世に並び無き者になむ有ける。萬人の物をば、隙を伺て奪ひ取るを以て、役とせり。其れが、十月許に、衣の要有ければ、衣少し儲んと思ひて、然るべき所々を伺ひ行きけるに、夜半許に、人皆寝静まり畢りて、月のおぼるなりけるに、大路にすゝろに衣の敷着たりける主の、指貫なめりと見ゆる袴のそは、挟みて衣の狩衣めきて、なよやかなるを着て、只、獨り笛を吹きて、行きもやらす、練り行く人有けり。袴垂是を見て、哀れ此こそ、我れに衣得させに、出来る人なめりと思ければ、喜びて走り懸りて、

打臥せて衣を剥むと思ふに、怪しくこの人の物恐しく思えければ、副ひて二三町許を行くに、この人、我に人こそ付にたれと思ひたる氣色も無くて、彌よ靜に、笛を吹き行けば、袴垂試むと思ひて、足音を高くして、走り寄りたるに、少しも騒きたる氣色も無くて、笛を吹き乍ら、見返りたる氣色、取懸るべくも思えざりければ、走りのきぬ、か様にあまた、びとざまかうさまに爲るに、塵許騒きたる氣色も無ければ、此は希有の人かなと思ひて、十餘町許具して行きぬ。ざりとて、有らむやはと思ひて、袴垂刀を抜きて、走り懸りたる時に、其の度笛を吹き止めて、立返りて、此は何者ぞと問ふに、譬ひいかならむ鬼なりとも、神なりとも、此様に、只獨り有らむ人に、走り懸たらむ、然まで怖しかるべき事にもあらぬに、こはいかなるにか、心も肝も失せて、只死ぬ許怖しく思えければ、我にもあらでつい居られぬ、何なる者ぞと重ねて問へば、今は逃ぐともよも逃かすまじかゆりと思ひて、引剝に候ふ、名をば袴垂となむ申し候ふと答ふれば、此の人、しかいふ者、世に有りとは聞くぞ、あやふげに希有の奴かな、共にまうで來と許云ひ懸けて、亦同じ様に、笛を吹きて行く、此の人の氣色を見るに、只人にもあらぬ者なりけりと恐ち怖れて、鬼神に取らると云ならむ様にて、なにも思はず

て、共に行きける程に、此の人、大きな家の有る門をぬき、沓を履き乍ら、延の上へ上ぬれば、此は家主なりと思ふに、内に入て即ち返り出で、袴垂を召して、綿厚き衣一つを給ひて、今よりも此様の要有らむ時は、參りて申せ、心も知らざらむ人に、取り懸りては、汝ちあやまらるなど云ひて、内に入にけり、其後、此の家を思へば、攝津の前司保昌と云人の家なりけり、この人も然なりけりと思ふに、死ぬる心地して、生きたるにもあらでなむ出にける、其後、袴垂捕へられて、語りけるに、奇しく、むくつけく怖しかりし人の、有様かなと云けるなり、此の保昌朝臣は、家を繼たる兵にも非ず、口と云人の子也、而るにつゆ家の兵にも劣らずして、心太く、手聞き強力にして、思量の有る事も、微妙じければ、公もこの人を、兵の道に遣はるゝに、聊か心もと無き事無し、然れば世に、此の人を恐ち迷ふ事限りなし、但し子孫の無きを家に非ざる故にやと人云けるとなむ、語り傳へたるとや。

五色の鹿の事

宇治拾遺物語

これもむかし、天づくに身の色は五色あて、角のいろはまろき鹿一つありけり、深山

にのみすみて、人にしられず。その山のほとりに大なる川あり。その山にまた鴉あり。此かせきを友として過す。ある時、この川に男一人なかれて、すてに志なんとす。われを人たすけよとさけふに、このかせき、このさけふ聲をきゝて、かなしみにたへすして、河をおよきよりて、この男をたすけてけり。男命のいきぬることをよろこひて、手をすりて鹿にむかひて、いはく、何事をもちてかこの恩をむくひ奉るへきといふ。かせきのいはく、なに事をもちてか恩をはむくはんと、この山に我ありといふことをゆめ、人にかたるへからず。我身の色五色なり。人しりなは、かはをどらんとて、かならずころされん。この事をおそるゝによりて、かゝる深山にかくれて、あへて人にしられず。志かるに汝かさけふ聲をかなしみて、身の行へをわすれてたすけつるなりといふ。どきに男これ誠理りなり。さらにもらすことあるましと、返々契りてさりぬ。もとのさどに歸りて、月日をおくれとも、更に人にかたらず。かゝるほどに、國の後夢に見給うやう、大なるかせきあり。身の色は五しきにて角老ろし。夢さめて大王に申給はく、かゝるゆめをなんみつる。このかせき、さためて世にあるらん。大王かならずたづねとりて、われにあたへ給へと申給ふに、大王せんじを下して、もし五色の

かせきたづねて奉らんものには、金銀珠玉等のたからならびに一國等をたぶべし。とおほせ下されけるに、このたすけられたる男、内裏にまゐりて申やう、たづねらるゝいろのかせきは、その國の深山にさふらふ。あり所をしれり。狩人を給はりて、とりてまいらすべしと申に、大によろこび給ひてみづからおほくの狩人を具して、このをどこを志るへにゆめしゝして行幸なりぬ。その深山にいら給ふ。このかせきあへて志らず。ほらのうちにおせり。かの友とするからすこれをみて、大におどろきてこそをあげてなき。耳をくひてひくに、志かおどろきぬ。からすつげていはく、國の大王おほくの狩人をくして、この山をとりまきて、すでにころさんとし給ふ。いまはにぐへきかたなし。いかいすべきといひてなく、さりぬ。かせきおどろきて、大王の御こしのもとへあゆみよるに、狩人とも矢をはげて射んとす。大王の給やう、かせきおそるゝ事なくしてきたれり。定めてやうあるらん。射るとなかれ。そのとき、狩人とも矢をはづして見るに、御こしのまへにひざまづきて申さく、我毛の色をおそるゝによりて、この山におかくかくれすめり。志かるに、大王いかにして、わが住所をば志り給へるそやと申に、大王の給、この奥のそばにある。顔にあざのあるをどこつげ申たる

によりて來れるなり。かせき見るに、かほにあざありて、御輿の傍にもたり。わか助け
 遣たりし男なり。かせきかれに向ひていふやう、命をたすけたりしとき、この恩な
 しても報じつくしがたきよしひしかば、こゝに我あるよし、人にかたるべからざ
 るよし、返々ちぎりしどころなり。まかるに、今その恩をわすれて、ころさせ奉らんと
 す。いかに、なんじ水におぼれて死なんとせしとき、わかいのちをかへりみず、およき
 よりてたすけしとき、なんじかきりなくよろこひしとはおぼえずやと、ふかくうら
 みたる氣色にて、涙をたれてなく。そのときに、大王おなじくなみだをなかしてのた
 まはく、なんじは畜生なれども、まひをもて人をたすく。かの男は欲にふけりて恩を
 わすれたり。畜生といふべし、恩をしるをもて人倫とすとて、このをどこをとらへて、
 鹿のみる前にてくびをきらせらる。又の給はく、今よりのち、國の中にかせきを狩こ
 となかれ。もし此せんじをそむきて、鹿の頭にてもころすものあらば、すみやかに
 死罪にあこなはるべしとてかへり給ひぬ。そのちより、天下安せん。國土ゆたか
 なりけりとぞ。

第七章 和歌及び歌序

桓武天皇の御代より、清和天皇の頃に至るまでは、漢文學極盛の域
 に達して、詩賦のみ切りに行はれて、和歌は殆んど一時中絶の姿な
 りき。其後、天下泰平にして、文事益開くるに従ひ、清和天皇の頃より
 は、歌人漸く輩出して、和歌の再び榮ゆべき時運に向ひぬ。然れども、
 特に盛になりしは、宇多天皇の時よりなり。この頃よりは、歌合とい
 ふと始まりて、歌の作意と、風姿との優劣を批評し、其輸贏を決する
 と熾になりしかば、其風調も、奈良時代のとば、いたく異なるに至れ
 り。

かくて、宇多、醍醐の間には、紀貫之、凡河内躬恒等の如き、俊秀なる歌
 人多かりしが、古今集の如き勅撰の和歌集さへ撰はれ、次で村上天

皇の頃には、和歌所といふを置かれ、歌人をして萬葉集の訓點を付けしめ、また後撰集を撰はせなど、只管和歌の道を獎勵し給ひしかば、和歌冲天の勢を以て、平安城裏に行はれたりき。かくて、政綱は次第に弛み、政治は次第に衰へしかど、勅撰の歌集はつぎつぎにあらはれて、賴朝が覇府を開く頃までには、拾遺集、後拾遺集、金葉、詞華、千載等の歌集撰定せられたり。下りて南北朝の時に至るまで、凡そ二十一代の集いでたり。されば、和歌の勅撰盛にして、皇家の衰運を見るときいふ説を立つる學者さへあるなり。

古今和歌集は、勅撰集の濫觴にして、醍醐天皇の延喜五年に、紀貫之が、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑等と共に勅を奉じて撰びしものなり。其部分は、春夏秋冬、戀賀、羈旅、雜躰と定めたり。後の歌集は、概ねみな、此集を摸範とし、唯、或は哀傷の一部を加へ、或は神祇、釋教などの

たしあつても
むしあつても
むしあつても
むしあつても
むしあつても

分類を増すに過ぎず。

此集に出でたる歌人にして、最も有名なるものを擧ぐれば、撰者の外には、かの六歌仙と稱せらるゝ、在原業平、文屋康秀、僧正遍照、喜撰法師、大友黒主、小野小町等をばじめとし、藤原敏行、素性法師、在原行平、伊勢等なりとす。

さて、これより少しく歌躰の事をいはん。抑も古今集時代と萬葉集時代とは、相距る事僅に百年なれども、歌の意、并に之に用ふる語の異なるのみならず、姿も調も亦彼此甚だ同じからず。特に著しき差異は長歌に於てみるべし。萬葉集にありては長歌其骨髓たりしに、古今集に至りては晨星落々僅に兩三首を見るのみ。而して其兩三首といへども、萬葉集のとは極めて其姿調を異にし、大に後世の今様風といふものに似たり。蓋し長歌廢れて今様歌の起るに至りし

第一着歩なるべし。短歌の方にありては、萬葉集時代より、物に寄せ
て思ひを述ぶる事大に行はれたりしが、古今集の時代には、題を設
けて、わざと詠むと一層盛に行はれしまゝに、思を廻らして詠みけ
れは、其姿自から婉麗なり。されど萬葉の雄偉にして、意至誠なるに
及はず。是を以て、古人がこの歌躰の變遷を評して、大和は男子の國
にて、山城は女子の國なり。遷都の後、丈夫のをよまき手ふりはう
せて、手弱女のめしき姿とぞなれりけるといひたるは、適評とい
ふべし。

かくの如く、歌躰の變ぜしのみならず、其歌に用ふる詞も成るべく
高雅にして、華麗なるを擇びたれば、いつしか、歌の詞と、平生の俗語
とは、稍、差別を生ずるに至れり。古今集の歌は、前に述べたるが如く、
詞も姿も、萬葉集のとは著るしき差別を生ぜしといへども、これを以

て、猥りに萬葉集のに劣れりとはいふべからず。ただ長歌は、萬葉集
獨得の長處にして、古今集の及ぶべき處ならねど、其短歌に至りて
は、華實の中を得、文質の宜しきを得たれば、或は萬葉集のに駕する
といふも、不可なからん。さればにや、此集のみは、後世に至るまで、獨
り珍重せられて、歌をよむものゝ模範となれり。

歌序は、詩の小序、小引などといふものと同じ。萬葉集などの歌には、
漢文の序あるもの尠からず。假名文盛に行はるゝに及び、從來漢文
にて書きたる歌序も、凡て假名文に改められしは、自然の理りなら
ん。さて歌序には、歌集の序と、歌の小序と二種の別あり。集序の最も
有名なるものは、古今集の序にして、小序の最も有名なるものは、大
井川行幸和歌序なり。何れも、紀貫之の作なり。今此等の序文をみる
に、表は和文なれども、裏には當時専ら行はれたりし、漢文の四六駢

麗の句調を具ふ。されは婉麗に過ぎて、輕薄に陥れる痕跡、歴々として
 みるべし。是より漸く下りて、藤原俊成等の文章に至りては、一篇
 たゞ一の「センチテンス」を以て成るものあり。歌序は散文なる事言を
 待たず。然れども、其歌に伴ふものあるを以て、便宜にまかせてこゝ
 に擧ぐ。特に古今集の序の如きは、實に文章の見るべきのみならず、
 或は歌の起源を論じ、或は歌仙の品評を下し、或は此集の成立を説
 けるなど、文學上、歴史上觀るべき點多くして、千古の妙文と稱せら
 る。

此集には、また漢文の序ありて、其和文の序と、孰れか先後にして、何
 れか眞偽なりやの論、一定せず。然れども、序文はもと漢文を以て綴
 りしものなれば、この集の序の如きも、先づ、紀淑望ヨシノケ漢文の序を作り
 て、紀貫之これを和文に改めしものなるべし。

古今和歌集序

紀貫之

やまと歌は人の心を種として、萬の言の葉とぞなれりける。世の中にある人ことわ
 ざ茂きものなれば、心に思ふとを見るもの聞くものにつけて云ひ出せるなり。花に鳴
 く鶯、水に住む蛙のこゑを聞けば、いきとし生けるもの何れか歌を詠まざりける。力
 をも入れずして天地をうこかし、目に見えぬ鬼神をも哀れとおもはせ、男女の中を
 も和はらけ、猛きものゝ夫の心をも慰さむるは歌なり、この歌、天地の開け始まりけ
 る時より出来にけり。然あれども世につたはるとは、久かたの天にしては、またてる
 姫に始まり、あら金の地にしては、すさの尊よりぞ起りける。千はや振る神代に
 は、歌の文字も定まらず。すなほにして事の心わき難かりけらし。人の代となりて、す
 さの尊の尊よりぞ、三十文字あまり一と文字は詠みける。斯て花を愛で、鳥を羨み霞
 をあはれび露を悲しぶ、心ことは多く様々になりける。遠き所もいでたつあしも
 どよりはじまりて年月を涉り、高き山も麓のちりひちよりなりて、雨雲たなびく迄
 ちひ昇れる如くに、この歌も斯くの如く成るべし。浪花津の歌は帝のおほん始めな

り。あさか山の言の葉は采女の戯ふれより詠みて。このふた歌は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人の始めにもしける。抑も歌のさまむつあり。からの歌にも斯ぞ有べき。(中畧)今の世の中いろに付き、人の心花に成にけるより、あだなる歌はかなきとのみ出でくれば、色このみのいへに、うもれ木の人知れぬ事となりて、まめなる所には、花すゝきほに出すべき事にもあらずなり。其の始めを思へば、斯るへくなんあらぬ。古しへの代々の帝春の花のあした、秋の月の夜ことに、さふらふ人々を召て、とにつけつゝ、歌を奉らしめ給ふ。あるは花をこふとて、便りなき所にまどひあるは月を思ふとて、志るべき暗みにたどれる心々を見給ひて、さかし愚かなりと志ろしめしけん。志かあるのみにあらず。さしれ石に喩へ、つくば山にかけて君を願ひ、懐ひ身に過き、樂しび心に餘り、富士の煙によそへて人をこひ、松むしの音に友を忍び、高砂住の江の松も、あひおひの様に覺え、芳山のむかしを思ひ出でて、をみなへしの一ときをくぬるにも、歌をいひてぞなぐさめける。また春の朝に花の散るを見、秋の夕暮に木の葉の落つるをき、あるは年毎に鏡の影に見ゆるゆきとなみとをなけき、草の露、水のあわを見て、我身を驚き、あるはきのふは榮へ驕りて、時を失ひ、世にわび、

あさか山
言の葉
采女
の戯
ふれ
より
詠
みて
この
ふた
歌は
歌の
父母
のやう
にて
ぞ
手
習
ふ
人
の
始
め
に
も
し
け
る
抑
も
歌
の
さ
ま
む
つ
あ
り
か
ら
の
歌
に
も
斯
ぞ
有
べ
き
(中
畧)
今
の
世
の
中
い
ろ
に
付
き
人
の
心
花
に
成
に
け
る
よ
り
あ
だ
な
る
歌
は
か
な
き
と
の
み
出
で
く
れ
ば
色
こ
の
み
の
い
へ
に
う
も
れ
木
の
人
知
れ
ぬ
事
と
な
り
て
ま
め
な
る
所
に
は
花
す
ゝ
き
ほ
に
出
す
べ
き
事
に
も
あ
ら
ず
な
り
其
の
始
め
を
思
へ
ば
斯
る
へ
く
な
ん
あ
ら
ぬ
古
し
へ
の
代
々
の
帝
春
の
花
の
あ
し
た
秋
の
月
の
夜
こ
と
に
さ
ふ
ら
ふ
人
々
を
召
て
と
に
つ
け
つ
つ
歌
を
奉
ら
し
め
給
ふ
あ
る
は
花
を
こ
ふ
と
て
便
り
な
き
所
に
ま
ど
ひ
あ
る
は
月
を
思
ふ
と
て
志
る
べ
き
暗
み
に
た
ど
れ
る
心
々
を
見
給
ひ
て
さ
か
し
愚
か
な
り
と
志
ろ
し
め
し
けん
志
か
あ
る
の
み
に
あ
ら
ず
さ
し
れ
石
に
喩
へ
つ
く
ば
山
に
か
け
て
君
を
願
ひ
懐
ひ
身
に
過
き
樂
し
び
心
に
餘
り
富
士
の
煙
に
よ
そ
へ
て
人
を
こ
ひ
松
む
し
の
音
に
友
を
忍
び
高
砂
住
の
江
の
松
も
あ
ひ
お
ひ
の
様
に
覺
え
芳
山
の
む
か
し
を
思
ひ
出
で
て
を
み
な
へ
し
の
一
と
き
を
く
ぬ
る
に
も
歌
を
い
ひ
て
ぞ
な
ぐ
さ
め
け
る
ま
た
春
の
朝
に
花
の
散
る
を
見
秋
の
夕
暮
に
木
の
葉
の
落
つ
る
を
き
あ
る
は
年
毎
に
鏡
の
影
に
見
ゆ
る
ゆ
き
と
な
み
と
を
な
け
き
草
の
露
水
の
あ
わ
を
見
て
我
身
を
驚
き
あ
る
は
き
の
ふ
は
榮
へ
驕
り
て
時
を
失
ひ
世
に
わ
び

親しかりしも疎くなり、或は松山の浪をかけ野中の水をくみ、秋萩のした葉をなかめ、曉のまきのはねかきをかぞへ、あるは呉たけのうきふしを人に云ひ、芳野川をひきて世の中をうらみきつるに、今は富士の山も煙立たずなり、ながらの橋もつくるなりと聞く人は、歌にのみぞ心を慰めける。古へよりかく傳はるうちにも、奈其の御時よりぞ弘まりにける。彼のおほん世や歌の心をまろしめしたりけん。かのおほん時におほきみつの位、柿本人麿なん歌の聖りなりける。是は君も臣も身を合はせたりといふ成べし。秋の夕べ立田川に流るゝ紅葉をば、帝のおほん目には錦と見給ひ、春のあした芳野の山の櫻は、人麿が心には雲かどのみなん覺へける。又、山部の赤人と云ふ人あり、歌にあやしくたへなりけり。人麿は赤人の上に立む事難く、赤人は人まろが下に立ん事難くなんありける。此の人々を置きて又勝れたる人も、くれ竹の代々に聞え、かた糸のよりくゝに絶えずぞありける。是より先の歌を集めてぞ萬葉集と名づけられたりける。此處に古のとも歌の心をも知れる人、僅に一人ふたりなりき。然あれど、是彼得たる得ぬ所たかひになんある。彼の御時よりこのかた、年は百年餘り、世はとつぎになん成りにける。昔への事をも歌をも、知れる人詠む人多

あさか山
言の葉
采女
の戯
ふれ
より
詠
みて
この
ふた
歌は
歌の
父母
のやう
にて
ぞ
手
習
ふ
人
の
始
め
に
も
し
け
る
抑
も
歌
の
さ
ま
む
つ
あ
り
か
ら
の
歌
に
も
斯
ぞ
有
べ
き
(中
畧)
今
の
世
の
中
い
ろ
に
付
き
人
の
心
花
に
成
に
け
る
よ
り
あ
だ
な
る
歌
は
か
な
き
と
の
み
出
で
く
れ
ば
色
こ
の
み
の
い
へ
に
う
も
れ
木
の
人
知
れ
ぬ
事
と
な
り
て
ま
め
な
る
所
に
は
花
す
ゝ
き
ほ
に
出
す
べ
き
事
に
も
あ
ら
ず
な
り
其
の
始
め
を
思
へ
ば
斯
る
へ
く
な
ん
あ
ら
ぬ
古
し
へ
の
代
々
の
帝
春
の
花
の
あ
し
た
秋
の
月
の
夜
こ
と
に
さ
ふ
ら
ふ
人
々
を
召
て
と
に
つ
け
つ
つ
歌
を
奉
ら
し
め
給
ふ
あ
る
は
花
を
こ
ふ
と
て
便
り
な
き
所
に
ま
ど
ひ
あ
る
は
月
を
思
ふ
と
て
志
る
べ
き
暗
み
に
た
ど
れ
る
心
々
を
見
給
ひ
て
さ
か
し
愚
か
な
り
と
志
ろ
し
め
し
けん
志
か
あ
る
の
み
に
あ
ら
ず
さ
し
れ
石
に
喩
へ
つ
く
ば
山
に
か
け
て
君
を
願
ひ
懐
ひ
身
に
過
き
樂
し
び
心
に
餘
り
富
士
の
煙
に
よ
そ
へ
て
人
を
こ
ひ
松
む
し
の
音
に
友
を
忍
び
高
砂
住
の
江
の
松
も
あ
ひ
お
ひ
の
様
に
覺
え
芳
山
の
む
か
し
を
思
ひ
出
で
て
を
み
な
へ
し
の
一
と
き
を
く
ぬ
る
に
も
歌
を
い
ひ
て
ぞ
な
ぐ
さ
め
け
る
ま
た
春
の
朝
に
花
の
散
る
を
見
秋
の
夕
暮
に
木
の
葉
の
落
つ
る
を
き
あ
る
は
年
毎
に
鏡
の
影
に
見
ゆ
る
ゆ
き
と
な
み
と
を
な
け
き
草
の
露
水
の
あ
わ
を
見
て
我
身
を
驚
き
あ
る
は
き
の
ふ
は
榮
へ
驕
り
て
時
を
失
ひ
世
に
わ
び

からず、今この事を云ふに、司さ位高き人をば易きやうなれいはず。其の外に近き世にその名聞えたる人は、則ち僧正遍照は歌の様はえたれども實すくなし。譬へば繪に描ける女を見て、徒らに心を動かすが如し。在原業平は其の心餘りて言葉足らず、志ぼめる花の色なくて匂ひのこれるが如し。文室康秀は言葉巧みにて其のさま身におはず。いはあき人のよききぬ着たらんか如し。宇治山の僧喜撰は詞かすかにして始め終り慥かならず。いは秋の月を見るに曉の雲にあへるか如し。詠める歌多く聞こえぬば、かれこれを通はしてよく知らず。小野小町は昔への衣通姫の流なり。あはれなる様にて強からず。いはよき女の疾めるところあるに似たり。強からぬは女の歌なればなるべし。大友黒主は其のさま卑し。いは薪あへる山人の花の陰に休めるか如し。此の外の人々其の名聞ゆる、野邊におふる蘊のはひひろこり、林に茂き木の葉のことくに多かれど、歌とのみ思ひてそのさま知らぬなるべし。斯るに今すへらきの天の下しろしめす事よつの時九かへりになんなりぬる。普きおほんうつくしみの涙、やしまの外まで流れ、廣きおほん恵みのかけ、つくば山の麓より繁くおはしまして、萬のまつりとをきこしめすいとま。諸の事を捨て給はぬ

あまりに昔への事をも忘れじ、いにし事をも起し給ふとて、今も見そなはし。後の世にも傳はれとて、延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書所のあづかり紀貫之、前のかひのさうくわんおほし河内の躬恒、右衛門府生みぶの忠岑等に仰せられて、萬葉集に入らぬ古き歌、自からのをもたてまつらしめ給ひてなん、そが中に梅をかざすより始めて、ほととぎすを聞き、紅葉を折り、雪を見るに至る迄、又鶴龜につけて君を思ひ、人をもいはひ、秋萩夏草を見て妻をこひ、逢坂山にいたりて手向を祈り、あるは春夏秋冬にもいらぬくさの歌をなん撰ばせ給ひける。凡て千うたはたまき名付て古今集と云ふ。斯く此の度集り撰ばれて、山した水の絶えず、濱の眞砂の數多くつもりぬれば、今はあすか川の瀬になる怨みもきこえず、され石の巖となる情びのみぞ在るべき。それまくらことは、春の花の匂ひ少なくて、空しき名のみ秋の夜の永きをかこてれば、かつは人のみにおそり。且は歌の心に耻思へど、細引く雲の起居鳴く鹿の起き臥しは、貫之等が此の世に同じく生れて、此の事の時にあへるをなん喜こびぬる。人塵なくなりたれど、歌のこと止まれるかな。假ひ時移り事去り、樂しび悲しび往きこふ共、この歌のもじあるをや。青柳の糸絶えず、松の葉の散り

失せずして、極のかつらなかくつたはり鳥の跡久しくとゞまらば、歌のさまをも知り言のこゝろを得たらん人は、おほ空の月を見るか如くに、昔へを仰きて、今を戀ひざらめかも。

古今集

歌奉れと仰せられし時によみて奉れる 紀 貫 之
さくら花さきにけらしもあしびきの

山のかひよりみゆるまらくも
はつせに詣づること宿りける人の家に、久しくやどらで、ほどへて後にいたれりければ、かの家のあるじ、かくさたかになん、やどりはあるといひ出してければ、そこにたてりける梅花を折りて、

人はいざこゝろもまらずふるさとは 全 人
花ぞむかしの香ににほひける

人のはなつみしける所にまかりて、そこなりける人のもとに、後によみてつかはしける 全 人

山ざくらかすみの間よりほのかにも
みてし人こそ戀しかりけれ
石山にまうでける時音羽山の紅葉を見て 全 人
秋風の吹きにし日より音羽山

峯のこずえも色つきにけり
櫻の花のちるを 紀 友 則
久かたのひかりのどけき春の日に
志づこゝろなく花のちるらん

雪のふりけるを見て 全 人
雪ふねば木ごとにはなぞさきにける
いづれを梅とわきて折らまし
春の夜梅花を 凡 河内 躬 恒

はるの夜のやみはあやなし梅の花

色こそ見えぬ香やはかくるゝ

白菊のはなを

こゝろあてに折らばや折らん初霜の

あきまどはせるまらきくの花

題まらず

吉野川よしや人こそつらからめ

はやくいひてしことはわすれじ

花盛りに京を見やりて

見わたせば柳さくらをこきませて

みやこそはるのにしきなりける

奈良のいそのかみ寺にて時鳥の鳴けるを

いそのかみふるき都のほととぎす

聲ばかりこそむかしなりけれ

全 人

全 人

索性法師

全 人

なぎさの院にて櫻を見て

世の中にたえて櫻のなかりせば

はるのこゝろはのどけからまし

人の前裁に菊に結びつけて植えけるうた

うゑしうゑは秋なき時や咲かざらん

花こそちらめ根さへ枯れめや

題まらず

都いでしけふみかの原いつみ川

かは風さむしころもかせやま

題まらず

女郎花おはかる野邊にやどりせば

あやなくあだの名をやたちなん

題まらず

白雲にはねうちかはしどぶ雁の

在原業平

全 人

よみ人まらず

小野美材

よみ人まらず

數さへ見ゆるあきの夜の月

題志らず

壬生忠岑

久方の月のかつらも秋はなほ

もみぢすればやてりまざるらん

題志らず

よみ人志らず

君やこんわれや行かんのいさよひに

まきの板戸もさしずぬにけり

題志らず

伊勢

水のほとりに梅の花のさけりけるを

としをへて花のかいみとなる水は

題志らず

全人

三月にうるふ月の有りける年

さくら花春くははれる年だにも

題志らず

小野小町

人のこゝろにあかれやはせぬ

古今集の成りてより、後、和歌を以て一代の宗匠たるもの、志はく
勅撰の命を被りたりき。村上天皇の天曆五年、大中臣能宣、清原元輔、

花のいろはうつりにけりないたづらに

わが身よにふるながめせしまに

題志らず

全人

哀れてふことこそうたてよの中を

おもひはなれぬほたしなりけれ

題志らず

僧正遍昭

わかやどは道もなきまであれにけり

つれなき人をまつとせしまに

題志らず

喜撰法師

わがいはは都のたつみまかぞすむ

よそうちやまと人はいふなり

源順、紀時文、阪上望城等勅を奉て、古今集以後殆んど五十年間の歌を撰定せり。後撰集これなり。この撰者五人を、世に梨壺の五人と稱す。梨壺とは昭陽舎のことにて、歌を撰びし處の名なり。

後撰は、古今に比ぶれば、著しく劣れるが如し。鴨長明の無名抄に「古今のとき、花實共に備はりて、其さままちくゝに分れたり。後撰には、よろしき歌、古今に取つくされて、後いくほども經されば、歌得かたくして、姿を擇はずして、心をさきとせり」といへるにても知らるゝなり。要するに、古今は花實共に備はり、これは質餘りありて、文足らざる歌の多きなり。古今後撰の二集に、拾遺集を加へて、三代集といふ。拾遺集は花山天皇自から撰はせ給ひしとも、或は一條天皇の時、大納言藤原公任勅を奉じて、撰びたりともいふ。然れども、此集は、天皇親しく撰び給ひ、公任卿は之が抄を作られしものならんとの説

眞に近きが如し。この集の歌は、幽玄深遠ならずして、餘韻なく、只管風姿のすなほなるをよしとして、撰びたりとぞ。

これより九十餘年を経て、白河天皇の御代に、藤原通俊、後拾遺和歌集を上りき。此集の歌人にて主なるものは、源經信、藤原公任、源重之、僧能因、良暹等と、閨媛には、紫式部、和泉式部、赤染衛門、大貳三位の流あり。其歌次第に古調に遠さかり、優艶にして、纖巧に流れたり。されは、寧ろ技術といふ點より觀察すれば、さすかに名歌といふべきもの多し。又、拾遺集に、神祇の部ありしに倣ひて、此集には新に釋教の部を立てたり。是より後、四十年にして、白河天皇の時、源俊賴、金葉集を上り、又、七十年にして、近衛天皇の時、藤原顯輔、詞華集を撰び、又、四十二年にして、後鳥羽天皇の時、藤原俊成、千載集を上りぬ。千載集の成りしは、是れ源賴朝が、朝府を鎌倉に開きし翌年の事なれども、其

集中の歌は、悉く平安時代のものなり。金葉集、詞華集は、古今集以來の風に飽きて、古調を慕ひしものなれども、輕妙巧緻を以て旨とし、只管新奇を求めたるより、好て詞の言ひかけなどを用ひしかば、俳諧歌に類する歌多きか如し。此風の率先者は、源俊賴、藤原顯輔、藤原基俊等にして、當時の歌人、此風に靡きし者多かりき。此時代にあらはれし、百首歌合集などに至りては、輕浮なる心に思ひたるまゝを述べ、まゝ俗語をさへ用ひたれば、奇怪なる歌多し。

是より先き、拾遺集の中に、連歌躰のものありしが、未だ連歌の名はなかりしに、金葉集出づるに及び、連歌の一部、始めて別に設けられぬ。詞華集また同じ。然れども、其證歌はいま茲に擧げずして、便宜に因り、之を室町時代の部分に擧ぐべし。藤原俊成の、千載集を撰びたる時には、金葉、詞華の風姿を惡しとや思ひけん。特に注意して、風姿

の優美なる限りを撰出せり。藤原俊成は、後鳥羽天皇に仕へて寵遇せられ、皇太后宮太夫正三位に至りし人なり。世に之を五條の三位といふ。幼にして聰慧、和歌を巧みにせり。俊成常に曰く、歌の佳なる處は、たゞ大躰を得るにあるのみ。雕琢のみを事とすべからずと。この故に俊成の歌多くは雅趣に富めり。俊成は、元久元年に、九十一にて薨せり。其子定家、次で和歌に巧みなりしかば、終に和歌を以て、其家の世業と爲すに至れり。そはまた、後にいふべし。

上に述べたるは、平安時代の、勅撰歌集なるが、もとより和歌最盛の時代なれば、私に撰びし歌集も亦多かりき。即ち、紀貫之の、新撰和歌集、藤原清輔の、讀詞華集、(こは鳥羽天皇の奏覽を経ざりしにより、勅を奉じて撰びしなれども、勅撰に列せず)藤原公任の、金玉集、能因法師の、玄々集等、最も有名なり。而して、凡河内躬恒、素性法師、在原業平、藤原敏行、大中臣能宣、伊勢、壬生忠岑等をはじめと

して、前にあけたる大家は、各、其家集ありて世に傳はる。また歌を詠み、及び作るとを教ふる書も、此時代に現はれそめぬ。藤原清輔の奥儀抄、袋草子、及び和歌初學抄、藤原基俊の悦目抄、藤原公任の新撰髓腦等は、其中にて最も見るべきものなり。かの鎌倉時代に至りて、順徳天皇の撰び給ひし八雲御抄、亦、大に貴はる。これより、和歌の法式に關する書、多く世にあらはれ、遂に和歌をして、狹隘なる天地の間に跼躄せしむるに至りしが、其遠源實にこゝにあり。此の如く、和歌の熾なりし間には、歌人に往々奇異なる言行の者ありしといふ。盡くは信じ難しといへども、亦以て當時の事情を窺ふに足るべし。さて能因法師は、かの『都をは霞と共にたちしかど、秋風ぞ吹く白河の關』といふ歌を作り、如何にも名吟なりと思ひしかど、實事ならざる事の譏られん事を口惜しく思ひ、暫く閉居して、日々

に顔を日に晒し、以ていかにも遠國に旅せし様を装ひ、さてこの歌を人に示しよといふ。滿廷の公卿は、遊惰なりしが、流石に歌の爲めには、病をも醸し生命をも失ひしなどの奇談、當時には少なからず。吉田令世か歴代和歌勅撰考に、

木曾義仲が、都を攻めつる其紛れに、門さしこめて、潛み居られつる俊成卿こそ、千載集をば撰ばれけれ、世の中覆り、君亡び給へども、共に生死を同じくせんとは思はず。よそに見なして引きこもられたる、ものきたなさは、何にかたどへん。歌詠む人のよわらかにして、世の中に補ひなきと、かばかりにも至れるは、皆かの心柔なるより、斯くは成りまがるにこそあれ、この中に居て歌集を撰ばれたるは、打ちあかり雅びたる業とや云はまし。又はいふかひなき稚子の、戯れに近しとやいはまし。

滔々たる大宮人は、實にかくの如くなりき。されども、試に思へ、薩摩守忠度は、平族中の人傑なり。それだに都落ちの時に、淀より引き返

して、俊成を訪ひ「撰集の御沙汰あるべきよし、生涯の面白に、一首なりとも御恩を蒙りたし、是に候卷物の中に、さりぬべき歌候はゞ、一首なりとも御恩をかゝふりて草の蔭にて嬉しと存じ候はゞ、遠き御守とこそなりまゐらせ候はんずれ。」と云ひしに、あらずや。俊成の之を諾せし時、忠度は「かはねを野山に晒さはさらせ、うき名を西海の波に流さはなかせ、今は浮世に思ひおく事なし。」と喜びて、さて一族の後を追ひしとぞ。藤原氏の驕奢を摸して、懦弱に流れしとはいへ、平氏の族は武人なり。此人にして猶然り。況や其他の者をや。されは、獨り俊成のみを咎むべきにもあらざるべし。

世の治亂盛衰は如何にもあれ、歌のみは獨り熾んなりし程に、歌合は一種の慰となりて、益其巧を弄せんがため、或は調度の品に付きて歌を合せ、或は一種の歌の中に、數箇の題を詠み込むなどの戯

も出で來れり。堀河天皇の如きは、最も歌を好ませ給ひて、百首を撰び給ひし事再度に及びぬ。また男女をことさらに番はせて、艶書合せといふをさへ、はじめ給ひぬ。

我國は上古以來、神祇を祭るには、神樂歌ありしが、平安時代に至りても、其新に作られしもの少からず。また里巷の謳歌を、唐樂の音調に合して、平安時代の人を喜はしむ、催馬樂あり。詩文妙句に、曲節を附して、吟誦せる朗詠あり。又、今様と稱して、當時の人の嗜好に投ぜし歌謳あり。これ長歌の衰へし代りに行はれしものなり。此等の催馬樂、朗詠、今様を總稱して、郢曲といひ、又唱歌とも稱ふ。今様は鎌倉時代に至りて殊に盛に行はれたるが如し。故に其例の如きも便宜により、これを鎌倉時代に譲る。

後撰集

延喜御時歌めしけるに奉りける

紀貫之

春霞たなびきにけりひさかたの

月のかつらも花やさくらん

あづまへまかりけるに過ぬるかたこひしく覺えけるほどに川を渡り

在原業平

ける波のたちけるをみて

いとしく過きゆくかたの戀しきに

うらやましくもかへるなみかな

延喜御時月次御屏風に

素性法師

あら玉のとしたちかへるあしたより

またるしものはうぐひすのこゑ

法師にならんと思ひ立ちける頃月をみて

藤原高光

かくばかりへがたく見ゆるよのなかに

たらしめはかかれとてしもうばたまの

僧正遍昭

はじめてかしらおろしける時物にかきつけける

うらやましくもすめる月かな

わがくろかみをなでずやありけん

拾遺集

入道式部卿親王の子の日に

大中臣能宣

千とせまでちぎれる松もけふよりは

君にひかれてよろづ世やへん

題志らず

全人

○ 櫻花にほふものからつゆけきは

このめも物をおもふなるべし

屏風に

わが宿のかきねや春をへたつらん

源 順

夏來にけりと見ゆる卯のはな

題まらず

よみ人まらず

櫻がり雨はふりきぬおなじくば

滞るともはなのかげにかくれん

子にまかりおくれてける頃東山にこもりて、中

務

咲けばちるさかねばこひし山ざくら

おもひたえせぬ花のうへかな

北宮のもぎの屏風に

源 公 忠

行やらでやまぢくらしつほどとぎす

さき一こそえのきかまほしさに

河原院にてあれたる宿に秋來といふ心を

惠 慶 法 師

八重葎しげれる宿のさびしさに

人こそ見えぬ秋は來にけり

紀 貫 之

思ひかねいもがりゆけば冬の夜の

川風さむく千どり鳴くなり

女四のみこの家の歌合に

阪 上 是 則

山がつと入はいへどもほどとぎす

まづはつ聲はわれのみぞきく

後拾遺集

むつきばかりに津の國にありける頃、人のもとにいひつかはしける

能 因 法 師

心あらん人に見せばや津のくにの

難波わたりのはるのけしきを

題まらず

淋しさに宿をたちいでてながむれば

いづくもあなじ秋の夕ぐれ

題まらず

世の中をなになげかまし山ざくら

花見るほどのこゝろなりせば

大納言行成卿物語りなどしてありけるが、内の御ものいみにこもれば
とて、急ぎかへりけるつとめて、鳥の聲にもよほされていひおこせけれ
ば、夜ふかゝりける鳥の聲は、函谷關の事にやと、いひつかはしたりける
を、立かへりて、これは逢阪の關に侍るとありければ

清少納言

夜をこめて鳥のそらねははかるとも

よにあふさかの關はゆるさじ

長樂寺に住みける頃、人のなにごとかと云ひければ、つかはしける、

良暹法師

粟式部

金葉集

思ひやれどふ人もなき山里の

かけひの水のこゝろぼそさを

上東門院中將

陸奥にくたりけるに、白川の關にて

能因法師

みやこをば霞とゝもにたちしかど

あきかぜぞ吹くしらかはの關

うづらなくまの、入江のはま風に

をばなゝみよる秋の夕ぐれ

水風晚涼といへることをよめる

風ふけばはすのうき葉に玉こえて

全人

源俊賴

すやしくなりぬ日ぐらしの聲
關路千鳥

源 兼 昌

淡路島かよふ千どりのなくこそ
いく夜ねさめぬ須磨の關守

題しらず

中納言雅定

逢ふことはいつとなきさのはま千鳥

波のたちぬにねをのみぞなく

詞華集

一條院の御時奈良の八重櫻を人の奉りけるを其をり御前に侍りければ、
その花を題にて歌よめとおほせとありければ、

伊勢大輔

いにしへのならのみやこの八重ざくら

けふこゝのへに匂ひぬるかな
長恨歌のこゝろを

源 道 濟

思ひかねわかれしのべを來て見れば

あさちがはらに秋かぜぞ吹く

曾根好忠

題えらず

秋の野の草むらごどにおく露は

よるなく虫のなみだなりけり

花 山 天 皇

題えらず

こゝろみにはかの月をも見てしがな

我が宿がらのあはれなるかと

源 俊 賴

白河に花見にきてよめる

えら河の春のこずえを見わたせば

松こそ花のたえまなりけれ

千載集

故郷花

さいなみやしがの都はあれにしを

よみ人しらず

昔ながらのやまさくらかな

曉聞郭公

後徳大寺左大臣

ほととぎすなきつるかたをながむれば

たゞありあけの月ぞのこれる

秋のうた

俊成

ゆふされば野への秋風身にしみて

うづら鳴くなり深くさのさと

旅

全人

うらつたふ磯のどまやのかぢまくら

きしもならはぬ波のおどかな

戀のうた

あふことはいなさほそ江のみをつくし

清輔

ふかきしるしもなき世なりけり

月前戀

西行法師

なげとて月やはものを思はする

かこち顔なるわかなみだかな

堀川院の御時百首の歌奉りけるとき梅の花の歌とてよめる

大納言師頼

今よりは梅さくやどはこゝろせん

またぬに來ます人もありけり

落花滿路といへるこゝろをよめる 赤染衛門

ふゆばをしふまねばゆかにかたもなし

あゝるづくしの山ざくらかな

堀川院の御時百首の歌奉りけるとき襟衣のこゝろをよめりける

松風のおとだにわきはさびしきに

ころもりのなり玉川のさと
オヌタ
うらるる

源 俊 順

二百十二

教科適用 日本文學小史上卷 終

明治二十六年三月廿五日印
同 年三月廿七日出 版 刷
同 二十七年七月廿五日訂正三版印刷
同 二十七年七月三十日發 行
同 三十一年三月十五日八 版



著 作 者
發 行 者
代 表 者
賣 捌 所

(文學小史上卷)
定價金五拾錢

東京市本郷區駒込千駄木林町百七十一番地
三 上 參 次

全市本郷區駒込四片町十番地
高 津 鋏 三 郎

東京市日本橋區本町三丁目十七番地
金港堂書籍株式會社

右社長
原 亮 三 郎

各府縣特約

尋常^{中學校}及高等女學校倫理、國語、漢文、英語、地、歷、藝科

井上哲次郎著◎^{新編}倫理教科書定價各貳拾五錢 秋山四郎編◎通鑑綱目定價

物集高見撰◎^{新撰}國文中學讀本定價二圓拾八錢 中根 淑編◎^撰漢文讀本定價貳拾錢

新保磐次編◎中學國文讀本定價二圓拾錢 中根 淑編◎^撰漢文讀本定價貳圓拾錢

新保磐次著◎中學國文典定價卅五錢 井上十吉著◎英文讀本定價壹圓廿五錢

新保磐次著◎中學國文史定價四拾錢 齋藤秀三郎著◎英語讀本定價六拾五錢

高津敏三郎著◎日本中文典定價六拾五錢 田邊禮三郎編◎^{新編}邦小史定價卅五錢

三上參次著◎^{子女}日本文學小史定價壹圓拾錢 高津敏三郎著◎^{新編}邦小史定價各四拾錢

新保磐次著◎日本讀本定價壹圓五拾錢 新保磐次著◎^{訂補}日本史要定價各四拾五錢

秋山四郎編◎中學漢文讀本定價貳圓五拾錢 三宅米吉校◎中學日本地誌定價六拾錢

秋山四郎編◎中學漢文讀本定價貳圓五拾錢 三宅米吉校◎中學外國地誌定價七拾錢

秋山四郎編◎史記定價貳圓五拾錢 神保小虎著◎^{新編}地文教科書定價七拾錢

秋山四郎編◎史記定價貳圓五拾錢 神保小虎著◎^{新編}地文教科書定價七拾錢



広島大学図書

2000034400

